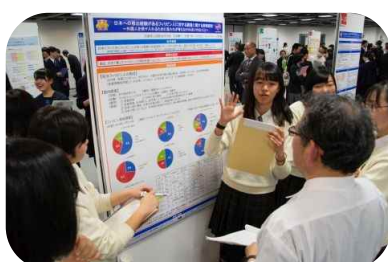
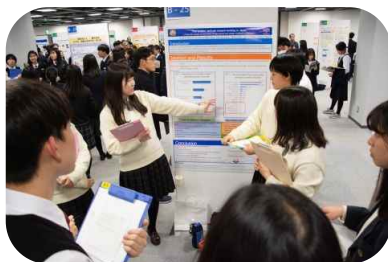
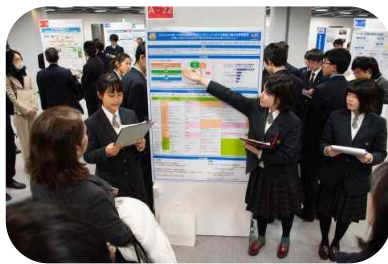


平成27年度指定スーパーグローバルハイスクール

研究報告書 第4年次

平成31年3月



第4年次(平成30年度)SGH研究報告書の発行にあたって

校長 松本 修身

本校は、平成27年度に文部科学省のスーパーグローバルハイスクールの指定を受け、平成31年度までの5年間の予定で、この事業への取り組みを進めています。

この冊子は、本校の4年目の取り組みを通して、生徒が積み重ねた研究活動の成果とその成果に係る評価をまとめたものです。

本校のスーパーグローバルハイスクール研究開発構想名は、「移民研究を通して日本の未来の選択肢を提案するプロジェクト」です。移民に関する研究をもとにして、今日的な国内問題の学習を積み重ね、「世界の人々が共に生きる場所」としての日本の未来の選択肢を導き出し提案する課題研究を行い、「高いコミュニケーション能力」、「自国および他国の文化に関する深い知識と理解」、「これからの日本および世界のために献身的に行動ができる実践力」の3つの資質を身につけ、多様化する社会情勢を多角的かつ柔軟にとらえ、未来に向けて建設的な考え方ができるグローバル・リーダー育成に資する教育プログラムとして完成することを目指しています。

具体的な活動計画については、高校3年間で3期に分けており、第1期(1年次1学期～2学期)は主として「導入」・「学習」・「調査」について、第2期(1年次3学期～2年次2学期)は主として「体験」について、さらに第3期(2年次3学期以降)は「研究」・「発表」について取り組む時期として位置づけ、生徒が自らの取り組みを徐々に深化させることができるように設定しています。2年次終了時までは全員が取り組み、その中から3年次で学校設定科目「提案 日本の選択」を選択した生徒に対して、研究論文の作成と発表を課しています。

平成30年度は、本校がSGHの指定を受け5年間に渡る取り組みを始めて、4年目に当たります。平成29年9月29日に文部科学省が、「平成27年度SGH指定校に対する中間評価」を公表しました。これによると、本校は5段階評価の上から2番目、「これまでの努力を継続することによって、研究開発のねらいの達成が可能と判断される」との評価をいただきました。この評価の中で指摘された課題については、校内で検討し今年度の取り組みの中で、英語科で使用しているCan-do Listを活用するとともに、SGHルーブリック評価を通して英語力のさらなる伸長を目指すこととしています。

これまでの取り組みの評価に関する詳細については本冊子をご覧ください。生徒たちは、この課題研究活動を通して、日々成長していますが、それを適切・的確に評価することは、たいへん難しく、次年度の課題であると考えています。

最後になりましたが、本校の事業構想にご理解をいただき、ご尽力、ご支援いただいた多くの関係者の方々に心から感謝いたします。

兵庫県立国際高等学校SGH研究構想



移民研究を通して日本の未来の選択肢を提案するプロジェクト



持続的自己開発へ（高等教育に接続、リーダーとしての成長）

【生徒の成長】

【外部支援・連携】

*太字・下線は主たる連携大学

卒業時点

- 主体的意識の醸成
- 研究手法の習得
- 知識の広がり・深まり

発信

提案 日本の選択
”世界の人々が共に生きる場所を目指して”

<発表会参加・評価>

関西学院大学 教員・研究

研究

- 踏み込んだ世界観
- 様々な要因(正・負・矛盾の存在)の理解
- 錯綜したメカニズムの理解
- 答えを求める思索
- 研究に係る評価
- 日本社会への視点

論文 提案 日本の選択

国内問題の学習・研究

学校設定科目の学習活用

生徒間の議論を通じた学

下級生指導 昼休み辻説法

[学校設定科目]
異文化理解(英語)
外国語としての日本語
世界を読み解くための思想
国際ボランティア研究
世界の経済
日本文化
食の文化

<研究支援>

関西学院大学
教員・研究員
米コロンビア大学
経済学研究員
(米国での研究情報)
神戸松蔭女子学院大学

実体験

- 異文化を実体験
- 各自目標設定

- アメリカ、カナダ、イギリスに分かれて2次生全員で実施
- 交流校での活動(共同研究、日本紹介、授業参加、小学校交流)
- 4泊のホームステイ(基本的に1家庭に1生徒)
- カンボジア スタディツアー

<海外交流>

アメリカ:SCS校、TBS校、
カナダ:PCS校、
イギリス:CUS校

調査

- 英文情報検索力
- 海外との交信力
- 大局的な世界観
- 錯綜したメカニズムへの視点
- 国毎の考え方の違いの理解
- 「労働対価」の差異に対する認識

移民マップ研究の日本でのハブ校を目指す

世界移民マップ作成	移民情報収集			
	調査項目	対象国(例)	想定課題	関連情報
受入数と国	アメリカ	職業・賃金	失業率	
出国先と数	カナダ	社会福祉	出生率	
方針と制度	ドイツ	教育	平均賃金	
市民権・参政権	フィリピン	宗教	GDP	
	日本	国民感情	国際収支	

<講義・研究支援>

関西学院大学
国際学部
社会学部
総合政策学部

グローリー株式会社
(海外事業展開企業)

日本赤十字社

米タフツ大学
国際関係学研究員
(米国での研究情報)

慶応大学
つくば言語技術教育研究

学習

- 世界への視野の拡大
- 歴史的認識
- 多様な原因の認識

分類	原因・理由	
	強制移住	人身売買
避難(難民)		災害・飢饉
		迫害・弾圧
自発的移民	職業・賃金	戦争・暴力
	気候・生活	
	要請	

入学時

- グローバル化の重要側面への気付き
- 自分の日常との比較

出発点

人はなぜ国を越えて移り住むのか。
生きる場所としての自分の周りの環境を見つめ直す。

国際問題研究者による基調講演
関西学院大学

文部科学省の研究指定による継続的な実践

プログラムを支える
ファンデーション

「言語技術習得」を通じた論理的思考力の強化

「国際科」専門校としての特色あるカリキュラム

国際高校「言語研究チーム」の設置

目次

PART1: 平成 30 年度 SGH 研究開発完了報告

1 平成 30 年度 SGH 研究開発完了報告	1
-------------------------------	---

PART2: 実施報告書

1 SGH 構想調書の概要	8
2 平成 30 年度スーパーグローバルハイスクール課題研究活動の実施状況	10
3 本校における取組体制	13
4 「第 1 回 SGH 運営指導委員会」記録	15
5 「第 1 回 SGH 研究開発委員会 (企画推進委員会)」記録	16
6 課題研究活動の取組	
(1) C.C.C. (総合的な学習の時間) におけるディベート課題研究活動	17
(2) C.C.C. (総合的な学習の時間) における「移民マップ」課題研究活動	19
(3) C.C.C. (総合的な学習の時間) における海外研修に向けての課題研究活動	21
(4) 学校設定科目「提案日本の選択」における取組	22
(5) 「昼休み辻説法」における課題研究活動	24
(6) 海外フィールドワーク「フィリピンスタディツアー」における課題研究活動	25
(7) 海外研修 (アメリカ合衆国・カナダ・イギリス) における課題研究活動	29
(8) 「SGH フィールドワーク in 姫路 2018」における課題研究活動	31
(9) 国内フィールドワーク「フィールドワーク in 池田 2019」における課題研究活動	34
(10) 国内フィールドワーク「フィールドワーク in ワン・ワールド・フェスティバル 2019」における 課題研究活動	36
(11) 国内フィールドワーク「SGH フィールドワーク in 浜松 2019」における課題研究活動	37
(12) 国内スタディツアー「スタディツアー@関西学院大学・立命館大学・神戸市外国語大学」 における課題研究活動	40
(13) 国内スタディツアー「SGH スタディツアー@関西学院大学 2018」における課題研究活動	43
(14) 国内スタディツアー「SGH スタディツアー@大阪大学 2018」における課題研究活動	44
(15) 国内スタディツアー「スタディツアー@移民政策学会 2018 年度年次大会」における課題 研究活動	45

(16)	国内スタディツアー「スタディツアー@移民政策学会 2018 年度冬季大会」における課題研究活動	47
(17)	SGH 講演会における課題研究活動【基調講演】	49
(18)	SGH 講演会における課題研究活動【第 1 回 SGH 特別講演】	51
(19)	SGH 講演会における課題研究活動【第 2 回 SGH 特別講演】	53
(20)	「平成 30 年度 SGH 課題研究中間発表会」における課題研究活動	55
(21)	校外の発表会「2018 年度スーパーグローバルハイスクール全国高校生フォーラム」における課題研究活動	57
(22)	校外の発表会「リサーチフェスタ 2018」における課題研究活動	59
(23)	校外の発表会「第 6 回高校生国際問題を考える日」における課題研究活動	61
(24)	校外での英語による「SGH 高槻高等学校グローバルヘルス高校生フォーラム」における課題研究活動	64
(25)	校内での英語による「ドイツフンボルト校生との移民・難民問題に関するディスカッション」における課題研究活動	65
(26)	校内での英語による「オランダ教員との移民についてのディスカッション」における課題研究活動	66
(27)	校外の英語での普及活動「SGH プレゼンテーション@西宮市立西宮浜中学校」における課題研究活動	67
(28)	校外での普及活動「高校生による移民の歴史発見プロジェクト」における課題研究活動	69
7	課題研究活動以外の取組	
(1)	学校設定科目「言語技術における取組」	71
(2)	科目「社会と情報」における取組	72
8	課題研究活動の評価	
(1)	評価方法	73
(2)	課題研究活動の評価	74
PART3: 関係資料		
1	平成 30 年度実施教育課程表	100

平成 30 年度 SGH 研究開発完了報告
1 平成 30 年度 SGH 研究開発完了報告
(別紙様式 3)

平成 31 年 3 月 29 日

研究開発完了報告書

文部科学省初等中等教育局長 殿

住所	〒650-8567 兵庫県神戸市中央区下山手通 5-10-1
管理機関名	兵庫県教育委員会
代表者名	教育長 西 上 三 鶴 印

平成 30 年度スーパーグローバルハイスクールに係る研究開発完了報告書を、下記により提出します。

記

1 事業の実施期間

平成 30 年 4 月 2 日(契約締結日) ~ 平成 31 年 3 月 29 日

2 指定校名

学校名 兵庫県立国際高等学校
学校長名 松本 修身

3 研究開発名

移民研究を通して日本の未来の選択肢を提案するプロジェクト

4 研究開発概要

1 年次では、ディベート課題研究活動や「移民マップ」課題研究活動を実施し、移民研究を通して創造的思考力、批判的・論理的思考力の育成に努めた。2 年次では、海外研修における課題研究活動を通して移民研究とともに異文化理解を養成した。3 年次生では GLC の生徒が学校設定科目「提案日本の選択」で 2 年間の移民研究の成果を論文にまとめ、創造的思考力、批判的・論理的思考力の育成と向上に取り組んだ。また、並行して、国内外でスタディツアーやフィールドワーク、講演会などを実施することで移民研究を進める契機とした。さらに、ドイツのフンボルト校の高校生、オランダから教員を招き、本校生と移民に関するディスカッションを英語で行った。成果については、校内および校外で発表を行った。また、移民政策学会において、6 人の生徒が研究成果の発表を行った。成果の普及については、西宮市立西宮浜中学校で中学生を対象に英語による成果の発表を行い、芦屋市立上宮川文化センターでは一般の人を対象に成果の発表を行った。

5 管理機関の取組・支援実績

(1) 実施日程

業務項目	実施日程											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
運営指導委員会等												
課題研究発表会												
ひょうごグローバルリーダー育成推進懇話会運営												
高大連携による支援、ALTの増員												
グローバルリーダー育成の事業実施												

(2) 実績の説明

高大連携による支援

県教育委員会と包括連携協定を結んでいる3大学(京都大学、大阪大学、神戸大学)の協力を得て、課題研究に係る教授・大学院生の派遣、外国人留学生の活用等、手厚い支援を行うための体制を整えている。(県立国際高校対象生徒数:358名)

成果の普及と還元

京都大学との共催で「高大連携課題研究合同発表会」(11月)を、SGH指定校である県立兵庫高等学校を幹事校とし、大阪大学との共催で「高校生『国際問題を考える日』」(2月)を実施したほか、県内のSGUである関西学院大学での、SGH甲子園(3月)を後援するなど、生徒に成果発表の機会を持たせ、研究成果の普及と還元を図った。

「ひょうごグローバルリーダー育成推進懇話会」の開催

県内SGH指定校、アソシエイト校、ひょうごスーパーハイスクール指定校、包括連携協定を結んでいる3大学及びSGUである関西学院大学の関係者、県内のグローバル企業関係者等から構成される懇話会を設置し、各校のSGHの取組について情報交換を行うとともに、事業運営における課題等について、企業や大学関係者からの指導助言をうけ、SGH事業の推進及び県内高等学校への普及活動を図った。

ALT(外国語指導助手)の増員

県内におけるグローバル人材育成拠点校と位置付け、ALTを重点配置した。日常の英語活動や異文化理解に係る教育を強力に推進したほか、英語によるプレゼンテーションの指導、海外フィールドワークの事前指導の充実を図った。(県立国際高校対象生徒数:358名)

グローバル人材育成に関する事業等の実施

ALTの活動や宿泊生活を通じて、高校生が論理的思考力や伝える力、コミュニケーション能力やチャレンジ精神を身につけることができる「ひょうごグローバルリーダー育成キャンプ」(夏3泊4日、冬2泊3日)を実施。国際高校からは1名が参加し、校内でその成果を広めた。

委員会を通じた管理と指導助言

7月と3月に開催された運営指導委員会及び成果発表会に担当指導主事を派遣し、大学・企業・関係機関関係者等の専門家と意見交換を図りながら、SGH事業の成果と評価をもとに指導助言を行った。

6 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間(平成30年4月2日～平成31年3月29日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
ディベート課題研究活動	1年次	1年次	1年次	1年次	1年次	1年次	1年次					
「移民マップ」課題研究活動							1年次	1年次	1年次			
フィリピンスタディツアー課題研究活動			1年次	1年次	1年次	1年次	1年次	1年次	1年次	1年次	1年次	1年次
「海外研修」課題研究活動	2年次	2年次	2年次	2年次	2年次	2年次	2年次	2年次	2年次	1年次	1年次	1年次
「提案日本の選択」課題研究活動	3年次	3年次	3年次	3年次	3年次	3年次	3年次	3年次	3年次	3年次	3年次	3年次
SGH プロジェクトチーム課題研究活動	全年次	全年次	全年次	全年次	全年次	全年次	全年次	全年次	全年次	全年次	全年次	全年次

(2) 研究開発の実績

ディベート課題研究活動

[実施規模]1年次生全員対象(120人)

[成果の普及]校内の中間発表会で成果発表を行った。

「移民マップ」課題研究活動

[実施規模]1年次生全員対象(118人)

[成果の普及]校内の発表会で成果発表を行った。また、第6回高校生「国際問題を考える日」で成果を発表した。

「海外研修」における課題研究活動

[実施規模]2年次生全員対象(120人)

[成果の普及]校内の中間発表会で成果発表を行った。

学校設定科目「提案日本の選択」論文作成における課題研究活動

[実施規模]3年次 GLC 対象(22人)

[成果の普及]校内外の発表会で成果の報告をした。このうち、リサーチフェスタ2018において、ビッグデータ賞およびロジカルデザイン賞を受賞した。また、移民政策学会2018年度年次大会で3人の生徒が研究成果の発表を行った。

「フィリピンスタディツアー」における課題研究活動

[実施規模]1年次生 GLC 対象(20人)

[成果の普及]校内の中間発表会で成果発表を行った。また、第6回高校生「国際問題を考える日」で成果を発表し、全体講評において優れた研究として取り上げられた。

「フィールドワーク in 浜松 2019」における課題研究活動

[実施規模]1,2年次生対象(23人)

[成果の普及]調査結果をデータベースとして成果集にまとめ、校内外に配布した。この活動の内容は中日新聞(2019年2月20日朝刊)に掲載された。

「フィールドワーク in 姫路 2018」における課題研究活動

[実施規模]1,2年次生対象(9人)

[成果の普及]校内外の発表会で成果の報告を行った。このうち論文としてまとめた2年次生が移民政策学会2018年度冬季大会で成果の発表を行った。

「フィールドワーク in 池田 2019」における課題研究活動
 [実施規模]1,2 年次生対象(16 人)
 [成果の普及]報告書および調査結果をデータベースとしてまとめ成果集として配布した。

「フィールドワーク in ワン・ワールド・フェスティバル 2019」における課題研究活動
 [実施規模]1 年次生全員対象(118 人)
 [成果の普及]報告書をまとめ成果集として配布した。

「スタディツアー@関西学院大学・立命館大学・神戸市外国語大学」における課題研究活動
 [実施規模]1 年次生全員対象(120 人)
 [成果の普及]報告書をまとめ成果集として配布した。

「スタディツアー@関西学院大学 2018」における課題研究活動
 [実施規模]2 年次生対象(6 人)
 [成果の普及]校内外の発表会で成果を報告した。第 6 回高校生「国際問題を考える日」で成果を発表し、2 年次の 1 つのグループが全体講評において優れた研究として取り上げられた。

「スタディツアー@大阪大学 2018」における課題研究活動
 [実施規模]1 年次生対象(2 人)
 [成果の普及]報告書をまとめ成果集として配布した。

「スタディツアー@移民政務学会 2018 年度年次大会」における課題研究活動
 [実施規模]2,3 年次生対象(10 人)
 [成果の普及]報告書をまとめ成果集として配布した。3 年次生 3 人が研究の成果を発表した。また、学会発表した内容は校内の中間発表会および校外の発表会で報告した。

「スタディツアー@移民政務学会 2018 年度冬季大会」における課題研究活動
 [実施規模]2,3 年次生対象(10 人)
 [成果の普及]報告書をまとめ成果集として配布した。2 年次生 3 人が研究の成果を発表した。また、学会発表した内容は校内の中間発表会および校外の発表会で報告した。

「SGH 基調講演」における課題研究活動
 [実施規模]1 年次生全員対象(120 人)
 [成果の普及]報告書をまとめ成果集として配布した。

「SGH 特別講演会(第 1 回特別講演・第 2 回特別講演)」における課題研究活動
 [実施規模]全年次生対象(358 人)
 [成果の普及]報告書をまとめ成果集として配布した。第 2 回特別講演で高校生の難民の意識がどのように変化したか調査した生徒がその結果を論文にまとめ、移民政務学会 2018 年度冬季大会で成果を報告した。

「SGH 課題研究中間発表会」における課題研究活動
 [実施規模]全年次生対象(358 人) 発表生徒 18 人
 [成果の普及]各年次の課題研究の成果を全校生徒と外部に発表した。この発表会の内容は神戸新聞(2018 年 12 月 20 日朝刊)に掲載された。

「校外の発表会」における課題研究活動
 [実施規模]全年次生対象(65 人)
 [成果の普及]移民政務学会 2018 年度年次大会で 3 人、移民政務学会 2018 年度冬季大会で 3 人が研究成果の報告をした。また、リサーチフェスタ 2018 において、ビッグデータ賞およびロジカルデザイン賞を受賞した。第 6 回高校生「国際問題を考える日」において、本校が開発した課題研究活動ルーブリックを県内外の高等学校 6 校に提示し、その活用について説明した。

「昼休み辻説法」における課題研究活動
 [実施規模]全年次生対象(49 人)
 [成果の普及]課題研究の成果を下級生に伝達報告することで、研究活動をさらに進める契機となった。

「ドイツフンボルト校生との移民・難民問題に関するディスカッション(英語)」における課題研究活動
 [実施規模]全年次生対象(7 人)

- [成果の普及] 報告書をまとめ成果集として配布した。
- 21 「オランダ教員との移民についてのディスカッション(英語)」における課題研究活動
[実施規模]1年次生対象(9人)
[成果の普及] 報告書をまとめ成果集として配布した。
- 22 「SGH プレゼンテーション@西宮市立西宮浜中学校」における課題研究活動(普及活動)
[実施規模]3年次生対象(7人)
[成果の普及] 本校の課題研究の成果を中学生 80 人、教員 9 人、西宮市教育委員会職員 2 人に英語でプレゼンテーションした。
- 23 「高校生による移民の歴史発見プロジェクト」における課題研究活動(普及活動)
[実施規模]1,2年次生対象(15人)
[成果の普及] 一般市民 40 人に、課題研究活動の成果を報告した。
- 24 学校設定科目「言語技術」での取組
[実施規模]2年次生対象(19人)
[成果の普及]授業のなかで論文を作成し、3人が移民政策学会 2018 年冬季大会で研究成果を報告した。

7 目標の進捗状況、成果、評価

(1) 検証および評価の方法

本校が作成した「兵庫県立国際高等学校 スーパーグローバルハイスクール ルーブリック」を活用することで課題研究活動の成果を検証した。このルーブリックは次の 3 つの観点について評価を行うものである。すなわち、(a)創造的思考力、(b)批判的・論理的思考力、(c)異文化理解の 3 つの観点について 4 段階で評価するものである。

この「兵庫県立国際高等学校 スーパーグローバルハイスクール ルーブリック」を基に、ディベート課題研究活動のルーブリック、「移民マップ」課題研究活動のルーブリック、学校設定科目「提案日本の選択」における論文用のルーブリックを作成し、それぞれの課題研究活動でこれらのルーブリックを使って評価を行った。なお、これらの課題研究活動では、取り組みを始める最初の段階でルーブリックを生徒に示し、身につけてほしい能力や資質について説明した。

あわせて、本校のルーブリックを基に「発表用ルーブリック」を作成し、これを用いて中間発表会において発表者全員が自己評価を行った。

最後に、本校のルーブリックを基に作成した「異文化理解に関するルーブリック」を用いて、1年次生は入学前と 2月に、2年次生は 2月に自己評価を行い、その変化を分析した。

(2) 研究開発の成果とその効果

3年次生全員を対象に 3年間の課題研究活動を評価した。評価には「SGH 自己評価票(兵庫県立国際高等学校 SGH ルーブリック)」を使用し、(a)創造的思考力、(b)批判的・論理的思考力、(c)異文化理解、という 3 つの観点について 4 段階で自己評価を行った。あわせて、3 つの観点のうち、最も伸びた力を回答させた。最後に、3年間で何が変わったかを自由記述させた。なお、中間発表会において外部支援員にも同じ評価票を用いて評価を実施した。

まず、学校設定科目「提案日本の選択」選択者における今年度の 3年次生(14回生)と昨年度の 3年次生(13回生)の比較分析を行う。学校設定科目「提案日本の選択」選択者で、(a)創造的思考力に関してはスコア 4 をつけた生徒が 38.1%であった。昨年度の 3年次生の学校設定科目「提案日本の選択」選択者で、(a)創造的思考力に関してはスコア 4 をつけた生徒が 20.8%であり、今年度の 3年次生(14回生)の方が 17.3%高かった。次に、(b)批判的・論理的思考力に関して、「提案日本の選択」選択者でスコア 4 をつけた生徒は 23.8%であった。一方、昨年度の 3年次生(13回生)の学校設定科目「提案日本の選択」選択者で、(b)批判的・論理的思考力に関してはスコア 4 をつけた生徒が 29.2%であり、今年度の 3年次生(14回生)の方が 5.4%低かった。最後に、(c)異文化理解に関してスコア 4 をつけた「提案日本の選択」選択者は 23.8%であった。これに対して、昨年度の 3年次生の学校設定科目「提案日本の選択」選択者で、(c)異文化理解に関してスコア 4 をつけた生徒は 37.5%であり、今年度の 3年次生(14回生)の方が 13.7%低かった。ちなみに、3 つの観点のうち最も伸びたと思う力は何かという質問に対して、

「提案日本の選択」選択者の今年度の3年次生は、(b)批判的・論理的思考力と回答した生徒が42.9%と最も多く、昨年度の3年次生も(b)批判的・論理的思考力と回答した生徒が最も多く41.7%で、今年度の3年次生の方が1.2%高かった。

この結果から、学校設定科目「提案日本の選択」選択者における今年度の3年次生は、昨年度より(b)創造的思考力が向上したといえる。これは昨年度より早く論文作成に取り組んだことで、独自の視点で解決策を考える力がついたことがその要因である。一方で、(b)批判的・論理的思考力と(c)異文化理解は今年度の3年次生は昨年度よりもスコアは低下した。しかし、最も伸びたと思う力は(b)批判的・論理的思考力と答えている生徒が昨年度の3年次生よりも多いことから、この「提案日本の選択」課題研究活動では批判的・論理的思考力の育成に効果があることが改めて示されたといえる。

次に外部支援員と「提案日本の選択」選択者との比較分析を行う。(a)創造的思考力に関してはスコア4をつけた生徒が38.1%であり、一方、スコア4をつけた外部支援員は37.5%で生徒の方が0.6%高かった。次に、(b)批判的・論理的思考力に関して、「提案日本の選択」選択者でスコア4をつけた生徒は23.8%であり、一方、スコア4をつけた外部支援員は42.9%で外部支援員の方が19.1%高かった。

この結果から、外部支援員からも本校の課題研究活動は(b)批判的・論理的思考力の育成に効果があるということが証明された。

最後に、学校設定科目「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒における今年度の3年次生(14回生)と昨年度の3年次生(13回生)の比較分析を行う。学校設定科目「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒で、(a)創造的思考力に関してはスコア4または3をつけた生徒が50.5%であった。昨年度の3年次生の学校設定科目「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒で、(a)創造的思考力に関してはスコア4または3をつけた生徒が35.1%であり、今年度の3年次生(14回生)の方が15.4%高かった。次に、(b)批判的・論理的思考力に関して、「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒でスコア4または3をつけた生徒は44.3%であった。一方、昨年度の3年次生(13回生)の学校設定科目「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒で、(b)批判的・論理的思考力に関してはスコア4または3をつけた生徒が36.2%であり、今年度の3年次生(14回生)の方が8.1%高かった。最後に、(c)異文化理解に関してスコア4または3をつけた「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒は76.3%であった。これに対して、昨年度の3年次生の学校設定科目「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒で、(c)異文化理解に関してスコア4または3をつけた生徒は65.6%であり、今年度の3年次生(14回生)の方が10.7%高かった。

この結果から、「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒が昨年度よりも(a)創造的思考力、(b)批判的・論理的思考力、(c)異文化理解のすべての力が向上したことがわかる。これは本校全体の課題研究活動の成果が昨年度より向上したことを表している。

(3) SGH 中間評価に対する対応状況と改善策

SGH 中間評価では、「なお、『英語を用いて何かをする』事案は詳細な計画やリフレクションがあるが、課題設定とその取組内容の深まりについては、通り一遍の感があるためこの点は改善が望まれる。」という指摘を受けた。この指摘を受け、校内のSGH推進委員会で審議し次の改善策を立案し実施した。

「SGH プレゼンテーション@西宮市立西宮浜中学校」を実施し、中学生を対象に英語で課題研究活動の成果を報告した。

「ドイツフンボルト校生との移民・難民問題に関するディスカッション」および「オランダ教員との移民についてのディスカッション」を実施し、英語でディスカッションする機会を設け、課題研究活動を進める契機とするとともに、英語力の向上に努めた。

8 次年度以降の課題及び改善点

(1) 研究開発・実践の過程で生じた課題

研究方法に関する課題

SGH 校内推進委員会において、生徒の「移民マップ」の考察について一部に論理の飛躍がみられ、これは3年次において「提案日本の選択」で生徒が作成した論文についても同様の論理の飛躍が見られるという意見が出された。最終的に論文の作成に向けて、基本的な資質や能力を1年次から身につけるように取り組むことが課題である。

また、移民政策学会での本校生の発表において、調査方法や調査結果の妥当性について検討

するように指摘された。また、調査の分析についてもさらに深く行うことを求められた。本校では、国内外での多くのフィールドワークを通して調査を行っているが、調査方法やその分析方法を検討することが課題である。

異文化理解の育成に関する課題

これまで課題研究活動を通して、創造的思考力と批判的・論理的思考力の育成に焦点を当てて取り組んできた結果、これらの力の向上が図られ一定の成果をあげることができた。一方、学校設定科目「提案日本の選択」を選択している生徒の異文化理解の力は向上していないことがわかった。特に、2 年次生(15 回生)の異文化理解の力の向上は重要な課題である。本校には他の国にルーツを持つ生徒も多く、異文化理解の力の向上は今後の重要な課題である。

評価方法の課題

ルーブリックを用いた課題研究活動の評価結果から、生徒全員の(a)創造的思考力、(b)批判的・論理的思考力、(c)異文化理解、3つの力すべてが向上したことがわかった。これによりルーブリックを使った課題研究活動には一定の効果があることが証明された。今後は、更なる力をつけるためにルーブリックを検証および改善することが課題である。

(2) 今後の取組

研究方法に関する改善

「移民マップ」作成の目標を最終的に論文の研究に向けての基礎的な資質や能力を身につけるための活動とする。具体的には次の力の育成を目指す。

- (a) 情報を的確に理解し効果的に表現する力
- (b) 社会的事象について資料に基づき考察する力
- (c) 日常の事象や社会の事象を数理的に捉える力

これらの力をつけるために、次のことを行う。

- (ア) データから必要な情報を収集しグラフを作成する
- (イ) グラフを基に、変化が顕著にわかる3つ以上の年代を取り上げる
- (ウ) 先行研究について学び、移動の要因について、移出国のプッシュ要因と移入国のプル要因の両方に着目して考察を行う
- (エ) 先行研究を通して、移動の要因には、経済的な要因、政治的な要因、社会的な要因、歴史的な要因などがあり、このうちどのような要因で移動が生じたかを根拠に基づいて明らかにする

次に、課題研究活動の調査方法や調査結果の分析について、連携大学の協力支援を受けることにより調査方法や分析の改善を行う。

異文化理解の育成に関する改善

学校設定科目「提案日本の選択」の課題研究活動を通して、本校に在籍する他の国にルーツを持つ生徒に焦点を当てて、彼らがどのような困難を経験し、その困難を乗り越えてきたかを分析する。具体的にはエスノグラフィーの手法を用いて調査分析を行うことにより論文を作成する。この論文を全校生に発表し共有することで異文化理解の力の向上を目指す。

評価方法の改善

生徒の更なる力の向上を目指してルーブリックの改善を検討する。具体的には、専門家の支援と助言を受けてルーブリックのバージョンアップを図る。

(3) 成果の普及のための取組

中学校への成果の普及

次年度も、地元の中学校との連携関係を継続し、本校が SGH 課題研究活動で取り組んできた成果について、英語で発信する機会を設ける。

学会での研究発表

次年度も継続して移民政策学会と連携し、学会において生徒の研究成果の発表を行う。

校内・校外発表会での成果の普及

次年度も継続して校内および校外の発表会において、積極的に研究成果の発表を行う。

実施報告書

1 SGH 構想調書の概要

指定期間	ふりがな	ひょうごけんりつこくさいこうとうがっこう				所在都道府県	兵庫県
27～31	学校名	兵庫県立国際高等学校					
対象学科名	対象とする生徒数					学校全体の規模	
	1年	2年	3年	4年	計	国際科 総在籍者数 358名	
国際科	118	120	22		260		
研究開発構想名	移民研究を通して未来の日本の選択肢を提案するプロジェクト						
研究開発の概要	移民研究の上に今日的な国内問題の学習を積み重ね、「世界の人々が共に生きる場所」としての未来の日本の選択肢を導き出し提案する課題研究を実施し、グローバル・リーダー育成に資する教育プログラムとして完成する。						
研究開発の内容等	- 1 全体	<p>(1) 目的・目標</p> <p>本格的な多文化共生社会の到来により、私たちは国際問題と国内課題を一体的に取り扱わなければならない。共生社会に生じる課題や困難を克服し、この国を世界の人々が共に生きる豊かな場所として発展させる役割を担うグローバル・リーダーの育成を目指す。国際高校が目指すグローバル・リーダーとは、多文化を受容し、自ら発信し、社会に貢献できる人材のことである。多様化する社会情勢を多角的かつ柔軟にとらえ、未来に向けて建設的な考え方ができるグローバル・リーダーとしての資質を培うことを目的とする。</p> <p>この目的のため、国を越え人々が移り住む国際社会の重要側面である「移民」に焦点を当て、“安全に、幸せに暮らす”という生活に根ざした視点から国際問題の諸相に迫るとともに、国内問題に視点を移し、この国の可能性、役割、ニーズ等を取り出し、未来の選択肢を提案する課題研究を実施し、社会に発信することを目標とする。</p> <p>課題研究の過程で「世界移民マップ」を作成し、日本における移民マップ研究のハブ校を目指す。そして、これらを進める教育活動をプログラム化し、成果を評価する手法と合わせて研究開発する。</p> <p>(2) 現状の分析と研究開発の仮説</p> <p>開校以来12年の教育活動を通して、国際貢献や世界を志向する意識の醸成と高い英語力の育成が達成できている。これに、グローバル・リーダー育成の要素を加える教育プログラムを本校において開発するための仮説は以下である：</p> <p>「人はなぜ国を越えて移り住むのか」の問いに始まり、国際問題と国内課題を結びつけて研究を進め、その先にこの国の選択肢を描く課題研究を通して、グローバル社会の諸課題を生徒のそばに引き寄せ、知識意欲と継続的な自己開発意欲を醸成する。異文化理解を重視する教育方針、外国籍・多重国籍の生徒の在籍、20か国以上の国籍の児童生徒が学ぶ兵庫県立芦屋国際中等教育学校との施設の供用、など他にない学習環境のもと、この環境に則した研究テーマを掲げることで、学校全体が国際科である強みを生かした生徒総がかりの活動を展開し、リーダー育成につながる厚みのある人材層と知識基盤を築く。</p> <p>「世界移民マップ」作成の過程で、膨大な英語の情報源から有効なデータを探し当てる力、海外の交流校や関係団体と交信する力、データを集約して有効な情報を構築する力を育てる。同時に、マクロ的な世界観の醸成を図る。</p> <p>6つの第二外国語、「外国語としての日本語」等の言語に関する授業に重点を置く中、言語技術の習得により、論理的な思考力と言語活用力を強化する。</p> <p>(3) 成果の普及</p> <p>SGH課題研究発表会を開催し、保護者、地域住民、教育関係者に公開する。SGH指定校と「提案日本の選択」の発表内容を共有し、提案の価値を高める。ホームページ、研究報告冊子、オープンハイスクール等を通して広く公開する。</p>					

<p style="text-align: center;">- 2 課 題 研 究</p>	<p>(1) 課題研究内容 関西学院大学の国際学部、社会学部、総合政策学部との連携を軸に以下を進める。 【目的】 移民研究を通して、未来の日本の選択肢を提案する。 【導入】 「人はなぜ国を越えて移り住むのか」を始まりの問いとし、「安全で幸福な生活」を求める人々の素朴な願いを生徒の日常と比較させる。[基調講演、グループ討議] 【学習】 「移り住む」諸形態をその理由と関連付け、歴史上または現存する課題を調査する。(強制：奴隷貿易、難民：パレスチナ、ミャンマー、スーダン、雇用：米国、欧州、アジア、要請：企業戦略、国家ニーズ、など) [大学教員講義・指導、協力企業への訪問調査・講義、発表会による相互学習] 【調査】 各国の人の流出と受入れの実態を調査して「世界移民マップ」を作成、同時に移民の背景と課題を抽出する。[グループ研究、大学教員指導、海外交流校連携] 【体験】 海外交流校を訪問、課題研究を共有し、意見交換や情報収集をする。ホームステイを通して異文化を実体験する。[5泊7日の海外研修、4泊ホームステイ] 【研究】 移民研究の成果を基盤に国内課題に着眼、両者を総合して、世界の人々が生きる場所として発展するための日本の選択肢を考察し論文としてまとめる。学校設定科目の学習成果を活用することで、研究内容の深化を促進する。 [各自研究、大学各学部教員による指導、下級生への成果還元、辻説法] 【発表】 「提案日本の選択」として論文をまとめ、発表する。 [SGH課題研究発表会、研究支援者による評価、SGH指定校との共有]</p> <p>(2) 実施方法・検証評価 【1期】 1年次1、2学期に全生徒が導入、学習、調査を実施する。並行して、調査、研究に必要な基本的スキルの育成を図る。世界の諸課題とその解決に携わる人々、大学での研究について学習し、進路、高等教育への意識付けを行う。 [科目「社会と情報」と連携を図りつつ、「総合的な学習の時間」1単位をSGH課題研究として実施する] 【2期】 1年次3学期から2年次2学期に全生徒が海外研修と連動して実施する。移民研究を進める班と日本の紹介と外国から見た日本を調査する班に分かれて交流校との共同学習を進める。[総合的な学習の時間2単位をSGH課題研究として実施する] 【3期】 2年次3学期から3年次2学期に、グローバル・リーダー・コース(GLC)選択生徒40名が実施する。選択する学校設定科目と関連して課題設定し、全生徒で築いてきた移民研究の成果をもとに、日本の選択肢を研究し論文としてまとめる。この間、下級生の課題研究に参加し研究成果を下級生指導に活用する。 [2016年度に3年次生を対象とした「提案日本の選択」科目を開設] 【検証】 「パフォーマンス評価」を活用、生徒の自己評価による自律した学習者の育成を図る。英語教育のCan-Doリスト活用実績を参照し、課題研究への拡大展開を図る。教育評価を専門とする大学研究員と共同で評価法を開発する。</p>
<p style="text-align: center;">- 3 上 記 以 外</p>	<p>(1) 課題研究以外の研究開発の内容・実施方法・検証評価 【言語技術習得】 世界基準の言語教育である「言語技術」習得を目指した研究開発を行う。国語教育に言語技術を導入し、ロジックの「型」を学びながら、読解、対話、説明、報告、記録、議論、論文作成を行う。また、国語版Can-Doリストを作成し活用する。英語教育は、Can-Doリストを活用した授業改善を継続し、連携大学等によるスピーチ、プレゼンテーション等の指導を受ける。[2016年度学校設定科目として選択科目「言語技術」を開講] 【議論創出空間】 特徴ある幅広い中央廊下を、生徒の議論が生まれる相互学習空間とする。GLC選択生徒が分担して、定期的に課題研究のテーマに関する「昼休み辻説法」(公開プレゼンテーション)を行う。(中央廊下は、県立芦屋国際中等教育学校との共用空間)</p>

実施報告書

2 平成 30 年度 スーパーグローバルハイスクール課題研究活動の実施状況

[対象]兵庫県立国際高等学校平成 28～30 年度入学生 (1 年次 16 回生 118 人、2 年次生 120 人、3 年次生 120 人)

No	実施時期	内容	備考 (実施場所等)
1	4 月 14 日 (土)	SGH フィールドワーク in 神戸 2018	2 年次生 (神戸市立海外移住と文化の交流センターなど)
2	4 月 16 日 (月)	SGH 課題研究に関するガイダンス	1 年次生 (社会科教室)
3	4 月 23 日 (月)	SGH 基調講演 関西学院大学 准教授 長友淳 氏	1 年次生 (国際交流ホール)
4	5 月 7 日 (月)	ディベート課題研究活動 全体ガイダンス	1 年次生 (社会科教室)
5	5 月 14 日 (月)	ディベート課題研究活動	1 年次生 (各 HR 教室など)
6	5 月 23 日 (水)	タイスタディツアー報告会	体育館
7	5 月 26 日 (土), 27 日 (日)	「スタディツアー@移民政策学会 2018 年度年次大会」	2,3 年次生 (東京大学駒場キャンパス)
8	5 月 28 日 (月)	ディベート課題研究活動	1 年次生 (各 HR 教室など)
9	6 月 1 日 (金)	ドイツフンボルト校とのディスカッション	2,3 年次生 (SQ ルーム)
10	6 月 4 日 (月)	ディベート課題研究活動	1 年次生 (各 HR 教室など)
11	6 月 11 日 (月)	ディベート課題研究活動	1 年次生 (各 HR 教室など)
12	6 月 13 日 (火)	「昼休み辻説法」 ディベート	1,2 年次生 (PC ルーム)
13	6 月 18 日 (月)	ディベート課題研究活動 臨時休業のため延期	1 年次生 (各 HR 教室など)
14	6 月 25 日 (月)	ディベート課題研究活動	1 年次生 (各 HR 教室など)
15	7 月 2 日 (月)	ディベート課題研究活動	1 年次生 (各 HR 教室など)
16	7 月 9 日 (月)	SGH プレゼンテーション@西宮市立西宮浜中学校	3 年 (西宮市立西宮浜中学)
17	7 月 11 日 (水)	フィリピンスタディツアー選考 作文 面接	PC 室・SQ ルーム 放課後
18	7 月 13 日 (金)	フィリピンスタディツアー事前研修・保護者説明会	SQ ルーム 放課後
19	7 月 17 日 (火)	「スタディツアー@関西学院大学・立命館大学・神戸市外国語大学」	1 年次全員 (各大学)
20	7 月 18 日 (水)	SGH 特別講演 筑波大学 名誉教授 駒井 洋 氏	全生徒 (体育館)
21	7 月 20 日 (金)	フィリピンスタディツアー事前研修	コンピュータ室 放課後
22	7 月 24 日 (火)	フィリピンスタディツアー事前研修	1 年 SQ ルーム 夏季休業中
23	8 月 1 日 (水)	フィリピンスタディツアー事前研修	1 年 SQ ルーム 夏季休業中
24	8 月 8 日 (水)	フィリピンスタディツアー事前研修	1 年 SQ ルーム 夏季休業中
25	8 月 27 日 (月)	「SGH スタディツアー@関西学院大学 2018」	2 年次 (関西学院大学)
26	8 月 29 日 (水)	フィリピンスタディツアー事前研修	1 年 SQ ルーム 夏季休業中
27	8 月 31 日 (金)	「SGH フィールドワーク in 姫路 2018」	1,2 年次 (グローリー株式会社、姫路キャッスルホテル)
28	9 月 1 日 (土)	「SGH スタディツアー@大阪大学 2018」	1 年次 (大阪大学)
29	9 月 12 日 (火)	フィリピンスタディツアー事前研修	1 年次生 (SQ ルーム)
30	9 月 13 日 (木)	ディベート課題研究活動 ディベート大会予選 1	1 年次生 (各 HR 教室など)7 限
31	9 月 20 日 (木)	ディベート課題研究活動 ディベート大会予選 2	1 年次生 (各 HR 教室など)7 限

32	9月25日(火)	フィリピンスタディツアー事前研修	1年次生(PCルーム)
33	10月1日(月)	ディベート課題研究活動 ディベート大会決勝	1年次生(国際交流ホール)
34	10月2日(火)	フィリピンスタディツアー事前研修	1年次生(PCルーム)
35	10月9日(火)	フィリピンスタディツアー事前研修	1年次生(PCルーム)
35	10月15日(月)	「移民マップ」課題研究活動 ガイダンス	1年(社会科教室・大講義室・PC室)
36	10月22日(月)	「移民マップ」課題研究活動	1年次生班別活動(各教室)
37	10月23日(火)	フィリピンスタディツアー事前研修	1年次生(PCルーム)
38	10月25日(木)	オランダ教員との移民問題に関するディスカッション	1年次生(SQルーム)
39	10月31日(水)	フィリピンスタディツアー事前研修 結団式	1年次生(PCルーム)
40	11月2(金)~6日(火)	SGH フィリピンスタディツアー	1年次生(フィリピン・マニラ)
41	11月5日(月)	「移民マップ」課題研究活動	1年次生班別活動(各教室)
42	11月8日(木)	SGH 特別講演事前学習	全年次クラス講義(各教室)
43	11月12日(月)	「移民マップ」課題研究活動	1年次生班別活動(各教室)
44	11月15日(木)	SGH 特別講演 難民支援協会 代表理事 石川 えり 氏	全年次(体育館)6,7時間目
45	11月19日(月)	「移民マップ」課題研究活動	1年次生班別活動(各教室)
46	11月26日(月)	「移民マップ」課題研究活動	1年次生班別活動(各教室)
47	12月3日(月)	「移民マップ」課題研究活動	1年次生班別活動(各教室)
48	12月15日(土)	スタディツアー@移民政策学会 2018 年度冬季大会	1,2年次生(静岡県立大学)
49	12月15日(土)	SGH 全国高校生フォーラム	全年次生(東京国際フォーラム)
50	12月18日(火)	「移民マップ」課題研究活動	1年次生班別活動(各教室)
51	12月19日(水)	SGH 課題研究中間発表会	全年次(体育館)1~3時間目
52	12月20日(木)	「移民マップ」課題研究活動 発表会	1年次各教室 ポスターセッション
53	12月23日(日)	「リサーチ・フェスタ」甲南大学課題研究発表会	1,2,3年次(甲南大学)
54	1月12日(土)	「高槻高等学校グローバルヘルス高校生フォーラム」	2年次(高槻高等学校)
55	1月16日(水)	「昼休み辻説法」 論文課題研究活動	2,3年次生(中央廊下)
56	1月21日(月)	「フィールドワーク in ワン・ワールド・フェスティバル 2019」事前学習	社会科教室
57	1月28日(月)	1年次課題研究のまとめ	各自(PCルーム他)
58	2月2日(土)	「フィールドワーク in ワン・ワールド・フェスティバル 2019」	1年次全員(扇町カンテレスクエア)
59	2月9日(土)	「フィールドワーク in 池田 2019」	1,2年次(池田市)
60	2月11日(祝)	「第6回高校生国際問題を考える日」(大阪大学課題研究発表会)	1,2,3年次生(神戸ファッションマート)
61	2月4日(月)	1年次課題研究のまとめ	各自(PCルーム他)
62	2月18,19日(火)	SGH フィールドワーク in 浜松	1,2年次生(浜松市)
63	2月23日(土)	「高校生による移民の歴史発見プロジェクト」発表会	1,2年次生(上宮川文化センター)
64	2月25日(月)	1年次課題研究のまとめ	各自(PCルーム他)
64	3月23日(土)	「SGH 甲子園 2019」(全国課題研究成果発表会)	1,2年次生(関西学院大学)

[備考] 第1回 SGH 企画推進委員会 2018年7月12日(木)、第1回 SGH 運営指導委員会 2018年7月25日(水)

第2回 SGH 企画推進委員会・運営指導委員会 2018年3月5日(火)

【対象】 兵庫県立国際高等学校平成 29 年度入学生 (2 年次 15 回生 120 人)

実施時期	内容	備考(実施場所等)
4月 12日(木)	海外研修 全体ガイダンス	
14日(土)	SGH フィールドワーク in 神戸	神戸市立海外移住と文化の交流センター
19日(木)	海外研修 プレゼンテーションテーマ別リサーチ	
26日(木)	海外研修 プレゼンテーションテーマ別リサーチ	
5月 10日(木)	海外研修 プレゼンテーションテーマ別作成	
17日(木)	海外研修 プレゼンテーションテーマ別作成	
24日(木)	海外研修 プレゼンテーション日本語原稿作成	
31日(木)	海外研修 プレゼンテーション日本語原稿発表	
6月1日(金)	ドイツフンボルト校とのディスカッション	2,3年次生
7日(木)	文化祭準備	
14日(木)	海外研修 プレゼンテーション内容の修正、英語原稿作成	
21日(木)	海外研修 プレゼンテーション内容の修正、英語原稿作成	
28日(木)	海外研修 プレゼンテーション練習、小学校交流準備	
7月 17日(火)	海外研修 プレゼンテーション練習、小学校交流準備	
18日(水)	海外研修 プレゼンテーション中間発表会	
19日(木)	海外研修 プレゼンテーション中間発表会反省・修正	
19日(木)	国際交流セミナー事前指導	
23日(月)	国際交流セミナー	
8月 27日(月)	SGHスタディツアー@関西学院大学	2年次生(関西学院大学)
9月 6日(木)	海外研修 保護者説明会(プレゼンテーション発表)	
13日(木)	海外研修 英語プレゼンテーション準備	
20日(木)	海外研修 英語プレゼンテーション準備	
27日(木)	海外研修 プレゼンテーションリハーサル	
10月 11日(木)	海外研修 英語プレゼンテーション練習	
12日(金)	海外研修結団式	
13日(土)~19日(金)	海外研修	アメリカ、イギリス、カナダ
25日(木)	海外研修 アンケート	
11月 8日(木)	オープンハイスクール・SGH 中間発表会準備	
15日(木)	SGH 特別講演「日本の難民支援の現状と、今、わたしたちにできること」難民支援協会代表理事 石川えり氏	全年次(体育館)
17日(土)	オープンハイスクール・海外研修報告	
22日(木)	海外研修のまとめ原稿作成、現地アンケート分析	
29日(木)	海外研修のまとめ原稿作成、現地アンケート分析	
12月 15日(土)	スタディツアー@移民政策学会 2018 冬季大会	2年次生(静岡県立大学)
15日(土)	SGH 全国高校生フォーラム	2年次生(東京国際フォーラム)
17日(月)	海外研修のまとめ原稿手直し	
18日(火)	海外研修のまとめ原稿入力	
19日(水)	SGH 課題研究中間発表会	
1月 10日(木)	小論文指導(1)	
17日(木)	卒業生交流会(進路講話)	
24日(木)	小論文指導(2)(講演会)	
2月 7日(木)	小論文指導(3)	
9日(土)	フィールドワーク in 池田 2019	1,2年次生(池田市)
11日(月)	「第6回高校生国際問題を考える日」	1,2,3年次生 (神戸ファッションマート)
18日(月)、19日(火)	フィールドワーク in 浜松	1,2年次生(浜松市)
21日(木)	小論文指導(4)	
23日(土)	「高校生による移民の歴史発見プロジェクト」発表	1,2年次生 (芦屋市上宮川文化センター)
28日(木)	小論文指導(5)	
3月 20日(水)	小論文指導(6)	
3月 23日(土)	「SGH 甲子園」(全国課題研究成果発表会)	1,2年次生(関西学院大学)

実施報告書

3 本校における取組体制

目的

校内に次の組織を作り、各組織が互いに連携し学校全体での取組とすることで生徒の課題研究活動の充実を図ることを目標とする。

- 1) 運営指導委員会
- 2) 研究開発委員会 (企画推進委員会)
- 3) SGH校内推進委員会
- 4) 1年次C.C.C.担当グループ、2年次C.C.C.担当グループ
C.C.C.は本校における総合的な学習の時間の名称である。

各委員会の概要

- 1) 運営指導委員以下
p. に会議記録掲載
- 2) 研究開発委員会 (企画推進委員会)
p. に会議記録掲載
- 3) SGH校内推進委員会

課題研究活動の企画と運営について協議。本校の教員16人で構成されており、定期的に委員会を開催した。内容は、それぞれの課題研究活動の報告と検証である。本年度はSGH校内推進委員会の全体会の回数を減らし、一方で校内推進委員会の担当者が毎週行われる1年次の年次会議および2年次の年次会議に出席し、その中でSGH課題研究活動の企画運営の方針や授業の進め方および指導方法について説明を行ったうえで協議し、C.C.C. (総合的な学習の時間) の運営を行った。

- 4) 1年次C.C.C.担当グループ、2年次C.C.C.担当グループ

生徒の課題研究活動の指導およびファシリテーションを行う。1年次C.C.C.担当グループは教員7人で構成されている。今年度よりC.C.C.の時間を週2時間に増やしたので、のべ14人の教員が1年次のC.C.C.の授業に携わった。ディベートおよび「移民マップ」課題研究活動において、1人の教員が1つの生徒グループを担当し、ファシリテーターとして生徒の課題研究活動を支援した。

2年次C.C.C.担当グループは教員7人で構成されている。生徒を9班に編成し、それぞれアメリカ合衆国・カナダ・イギリスの訪問国ごとに移民研究に関する調査や日本紹介などの課題研究活動に取り組み、各班に担当教員がつきファシリテーターとして生徒の課題研究活動を支援した。



課題研究活動における教員の支援

本年度の課題研究の方針

昨年度の学校設定科目「提案日本の選択」で論文を作成したが、その中で論理に飛躍がある論文があった。これを改善するために、最終的な論文作成に向けて、C.C.C.課題研究活動において基礎的な資質や能力を身につけることを今年度の目標とした。具体的には「移民マップ」の作成を通して、次にあげる3つの資質・能力を身につけることにした。

- 1) 情報を的確に理解し効果的に表現する力
- 2) 社会的事象について資料に基づき考察する力
- 3) 日常の事象や社会の事象を数理的に捉える力

また、ディベート課題研究活動では相手の議論に応じた話ができるように、相手側の立論を想定した質問と反論の作成に焦点を当て、議論の筋から外れることなく話を進めることができる論理的な思考力および応答力の育成をめざして活動に取り組むことにした。

成果

SGH校内推進委員会に関しては、今年度は16人で構成した。これは31人の教員数の半数にあたる。生徒の課題研究に係る教員はのべ21人であり、本校の教員31人のほぼ全員がSGHの運営に関わり、本年度も学校全体の取組として課題研究活動が実施できた。また、教員の役割分担を徹底することで一部の教員にかかる負担の軽減を図るとともに、事業を効率的に推進することができた。

[参照資料]

平成30年度SGH校内推進委員会の役割分担

1 役割分担の内容

- 「渉外担当」 文部科学省、企画推進委員、運営指導委員、および外部支援者との交渉
- 「ディベート担当」 ディベートの企画・運営
- 「移民マップ担当」 移民マップ作成の企画・運営
- 「海外フィールドワーク担当」 海外フィールドワークの企画・運営
- 「プロジェクトチーム担当」 プロジェクトチームメンバーの指導（例）校外の課題研究活動発表会の企画・運営および生徒の指導など
- 「国内スタディツアー担当」 国内の大学訪問等、スタディツアーの企画・運営
- 「国内フィールドワーク担当」 国内の企業訪問等、フィールドワークの企画・運営
- 「評価担当」 ルーブリックの作成および評価の実施・分析
- 「ホームページ担当」 本校ホームページにSGH課題研究活動の報告を掲載
- 「講演会担当」 講演会の企画・運営、講師との打ち合わせ、会場準備（垂れ幕作成を含む）
- 「提案日本の選択」 論文作成の指導および発表の指導、論文の発信
- 「移民政策学会」 移民政策学会でのスタディツアーの企画・運営
- 「中間発表会」 SGH校内中間発表会の企画・運営
- 「報告書等担当」 文部科学省等に提出する報告書、論文集、成果集等の作成

2 SGH校内推進委員会の役割分担

- 「渉外担当」 前川・渡辺・佐藤
- 「ディベート担当」 前川・池本・吉井
- 「移民マップ担当」 渡辺・池本・上林
- 「海外フィールドワーク担当」 吉井・桂・渡辺
- 「プロジェクトチーム担当」 前川・渡辺・竹嶋・向江・池本
- 「国内スタディツアー担当」 高木芳・上林・渡辺
- 「国内フィールドワーク担当」 桂・池本・上林
- 「評価担当」 前川・丸山・高木芳・高木公
- 「ホームページ担当」 高木公・丸山
- 「講演会担当」 上林・池本・前川・渡辺
- 「提案日本の選択」 前川・渡辺・竹嶋・向江
- 「移民政策学会」 前川・池本・向江・竹嶋
- 「中間発表会」 上林・奥田・宇城・前川・鈴木
- 「報告書等担当」 前川・吉井・桂・渡辺

SGH課題研究活動の円滑な運営のため、SGH校内推進委員会を定期的に実施する

3 備考

平成30年度SGH校内推進委員会メンバー

前川（委員長）・渡辺（副委員長）・佐藤教頭・丸山・高木公・高木芳・坂田・桂・吉井・池本・奥田・宇城・上林・竹嶋・向江・鈴木 以上16名

実施報告書

4 「第1回 SGH 運営指導委員会」記録

日程 平成30年7月25日 (水)

出席者 芦屋市教育委員会
教育長 福岡 憲助
グローリー株式会社
人事部マネージャー
河原 勲
神戸大学大学院国際文
化学研究科
教授 岡田 浩樹
兵庫県教育委員会事務
局高校教育課指導主事
藤原 博司
国際高等学校
校長 教頭 事務長
前川 裕史 桂 広
渡辺 伸勝

1 学校長より

2 開会挨拶 (委員長)

3 自己紹介

4 協議事項

本年度のSGH課題研究
推進計画について
英語を通じたSGH活動
について
その他

質疑応答

福岡委員: ドイツからの留学生たちを交えて、移民・難民についてのディベートを行うという取り組みは評価できる。我々が気づかないことに気づくことができる。加えて、大学生との英語のディベートというものも考えてみてはいかがか。英語を介して自分の考えを発信する力も身につくだろう。また、高校生ならではの問題解決の方法を見出すことで、社会に貢献できることが見つかるかもしれない。選挙権のある主権者としても、大事なことだ。それを実現するためには、大学関係者や教育委員会、あるいは近隣の学校からの協力を得て進めてもらいたい。

岡田委員: ディベートの相手として、ドイツというのはハードルが高かった。ドイツはEU圏でも特に英語の運用力が高く、ディベートの力も高い。ここで気を付けなければいけない

のは、英語ができることがグローバル化ではないということだ。英語の力を向上させるのが手段なのか、目的なのかを明確にして、SGHの活動とどう折り合いをつけるか整理してみようか。本来のプロジェクトの目的は、英語を通して生徒の可能性を広げることにある。英語を使う必要のないところに無理に英語を使わせるのではなく、英語を使う必然性のあるところで英語を使わざるを得ない場面を提供するのがSGHの本来の活動だ。

岡田委員: 兵庫県政150周年事業の内容について、多文化共生についての記念誌を作成しようという動きがある。学校教育での多文化共生の展開ということ報告できないか。

校長: 本校での兵庫県政150周年事業の成果は、映像での発表を考えているが、出版という成果ができないか検討してみる。

福岡委員: 大学とのディベートはすでに実施したことのある高校もあるが、

岡田委員: たとえばうちの大学でも移民・難民を扱っている講義がある。その中から10名程度を選抜して、ディベートをすることはできる。また、それを英語で行うとしても、何とかできると思う。ただし、やったというだけではなく、意味のあるものにするには双方がかみ合うような工夫が必要。

大河原委員: 学会での発表について、初年度は調査データの取得に悩んでいたが、今ではそれも解消し、別の問題に取り組んでいる。成長されていることを実感している。英語学習について、我々の会社の中でも同様の問題に取り組んでいる。英語の力は必要だ。しかし、一番必要なのは、外国とのやり取りがうまくいくことだ。ディベートに限らず、外国人との英語でのやり取りが圧倒的に少ない。それを解消するために、Skypeなどを利用して、海外の交流校

との共同活動を定期的に行うというのはいかがか。インフラ的にもそれほど費用は掛からないだろう。

藤原委員: 研究活動と英語の運用というところでは区別が大事だ。発展的な英語の運用は、基礎の英語の力が成り立ってから話になる。言葉でなにかを表現するには、その前提となる知識が必要だ。その基礎ができていない状態だと思うので、次は整理した知識をどう英語で伝えるかという段階だ。海外でのフィールドワークで英語を運用して調査を行うというのは、フィールドワークの質の向上にもつながる。SSHのポスターセッションに参加した際、英語による発表は素晴らしいが、質疑応答時の英語でのやり取りになると、とたんに質が下がるという場面を何度も目撃した。本校には研究活動で得られた知識を、英語で伝えるというレベルに達してほしいと願う。年間計画の中には、発表に向けた準備を十分確保してほしい。

岡田委員: 英語の場合、会話に必要な英語能力と、専門的な知識を伝達しあう英語能力は別物だ。日本の学界の発表スタイルは、その場のコミュニケーションで研究内容を伝達する。海外では綿密な完成原稿が求められ、それに基づいて発表が行われる。コメンテーターからの質疑事項も文章で投げかけられる。それを参考にすると、ディベートの相手となる海外の高校生に対して、本校生徒が英語で質問事項を投げて、その回答に返答してもらった事柄に対する応答を十分準備してからディベートを行うということも考えられる。英語での即時的なやり取りと、専門的な知識の交換を同時にやるというのは難易度が高い。

5 その他

6 閉会挨拶

実施報告書

5 「第1回 SGH 研究開発委員会 (企画推進委員会)」記録

日程 平成30年7月25日 (水)
 出席者 大阪大学国際教育交流センター
 准教授 西村 謙一
 姫路経営者協会
 専務理事 村瀬 利浩 (欠席)
 関西学院大学 国際学部
 教授 長友 淳
 社会デザイン学会
 理事 佐野 敦子
 神戸松蔭女子学院大学
 人間科学部
 准教授 大下 卓司
 兵庫教育大学 学校教育研究科
 講師 奥村 好美 (欠席)
 兵庫県教育委員会事務局
 高校教育課
 主任指導主事 辻 登志雄
 国際高等学校
 校長 教頭 事務長
 前川 裕史 桂 広
 渡辺 伸勝

- 1 学校長より
- 2 開会挨拶 (委員長)
- 3 自己紹介
 企画推進委員
 管理機関 (兵庫県教育委員会)
 SGH校内推進委員 (本校職員)
- 4 協議事項
 本年度のSGH課題研究推進計画について
 英語を用いた活動について
 その他

質疑応答

西村委員: 今年度のC.C.C.での、ディベート活動と移民マップ制作活動との接合について説明いただきたい。あと移民史のプロジェクトの内容についてご説明いただきたい。
 前川: 移民マップの作成において、生徒各自には、人の移動とその背景にある要因との関連を考えるとという活動に取り組んでもらう。これは研究の基本的な活動である。そして、その活動を完遂するには自分たちの主張に根拠を立てるといった基本的な姿勢が必要になってくる。ディベート活動では、そうした研究の基本姿勢を身につけさせ

るという意図がある。ディベート活動で研究の基本姿勢を身に付けて、移民マップ制作活動において研究活動に取り組むという計画を立てた。
 渡辺: 移民史のプロジェクトは昨年から取り組んでいる。基礎的な移民史学習から始まり、移民史にかかわる調査を実施し、その結果をまとめるという段階に来ている。本年度はその成果を広く公表するための活動に取り組む予定だ。
 長友委員: 前回は中間評価の結果を受けて、地域や他校との協力によって改善を図るという案が出た。それをうまく具現化して取り組んでいることは評価できる。事業の目的に沿った活動ができていると考える。あとはSGH活動のアウトプットの質の向上に工夫が必要だ。論文作成の支援体制とスケジュールについて説明いただきたい。
 前川: 今年度に論文の作成に取り組む生徒は、すでにこの段階で論文の基礎となる先行研究の整理を終えている。彼らには職員4人で支援を行っている。1年目とは大きく質の向上が図られていると感じる。
 佐野委員: 生徒の移民政策学会での発表の質はかなり高く評価されている。その要因の一つが先行研究の整理がしっかりしているという点だ。どこかで生徒に先行研究についての発表を行わせたいかがか。
 前川: 先行研究の発表は1学期の授業内で実施している。
 大下委員: SGHの活動を外部に発信していることはもちろんだが、外部から委託される機会が出てきたということはさらに重要だ。外部の映像の専門家に委託することは、つまり“本物”に触れることだ。生徒の職業観や進路決定にも重要な影響を及ぼすだろう。また、多文化共生センターの職員など、普段とは違う大人とのかかわりも良い経験だ。普通の高校生にはない経験だ。論文の指導をゼミ形式で行っているのは画期的だ。この指導體制自体を一つの成果としてまとめるのも面白い試みだ。
 佐野委員: 校内での発表会の時は、ほかの生徒も参加していると思う。テーマが違う複数の生徒が参加して、様々な視点で意見を出し合うというのも面白い試みだ。テーマや課題が共通している生徒だけで小グループ

を作って意見を出し合うのも一つの手法。
 長友委員: 話し合う力というのは大学でも重視されている力だ。大学でのゼミナールというのもその一環だ。SGH入試においてもディスカッションが取り入れられている。
 大下委員: ゼミ形式で互いの研究を発表しあう場があるとのことだが、先生への報告の前に、生徒同士で意見を出し合う場があってもよい。先生の側は、チェックリストを使って、事前にクリアすべき点を示すことも考えてみてはいかがか。
 西村委員: 論文を含めた様々な活動を英語で行うというのは無理筋な要求ではないかと考える。自分の母語で伝える内容に関する知識と伝える力を身に付けることをまずは優先してほしい。
 前川: 論文を英語で執筆するのはハードが高すぎるので、要旨のみ英語で書かせている。
 佐野委員: 国際的なディスカッションをやる場合、司会者がそれぞれの対戦相手の基本的な立場の説明をする。今回のフンボルト校とのディスカッションでは、双方に事前調査が必要だったかもしれない。
 長友委員: SGHの活動は一部の生徒が頑張っており、全生徒への波及効果については疑問が残るという見方もありうる。対応策は考えているか。
 前川: 実情は全生徒の取り組みは非常に限られている。
 辻委員: 学校の取り組みをもっと校外へ発信できないだろうか。たとえば通常は学校内で実施されている発表会を校外で行う、あるいは保護者やOBや地域の中学校などの関係者を呼ぶなど。SGHの活動をもっとアピールすることも大事だと思う。ディスカッションの力が大事だという話題が続いているが、この力は今後の大学入試においてもますます必要とされる。それを視野に入れて引き続き頑張してほしい。
 5 連絡事項等
 6 閉会挨拶 (副委員長)

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(1) C.C.C. (総合的な学習の時間) におけるディベート課題研究活動

目標

- ・移民研究に役立てる。
- ・日本の将来に対して、考える契機とする。
- ・情報収集選択能力、協働性、批判的・論理的思考力、およびプレゼンテーション能力を養う。

対象学年

1年次生全員 (120人)

内容

- 1) 「ディベートについてのガイダンス」2時間
- 2) 「ディベートに向けてグループ課題研究活動 ～ 」12時間
- 3) 「ディベート大会予選1および2」2時間
- 4) 「ディベート大会決勝」2時間



ディベート大会決勝の様子

経緯

一昨年度のディベート決勝において審査員の大学教員より「応答力」および「論理的思考力」の育成の必要性が指摘された。そこで、昨年度は「応答力」の育成を目指してディベートに取り組んだ結果、ルーブリック評価では一昨年度より「応答力」の向上が見られた。しかし、校内推進委員会でその内容を検討したところ、生徒は調べてきた資料を述べることはできているが、その応答は十分に相手の論理に則したものになっていないという反省点が出された。そこで今年度は、相手の論理に則したディベートができる「応答力」の育成を目指して課題研究活動に取り組むことにした。

内容の詳細

今年度のテーマは昨年度と同じ「日本は現在以上に移民を受け入れるべきである」というテーマを設定した。同じテーマにした理由は昨年度の改善点を明確に自覚して課題研究活動に取り組むためである。

ガイダンスにおいて、今回のディベート学習の目的や意義、その方法等を説明した。なお、ディベートの目標については、ディベート用ルーブリックを生徒に示し、説明した。また、ディベート本番に向けての取り組み等のスケジュールを示した。

次に、各班の役割分担を決定した。班長・副班長を各1名、立論担当者を2名、質問担当者を2名、反論担当者を2名、結論担当者を2名とした。立論の根拠となる資料を1人1つずつ集めてくるように指示した。

今年度は立論となる根拠は、肯定側・否定側ともに、毛受敏浩著「限界国家 - 人口減少で日本が迫られる最終選択 - 」(2017年、朝日新書)

ディベート予選試合 立論の例

肯定側 3組A班		否定側 1組B班	
秋月 有田 アルトマン 池田 石橋 石原 今井 岩津 梶丸 川端		加嶋 菊地 熊澤 後藤 坂本 佐々木 真好 柴田 清水 杉谷	
立論	立論の根拠	立論	立論の根拠
労働人口が増えるから	毛受敏浩『限界国家 人口減少で日本が迫られる最終選択』(2017) p. 176	失業率が上がる	産経ニュース「揺れる「移民大国」スウェーデン 深刻化する移民の失業問題に試行錯誤 「自国民第一」の反移民政党に勢い」(2019.3.29) URL: https://www.sankei.com/world/news/170329/wor1703290059-n1.html
日本文化を広めてもらえるから	同上、p. 178	元の住民と移民との間の賃金格差が悪化する	毛受敏浩『限界国家 人口減少で日本が迫られる最終選択』(2017) p. 145-150
日本の経済発展につながるから	同上、p. 141	高度人材当人や家族が快適に暮らす環境が整備されていない	同上、p. 142-145

から引用することにした。同じ資料を使うことで、生徒が相手の立論を予想しやすくし、相手の立論に則した質問および反論を構築することにつなげていくことを目標とした。また、根拠となる資料を一つにすることで教員が資料を常に手元に置いておくことができ生徒の指導をしやすくした。最終弁論は、立論を補強する根拠を探して構築させた。根拠として使用できる資料は次の通りとした。

- (a) 書籍および文献
- (b) 新聞記事
- (c) 論文
- (d) 公的な機関の資料 政府関係資料や国連関係資料

なお、班別の活動に先立ち、全体講義を行った。内容は、移民の定義、移民のカテゴリー（在留資格）、および基礎となるデータ収集の方法について教示した。具体的には、移民の定義は「通常の居住地以外の国に移動し、最低でも12か月間当該国に居住する人」(国際連合、1998年)とし、移民のカテゴリーは法務省入国管理局が定める「短期滞在」を除く23の「活動に基づく在留資格」とした。基礎となるデータは、e-statから政府の統計データを収集するように指示した。

まず、全員が毛受敏浩著「限界国家」を読み、各自で立論を作成した。次に班で各自が作成した立論を持ち寄り、班として立論の根拠を3つ作成した。

次に、各自がもう一度「限界国家」を読み直し、相手の立論を予想した。班で各自が作成した相手側の立論を持ち寄り、相手側の立論リストを作成した。続いて、班員で分担して相手側の立論リストに則した反論の根拠を探した。これらを班で持ち寄り、相手側のあらゆる立論の対しても対応できる反論を作成した。同時に、反論に結びつく質問を作成した。今年度はこの作業に多くの時間をかけた。最後に、自チームの立論を補強する根拠を探し、班で持ち寄り最終弁論を作成した。

ディベートの予選を2時間に分け、それぞれ3つの会場で行った。予選の対戦相手はくじ引きで決定した。会場ごとに、その日に対戦がない生徒20人から司会（1人）、タイムキーパー（1人）、集計係（2名）を決め、残り生徒16人と特別審査員として招いた関西学院大学大学院生1人がジャッジを行った。

決勝は予選で最もスコアが高かった肯定側チームと否定側チームとの対戦とした。対戦がない生徒100人から司会（1人）、タイムキーパー（1人）、集計係（2名）を決め、残り生徒96人と特別審査員として招いた関西学院大学大学教員2人がジャッジを行った。ジャッジにはSGH課題研究活動のルーブリックを基礎に作成したディベート用ルーブリックを使用した。

結果、予選、決勝ともに昨年度よりも相手側の論に則したディベートを展開することができていたと関西学院大学の大学院生および教員から講評をいただいた。

成果および成果の発信

ルーブリック評価の分析の結果、応答力が向上し過去で最高値となった。これは、立論の根拠として共通教材を使用することで生徒の協働が進み、これによりお互いにテーマに関する理解が深まったといえる。また、共通教材を使うことにより相手の立論を予想し、反論を構築するのに効果があったといえる。また、ルーブリック評価の分析の結果、チームワークが昨年度よりも大幅に向上した。これはC.C.C.(総合的な学習の時間)を週に1時間から2時間にすることで生徒の協働作業が深まったことに起因する。成果は報告集にまとめ校外外に配布し知識の共有を図った。

ディベート大会決勝戦肯定側発表パワーポイントの例

【肯定側】 1組A班

- 1.労働人口や有能な人材が増える。
- 2.日本の発展やグローバル化につながる。
- 3.地域の経済発展につながる。

ディベート大会決勝戦否定側発表パワーポイントの例

【否定側】 2組C班

立論

- ①留学生についての制度や環境にはいくつかの問題がある
- ②高度人材当人や家族が快適に暮らす環境が整備されていない
- ③現行の制度にはいくつかの不備があるから、これ以上の受け入れはできない

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(2) C.C.C. (総合的な学習の時間) における「移民マップ」課題研究活動

目標

「移民マップ」作成の目的は、第一に現在世界でどのような人の移動が生じているかを地図にすることで可視化し理解を深めることである。第二に、地図化を端緒として、なぜ人の移動が生じるか原因について考察する手段とすることである。また、「移民マップ」の作成を通して、今後の研究に向けての基礎的な資質や能力を身につけることを活動の目標とする。具体的には次にあげる3つの資質・能力を身につける。

- 1) 情報を的確に理解し効果的に表現する力
- 2) 社会的事象について資料に基づき考察する力
- 3) 日常の事象や社会の事象を数理的に捉える力

対象学年

1年次生全員 (118人)

内容

- 1) 「移民マップについてのガイダンス」
- 2) 「移民マップについてのグループ課題研究活動 ～ 」
- 3) 「移民マップ発表会」



移民マップのプレゼンテーション

経緯

昨年度「移民マップ」課題研究活動の目的を「理解力」とともに「創造的思考力」の育成とし、「理解力」の向上を図ることができた。しかし、SGH校内推進委員会において、生徒の「移民マップ」の考察について一部に論理の飛躍がみられ、これは3年次において「提案日本の選択」で生徒が作成した論文についても同様の論理の飛躍が見られるという意見が出された。そのため、今年度の「移民マップ」作成の目標を今後の研究に向けての基礎的な資質や能力を身につけるための活動、具体的には(a)情報を的確に理解し効果的に表現する力、(b)社会的事象について資料に基づき考察する力、(c)日常の事象や社会の事象を数理的に捉える力の育成に焦点を絞ることとした。これを通して、論理的な思考力の育成に結びつけることを最終的な目標とした。

内容の詳細

- 1) 「移民マップ」調査対象国および分担は次の通りとした。

A「ベトナムからアメリカ」班	(班員) フィリピンスタディツアー参加者を除く1組の生徒
B「カンボジアからマレーシア」班	(班員) フィリピンスタディツアー参加者を除く2組の生徒
C「フィリピンからオーストラリア」班	(班員) フィリピンスタディツアー参加者を除く3組の生徒
D「フィリピンからアメリカ合衆国」	(班員) フィリピンスタディツアー参加者
- 2) 取り組み方法は次の通りとした。
 - a) 各自で与えられたデータから必要な情報を収集し人口移動の推移グラフを作成する
 - b) 推移グラフを基に、人口移動の変化が顕著にわかる3つの年代を取り上げ、それぞれ流線図を作

成する。

- c) 先行研究について学び、各自で移動の要因について考察を行う。
 - d) 各班で最も優れた人口推移グラフと流線図、および考察を選ぶ。
 - e) 各班で人口推移グラフおよび流線図をパソコンで作成する。
 - f) 上記のグラフと図とともに、移動の要因についての考察をポスターにまとめる。
- 3) 留意事項は次の通りとした。
- a) マップの流線図について、人数は線の太さで表すこと。つまり人数が多いほど太い線で表す。
 - b) マップにおいて、人数は線の近くに明示すること。
 - c) マップにおいて移出の方向については で表すこと。
 - d) 移動の要因について、移出国のプッシュ要因と移入国のプル要因の両方に着目すること。
 - e) 移動の要因には、経済的な要因、政治的な要因、社会的な要因、歴史的な要因などがあり、このうちどのような要因で移動が生じたかを根拠に基づいて明らかにすること。
- 4) 評価については次の通りとした。
- a) ポスターセッションを行い、プレゼンターを除いた生徒が他の班の評価を行う。
 - b) 評価はSGH課題研究活動のルーブリックを基礎に作成した移民マップ用ルーブリックを使用する。

以上の要領で活動を行い、各班で移民マップのポスターを作成した。最後にポスターセッションを行い、お互いに評価を行った。評価は、a)表現力、b)多面的理解、c)論理性という3つの観点で行った。

成果および成果の発信

ルーブリック評価の集計結果の分析から、表現力が昨年度より大きく向上した。これは人の移動の数を図で表わすことにより、情報を的確に理解し効果的に表現する力がついたといえる。また、多面的理解の向上も見られた。これは人口移動の変化が顕著にわかる年代を3つ以上取り上げ、移出国のプッシュ要因と移入国のプル要因の両方に着目し、移動の要因を考察したことによる。成果については、第6回高校生「国際問題を考える日」における課題研究活動発表ポスターに引用することで発信した。また、成果集としてまとめ全教員と全生徒およびSGH校に配布し、成果を共有した。

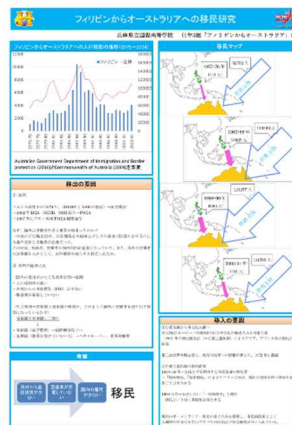
1 組作成移民マップ
「ベトナムからアメリカ」



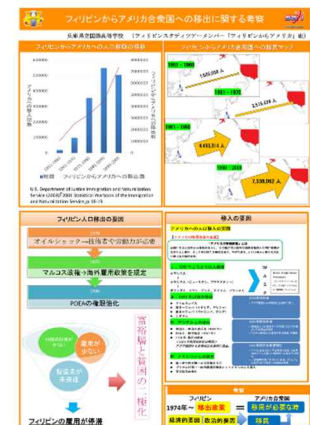
2 組作成移民マップ
「カンボジアからマレーシア」



3 組作成移民マップ
「フィリピンからオーストラリア」



フィリピン班作成移民マップ
「フィリピンからアメリカ合衆国」



実施報告書

6 課題研究活動の取組

(3) C.C.C. (総合的な学習の時間) における海外研修に向けての課題研究活動

目標

2年次生全員がアメリカ合衆国、カナダ、イギリスに分かれて訪問する海外研修に向けて、多くの移民を受け入れているそれぞれの国の歴史や文化を学習し、移入国において現地で意識調査をするための準備を行うことを目標とする。

対象学年

2年次生全員 (120人)

内容

- 1) 調査活動
- 2) 日本の紹介活動

内容の詳細

調査活動と日本の紹介活動を行った。まず、調査活動については、移入国の現状を事前学習し、その上で日本が将来多くの人々がやってくるための魅力を探り、その魅力を発信することを最終目標にするべく調査項目を検討した。その結果、「日本で働くことに関する意識」をテーマに調査を行うことにした。具体的には、

- 1) 日本で働くことに興味があるか
- 2) もし日本で働きたいのなら、日本の企業や人々にどのような支援をしてほしいか
- 3) 日本で働く上で最も大きな障害は何か

以上の3つ質問事項を設定し、アンケート用紙を作成した。このアンケートは2年次全員が各ホームステイ先もしくは交流校で、できるだけ自分達と同世代の人を対象に調査実施することを前提とした。

一方、日本紹介活動については交流校に「Cultural Beauty in Japan」をテーマに、日本文化に見られる様々な美を紹介するプレゼンテーションの作成を行った。具体的には、(ア)Elegance (イ)Dynamism (ウ)Simplicity (エ)Respectfulness (オ)Harmony (カ)Preciseness (キ) Transienceの発表班に分かれ、事前学習およびリサーチ活動を行い、現地校で行う日本の紹介と魅力を発信するためのプレゼンテーションの準備・作成を行った。

成果および成果の発信

訪問国において全員で実施した現地調査の結果をまとめ、校内の中間発表会で報告を行った。また、この調査結果を学校設定科目「提案日本の選択」における論文作成に活用した。

海外研修における現地調査アンケート

Survey on Working in Japan

Our school has been doing a research project on people immigrating overseas with different reasons. In this school trip, we would like to collect data about your impressions of "working in Japan." Based on the data, some of the students will make reports about the research question. Thank you for your cooperation.

I. Information about questioner: Gender Male Female
Age 15-20 20-25

II. Are you interested in working in Japan?
Yes → Why? No → Why?
Reason: _____

III. If you want to work in Japan, what do you need from Japanese companies and people?

IV. What do you think is the biggest obstacle to work in Japan?

Questioner name: _____ Location of Data Collection: _____

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(4) 学校設定科目「提案日本の選択」における取組

目標

本校は、SGHの取組みとして、グローバル社会の重要側面である「移民」に焦点を当てた課題研究を通じて、多様化する社会情勢を多角的かつ柔軟的に捉え、未来に向けて建設的な考え方のできるグローバルリーダーとしての資質を培ってきた。この科目では、これまでの課題研究のまとめとして、この国の可能性、役割、ニーズ等を取り出し、日本の未来の選択肢を提案するための課題研究を実施し、社会に向けて発信する研究論文を作成する。

対象学年

3年次生22人（グローバルリーダーコース GLC）

授業形態

本校の学校設定教科（国際）の3年次生の学校設定科目として平成29年度よりスタートした。

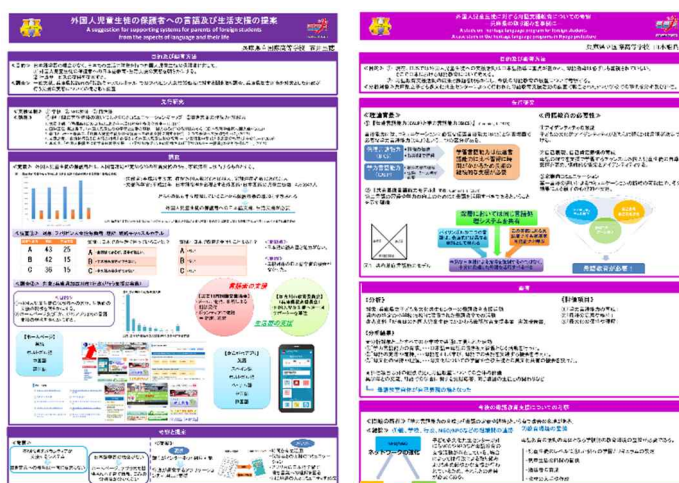
教諭4名が2単位の授業を2時間連続で行った。各自のテーマに合わせて個別指導、発表会、ディスカッション等のグループワークなどの形態をとった。

内容

- 1) 創造的思考力（複数の資料を検討したうえで、自分なりに課題を設定し、その課題の論点を把握したうえで、統計や文献などの根拠に基づいて、独自の視点から考案した解決策を考えることができる力）を身につける
- 2) 批判的・論理的思考力（国際的な問題を自分なりに分析・解釈し、信頼できる情報を選択し、根拠に基づいて自分の考えを論理的に説明できる力）を身につける
- 3) 異文化理解力（自身の文化圏の価値観を相対化し、異なる文化圏の価値観に対しても関心を持ち、地球規模の問題について、相互の理解と納得を踏まえたうえで考える力）を身につける。

内容の詳細

- 1) 論文のテーマ 「移民研究を通して日本の未来の選択肢を提案するプロジェクト」に関するテーマ
- 2) 論文の内容 (a) 目的 (b) 先行研究（問題の所在） (c) 調査および調査結果 (d) 分析 (e) 結論（考察）
- 3) 論文の量 10,000字(A4で10枚) 英文要約（アブストラクト）はA4で1枚作成
- 4) 論文の評価 各時間に作成するポートフォリオ（自己評価票）と発表会（先行研究発表会、論文発表会）におけるルーブリック評価（他者評価）を材料に用いて、総合的に評価する。



生徒作成ポスター例

5) 年間実施内容

月	内容
4月	・ガイダンス ・論文フレームの作成 ・各自、テーマの設定 ・「先行研究」の調査
5月	・「先行研究」の調査
6月	・「先行研究」調査結果の発表 ・論文作成 (1)目的 (2)先行研究 (問題の所在)
7月	・調査計画書の作成
8月	・各自、調査活動の実施
9月	・調査結果の発表 ・論文作成 (1)目的 (2)先行研究 (問題の所在) ・論文作成 (3)調査および調査結果 (4)分析
10月	・論文作成 (5)結論 (考察) ・発表会用パワーポイントの作成
11月	・論文発表会 ・各自、発表用ポスターの作成
12月	・論文の完成 ・校内中間発表会における発表 ・甲南大学「リサーチフェスタ2018」での発表
1月	・論文の校正作業 ・発表用ポスターの作成
2月	・「第6回国際問題を考える日」での発表

成果および成果の発信

選択生徒全員が論文を作成し、ルーブリックによる評価を行った。その結果、選択生徒は、創造的思考力、批判的・論理的思考力、異文化理解力の3つの観点すべての自己評価が、同じ年次の非選択者よりスコアが高かった。また昨年度の選択者と比較すると、特に、創造的思考力に関しては、スコア4をつけた選択生徒は昨年度の20.8%に対して今年度は38.1%と約18%上回った。今年度は、中間発表会における外部評価を行い、スコア4をつけた外部支援員は37.5%であり、生徒とほぼ同じであった。したがって、「提案日本の選択」課題研究を行うことで、創造的思考力、批判的・論理的思考力、異文化理解力すべてを伸長させることができ、今年度は特に創造的思考力の育成には効果があった。

成果は、授業内で発表会を行い、評価が高かった3人が校内の中間発表会でプレゼンテーションを行った。また、3人は校外の甲南大学リサーチフェスタ2018で発表を行い、審査員よりロジカルデザイン賞とビッグデータ賞を受賞した。あわせて第6回高校生「国際問題を考える日」において、2人の生徒が研究成果の報告を行った。

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(5) 「昼休み辻説法」における課題研究活動

目標

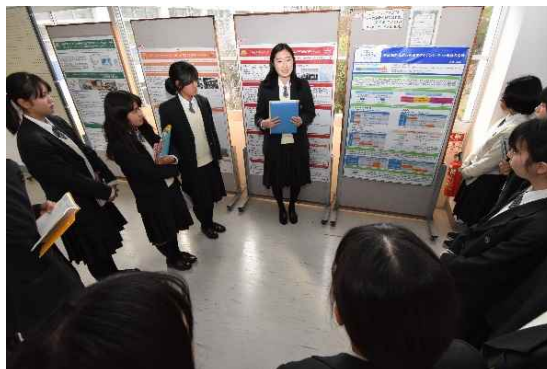
グローバルリーダーコースを含む上級生が昼休みの時間を利用し、下級生の課題研究に指導補助として参加し、研究成果を還元するとともに、生徒間の相互学習を活性化することを目標とする。

対象年次

全年次生

内容

- 1) 2年次生による「ディベート」課題研究活動に関する1年次生に対する指導
- 2) 3年次生による「提案日本の選択」課題研究活動に関する2年次生に対する指導



2年次から1年次への辻説法

内容の詳細

第1回「昼休み辻説法」2018年6月13日(水)

6月13日、昼休みに1年次生と2年次生がコンピューター室に集まり、恒例の昼休み辻舌鋒が行われた。1年次生はディベート課題研究活動における各班の班長と副班長の24人が集まった。2年次生は昨年度のディベート大会決勝進出チームの肯定側班長と副班長、否定側の班長と副班長の計5人が集まった。目的は、昨年度ディベートを経験した2年次生が1年次生にディベート課題研究活動で重要な事項を伝えることで、今年度のディベート大会をより良いものにすることである。まず、昨年度行った立論を肯定側、否定側の2年次生の両チームが行った。その後、2年次生が1年次生にアドバイスをを行った。「ディベートは根拠となる資料を多く集めることが大切である」という話や、「実際に相手側の立場に立って試合を想定して練習することが必要である」という先輩の話に1年次生は熱心に耳を傾けていた。

第2回「昼休み辻説法」2019年1月16日(水)

第2回「昼休み辻舌鋒」が2019年1月16日の昼休みに中央廊下で行われた。対象は、課題研究活動に取り組む3年次生1人と2年次生19人である。3年次生は課題研究論文を完成させ12月に行われた「甲南大学リサーチフェスタ2018」で受賞した生徒である。2年次生は論文をこれから本格的に作成する生徒である。まず、3年次生から課題研究論文作成にあたり、大切なことについて話があった。具体的には、テーマ設定は抽象的なものではなく具体的なものにすること、先行研究はテーマに沿ったものを選び出すこと、基本的なデータをしっかり収集することを2年次生に訴えた。また、自分で調査してデータを収集すること、それを分析してテーマに則してまとめることが重要であると話をした。これに対して2年次生は真剣な表情で話を聞き、3年次生に積極的に質問をしていた。3年次生の研究成果を共有し、2年次生の課題研究活動を進めるため非常に有意義な契機となった。

成果および成果の発信

「昼休み辻説法」の実施により、「ディベート」課題研究活動の推進および改善が図られた。また、論文作成に向けての動機づけの契機となり、2年次生がスムーズに論文作成に向けての課題研究活動に入ることができた。ディベート課題研究については成果集にまとめ配布することで成果の共有と発信を行った。

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(6) 海外フィールドワーク「フィリピンスタディツアー」における課題研究活動

目標

フィリピンでフィールドワークを行い、国を越えて人が移動する現状について調査し、その原因を考察する。

フィールドワーク先の選定経緯とフィールドワークの目的

1年目はカンボジアの農村を訪問し、結果、多くのカンボジア人は隣国のタイに「出稼ぎ」で働きに行ったものの、低賃金や違法労働のため帰国していたことがわかった。彼らの多くが字の読み書きができない「教育を十分に受けられなかった」人たちであった。2年目は、「教育を受けている人」を対象にベトナムで調査を実施した。これは「フィールドワークin姫路」において、日本の企業で雇用されているベトナム人に対する調査の延長として行った。実際にベトナムを訪問し「日本で働くことについてどう考えるか」を調査した結果、教育を受けているベトナムの高校生や大学生の多くが日本で働くことに興味や関心があるが、一方で、日本語や日本の生活に不安を感じている生徒が多いことがわかった。3年目はタイを訪問した。大学生や高校生に「日本で働くことに関する意識調査」を行った結果、多くのタイの若者が日本で働くことに興味を持っているが、日本で働くタイ人の実態を理解していないことがわかった。4年目の訪問先はフィリピンとした。理由は日本に居住する在留外国人の中で4番目に多い国であり、現在も日本にやってくるフィリピン人が多いからである。また、フィリピンは国策として労働力を移出している国であり、その独特な政策が国内外にどのような影響を与えているかを調べるためである。フィールドは2つ選定した。1つは貧困層が居住する地区とした。ここでかつて日本に移住した経験がある人を対象に聞き取り調査を行い、なぜ日本に来たのか、またフィリピンに帰国した理由を調べることにした。もう1つはアテネオ・デ・マニラ大学である。この大学はフィリピンでも最もレベルの高い大学の1つであり、彼らは将来の高度人材候補である。彼らに日本で働くことに関する意識調査を行い、高度人材が将来、日本にやってくる可能性を検証する。フィリピンは貧富の格差が大きな国であり、この両者をターゲットに調査を行い、将来、日本にどのような人々がやってくるのかを検証することを目的にフィールドを選定した。これらの調査を通して、将来、日本が海外から多くの移民を受け入れるための方策や、海外から多く人がやってきた場合、海外からやってきた人も日本にいる人も共に幸せに暮らせる日本のあり方を提案する論文作成に活かすことを最終ゴールとした。

対象学年

1年次生20人

事前学習会

第1回フィリピンスタディツアー事前学習会 2018年7月20日(金)

- ・フィリピンスタディツアーの目的および概要説明
- ・フィリピンの基本情報についてのリサーチ活動

第2回フィリピンスタディツアー事前学習会 2018年7月24日(火)

- ・日本に居住するフィリピン人の現状についての学習

第3回フィリピンスタディツアー事前学習会 2018年8月1日(水)

- ・日本にやってくるフィリピン人に関する先行研究の学習

[参考論文]高畑幸「興業から介護へ～在日フィリピン人、日系人、そして二世代への経済危機の影響～」2011年、移民・ディアスポラ研究 移住労働と世界的経済危機 第3章、107～121頁



サンアンドレスにおける
聞き取り調査の様子

第4回フィリピンスタディツアー事前学習会 2018年8月8日 (水)

- ・フィリピンに国内事情に関する先行研究の学習

[参考論文]大野拓司・寺田勇文編集「現代フィリピンを知るための61章[第2版]」,2009年、明石書店

第5回フィリピンスタディツアー事前学習会 2018年8月29日 (水)

- ・フィリピンの移民政策に関する先行研究の学習

[参考論文]鈴木有里佳「フィリピン女性の国際労働移動」、児玉由佳編『発展途上国の女性の国際労働移動』調査研究報告書、アジア経済研究所、2017年

第6回フィリピンスタディツアー事前学習会 2018年9月11日 (火)

- ・グループ別課題研究活動
- ・フィールドワークin姫路の調査結果報告

第7回フィリピンスタディツアー事前学習会 2018年9月25日 (火)

- ・グループ別課題研究活動
- ・プレゼンテーション用原稿およびパワーポイントの作成

第8回フィリピンスタディツアー事前学習会 2018年10月2日 (火)

- ・グループ別課題研究活動
- ・プレゼンテーション用原稿およびパワーポイントの作成

第9回フィリピンスタディツアー事前学習会 2018年10月23日 (火)

- ・プレゼンテーション原稿とパワーポイントの作成
- ・プレゼンテーションのリハーサル

第10回フィリピンスタディツアー事前学習会および結団式 2018年10月30日 (火)

- ・最終リハーサルおよび打ち合わせ

フィリピンスタディツアー事後学習会 2018年11月27日 (火)

- ・調査結果の検証
- ・成果の発信についての検討



アテネオ・デ・マニラ大学
における発表の様子

行程

2018年11月2日(金)	9:55 関西国際空港発～13:30 ニノイ・アキノ国際空港着
2018年11月3日(土)	9:00～12:00 アジア社会大学院(ASI)で講義を受講 14:00～17:00 サンアンドレスにて移出経験者への聞き取り調査
2018年11月4日(日)	10:30～15:00 カビテ州パリパランにて移出経験者への聞き取り調査
2018年11月5日(月)	9:00～16:00 アテネオ・デ・マニラ大学校にて講義の受講・プレゼンテーション・調査
2018年11月6日(火)	14:25 ニノイ・アキノ国際空港発～19:15 関西国際空港着

内容の詳細

11月2日(金)兵庫県立国際高等学校1年次生20人は朝、関西国際空港を出発し、昼過ぎにフィリピンのニノイ・アキノ国際空港に到着した。

11月3日(土)、活動日1日目、まずマニラのアジア社会大学院(ASI)を訪問した。まず、デニス・Y・バトイ教授よりアジア社会大学院(ASI)の紹介があり、世界の移民労働者についての講義を英語で受けた。講義に続き、ミャンマー、カンボジア、ベトナムの移民の現状について英語で報告があった。続けて、その3国からASI

に来ていた3人の留学生(ミャンマーのカイペ氏、カンボジアのダル・バニー氏、ベトナムのバンナデット氏)から、それぞれの国の移民事情について補足説明があった。昼食をはさみ、後半はフィリピンの移民についてバティ教授による講義を英語で受けた。この中で、現在も多くの人々が海外に移出しているフィリピンの現状について、その経緯や社会的な背景、政策について学んだ。今回のフィリピンでのスタディツアーの活動をコーディネートして下さった公益社団法人日本アジア協会アジア友の会(JAFS)の横山氏が講義内容の補足説明をしていただき、フィリピンの移動労働の現状について理解することができた。

午後は、アジア社会大学院のデニス氏担当のフィールドワークの場所であるマニラのサンアンドレス町の一地域(BRGY 807, AMISTAS ST. SAN ANDRES BUKID MLA CITY)を訪れた。この町は貧困層が住む地区で、鉄道沿いに粗末な家が多く立ち並び、生徒は家の中も見学した。彼らの生活を目の当たりにし衝撃を受けた生徒が多かった。そして、この町のコミュニティホールにて聞き取り調査を行った。聞き取り調査は生徒が英語で行い、ASIの関係者や横山氏が移出経験者にフィリピン語で質問し、得られた回答を英語で返答してもらった。日本を含めた海外への移出経験者が15人集まっていた。生徒は3つのグループに分かれて聞き取り調査を行った。聞き取り調査の結果、移出先によって待遇が大きく異なることがわかった。中東諸国に移出したことがある女性の中には、雇い主から暴行などの酷い扱いを受けたことを涙を流しながら語る人がいた。日本に移出したことがある女性は、ほとんどが在留資格「興業」で来日していた。彼女たちは日本で大変な苦労を経験したことを語ってくれた。しかし、帰国した理由はほとんどの人が子どもの世話などの家族の事情であった。彼女たちの多くは機会があれば、また日本に行きたいと語っていた。調査を終え、フィリピン人は家族を支えるために海外に移出し、また家族のために帰国していることがわかった。生々しい移動労働の現状を知ることができ、よい経験となった。調査の後は、町にあるダンス教室を見学した。ここでは子どもたちを集めてダンスを教えることで就学支援を行っていた。改めて子どもへの教育の重要性を知った。

11月4日(日)、活動日2日目、バスでマニラ市内の郊外にある、シシグ・ラカス・プレスクール(ダスマリナス州カピテ県パリアルン3町フェイス4)を訪問した。ここは放課後に行われる補習校で、アジア社会大学院(ASI)とアジア協会アジア友の会(JAFS)が教育支援をしており、ASIのニャーベ先生が研究と実践として子どもたちに就学支援を行っている。プレスクールに通う小中高生約20人が歓迎のレセプションを行い、歌やダンスを披露してくれた。つぎに、日本を含めた海外での労働経験のある5人のフィリピン人を迎えて、海外労働の動機と母国に戻った理由などを聞き取り調査を行った。生徒は2つのグループに分かれ調査を行った。聞き取り調査は生徒が英語で行い、横山氏が移出経験者にフィリピン語で質問し、得られた回答を英語で返答してもらった。調査の結果、サンアンドレスと同様に移出先によって待遇が大きく異なることがわかった。中には日本に技能実習生として来た経験を持つ人がいた。そして前日と同様にフィリピン人は家族を支えるために海外に移出し、また家族のために帰国していることがわかった。聞き取り調査の後は、町の子どもたちとの交流会を行った。お互いに歌を歌い、英語でコミュニケーションをした。そして、屋外で町の子どもたちと交流した。生徒たちは用意した風船やシャボン玉で子どもたちと遊んだ。この日も移出経験者にお話を聞くことができ、そして現地の子どもたちと交流ができて有意義な経験ができた。

11月5日(月)、活動日3日目、アテネオ・デ・マニラ大学を訪問した。まず、キャンパスツアーを行った。昨日まで訪問した貧困層が居住する地区とは違い、大学の構内は整然としており日本の大学と変わらない環境であった。次に、教室にて日本学科の授業を

実地調査データベースの例

No.1	
調査日	2018年11月3日
調査場所	サンアンドレス
調査対象氏名	Marilyn Fabribag
性別	女性
年齢	59
職業	自営業(食料品販売)
家族構成	母、子ども1人
きっかけ	経済的な理由
在留資格	興業
仕事内容	興業
理由	家族を支えるため。日本の文化と生活スタイルが好きだから。仕事の機会が得られるから。
良かった点	お金が稼げる
困ったこと	コミュニケーション
日本語会話	会話できた
日本語読み書き	ひらがな・カタカナは読める。漢字は読めない。
帰国理由	子どもの世話
また日本に来たいか	息子といっしょなら行く
将来	フィリピンが一番いい
滞在年数	3年(広島・福岡・名古屋・東京)

受講した。日本学科(日本研究プログラム)のベンジャミン・サン・ホセ博士より多文化主義についての講義を英語で受けた。最初に4つの質問が提示された。(a)多文化主義と同化の違いは何か。(b)何が、あるものを日本らしくしているのか。何がある場所を日本の場所とし、何がある人を日本人にしているのか。(c)日本は均質化した社会なのか。(d)日本の均質性がよいものと信じながら、多文化社会を実現することができるのか。講義を通して、ベンジャミン氏は本校生にそれらの質問に回答を求めディスカッションを英語で行った。これを通して生徒は多文化共生社会を作ることが重要だということを理解した。

次に本校生が「日本で働くこと」をテーマに、将来は日本で働きたいと思うか、その理由をアテネオ・デ・マニラ大学の学生に聞き取り調査を英語で行った。この調査には、のべ32人の学生が参加して下さった。調査の結果、日本学科の学生たちは日本に興味はあるが、将来、日本で働きたいと答えた学生は8人で残りの大多数は行かない、またはわからないと答えた。理由を聞くと、日本では長時間労働が強いられ過労死している、日本では外国人に対する差別がある、女性のライフワークバランスがとれないことが意見としてあげられた。彼らは日本の事情をよく知っており、外国から高度人材を受け入れるためにはこれらの国内問題を解決しなければならないと痛感した。続いて、本校生とアテネオ大学の学生がグループに分かれ移民問題や日本とフィリピンの事情に関してディスカッションを行った。次に本校生が実施したフィリピン人労働者に対する聞き取り調査の結果について報告した。具体的には、姫路で働いている工場労働者とホテル労働者、および池田市の介護福祉士候補者に対して行った聞き取り調査について英語で報告した。そのあと質疑応答を行った。昼食後、同じ教室でアテネオ・デ・マニラ大学の日本学科の学生に対して、本校生が日本に関するプレゼンテーション、および本校に関するプレゼンテーション、日本とフィリピンの文化に関するプレゼンテーションをそれぞれ英語で行った。本校生がお盆の習慣についてプレゼンテーションの後、浴衣で盆踊りを披露した。この後、質疑応答を英語で行った。最後に、大学内の図書館とフィリピンでの太平洋戦争の重要書類がある博物館を見学した。

翌日、フィリピンでのすべての活動を終え、ニノイ・アキノ空港から帰途についた。

成果および成果の発信

今回の実地調査に関して、データベースとして結果をまとめた。

成果については、校内の中間発表会、校外の甲南大学リサーチフェスタ2018、第6回高校生「国際問題を考える日」で報告を行った。

フィリピンスタディツアー報告書例

1年1組21番 清間 有咲

まず初めに、私がフィリピンスタディツアーに参加した理由を書きたい。それはSGHに参加した理由でもある。もともと、この学校のSGHのテーマが「移民」であったことが、兵庫県立国際高等学校に入学する大きな決め手だった。私は、移民について勉強することに興味を持っていたからだ。今回は、現地でも調査できるなど、私の生涯で今後出来るか分からないと思い、参加した。

今回私が調査する上での目的は、貧困の格差は本当にあることなのか、それぞれどのような人生を歩んできたのかを現地調査で調べることである。また、その項目を調査することとは別に、自分自身の肌で現地の生活はどのようなかを確かめることである。今回の現地調査で分かったことは、貧困の格差は確かにあるということだ。私達がプログラムで参加できたところは、私が見ただけで明らかに分かる格差であった。その理由は、まず環境が違うことである。私達は村の散策をしたり、一緒に遊んだりした子どもたちの服や家とは反対に、アテネオ・マニラ大学での大学生の服や持ち物が違っていたのだ。さらに、英語力は、数年の差はあるが、違ふと感じる部分であった。私達は村の大人の調査をした。中でも特に印象に残ったことは、壮絶な人生を語ってくれた方たちのことである。海外で仕事をして、酷い仕事内容やいじめられていたことの話である。だが、その方たちは勿論もう一度は行きたくない」と答えたが、フィリピンで前向きに暮らしていることが伝わってきたのである。

今日の日本は、これから海外の人達を受け入れる政策が実行されつつあるが、もう一度立ち止まって考えるべきだ。その理由として、仕事をしに来る外国人の立場になると、異国だということに戸惑いを感じているため、良い経験だけをするわけではないからだ。今回の調査で辛い経験や思いをした人たちがいた。それがあっても関わらず、その事実を無視して政策が実行されると、悲しい思いをする人が増えるはずだ。どう解決するかは私達が考えるべき項目である。そして、それを考えるためには、この事実を伝える必要がある。そして、調べることとしては、他の国でも同じようなことが行われているのかを調べる必要があるのだ。

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(7) 海外研修 (アメリカ合衆国・カナダ・イギリス) における課題研究活動

目標

2年次生全員がアメリカ合衆国、カナダ、イギリスに分かれて訪問する海外研修を行い、多くの移民を受け入れている原因を考察する。日本で働くことに関する意識調査を行い、この結果を論文作成に活かすことで日本の未来の選択肢を考える契機とする。

対象学年

2年次生全員 (120人)

訪問先および人数

アメリカ合衆国 (シアトル、タコマ) 40人

イギリス (ベリーセントエドモンズ等) 38人

カナダ (ビクトリア) 39人



海外研修におけるプレゼンテーション (1)

日程

2018年10月13日 (土) ~ 19日 (金)

内容

- 1) 全員によるホームステイ先での聞き取り調査
- 2) 学校交流における日本文化の紹介



海外研修におけるプレゼンテーション (2)

内容の詳細

全員がホームステイ先で、日本で働くことに対する意識調査を行った。具体的には、(a)日本で働くことに興味があるか、(b)もし日本で働きたいのなら、日本の企業や人々にどのような支援をしてほしいか、(c)日本で働く上で最も大きな障害は何か、という3つの点を質問した。また質問については理由も尋ねた。調査はすべて英語で行った。

一方、日本紹介活動については交流校に”Cultural Beauty in Japan”をテーマに、日本文化に見られる様々な美を紹介するプレゼンテーションを行った。具体的には、(ア)Elegance (イ)Dynamism (ウ)Simplicity (エ)Respectfulness (オ)Harmony (カ)Preciseness (キ) Transienceの7つの観点から日本文化の魅力についてプレゼンテーションを英語で行った。

成果および成果の発信

訪問国において全員で実施した現地調査の結果をまとめ、校内の中間発表会で報告を行った。また、この調査結果を学校設定科目「提案日本の選択」における論文作成に活用した。

海外研修における調査結果のまとめ

海外研修報告

—アメリカ・カナダ・イギリスにおける日本で働くことに関する意識調査—

2年1組 高見諒太 吉田葵 2組 笠井遥香 3組 高山大樹

調査概要

日程 10月13日(土)～19(金)

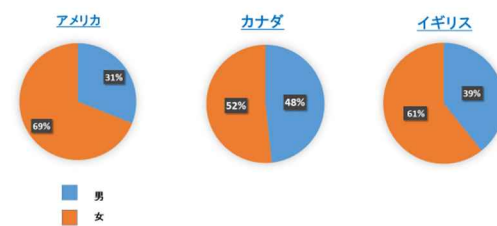
場所 アメリカ カナダ イギリス

対象者 アメリカ イギリス カナダの15歳～25歳 計90人

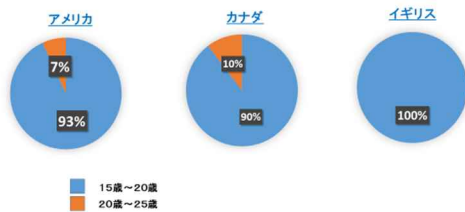
質問内容

- I Information about questioner
回答者についての情報
- II Are you interested in working in Japan?
日本で働くことに興味があるか
- III If you want to work in Japan, what do you need from Japanese companies and people?
日本で働く際、会社と人々に何を求めるか
- IV What do you think is the biggest obstacle to work in Japan?
日本で働く上で一番障害になるものは何か

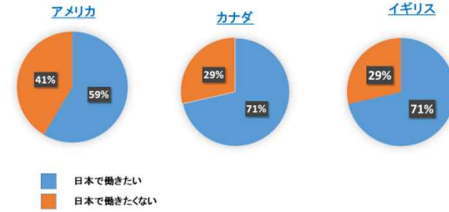
性別



年齢



日本での就労希望



日本で働きたい理由

アメリカ	カナダ	イギリス
1位 経験 8人	1位 経験 11人	1位 文化 12人
2位 文化 6人	2位 日本に興味 8人	2位 技術 6人
3位 安全、職、給料 2人	3位 文化 6人	3位 職 2人

日本の職場、人々に求めるもの

アメリカ	カナダ	イギリス
1位 言語 8人	1位 言語 7人	1位 環境 5人
2位 習慣 4人	2位 環境 6人	言語 5人
3位 環境 3人	3位 仕事提供 4人	3位 人間関係 4人

今後の展望

調査結果から明らかになった傾向

- ・動機⇒日本文化、個人の経験 賃金
- ・障害⇒日本語
- ・不安⇒労働環境

日本で働く上での障害

アメリカ	カナダ	イギリス
1位 言語 9人	1位 言語 25人	1位 言語 15人
2位 文化 7人	2位 文化 9人	2位 家族 4人
3位 職、偏見 2人	3位 距離、仕事 3人	3位 資金 3人

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(8) 「SGH フィールドワーク in 姫路 2018」における課題研究活動

目標

フィリピン人労働者を受け入れている姫路市内の企業を訪問し、フィリピン人の労働や生活についての意識調査を実施し、フィリピンスタディツアーの先行調査を行うことでフィリピンにおいて実施する調査の参考とする。

対象年次

1年次生 8人、2年次生 1人、計 9人

場所

グローリー株式会社 姫路市下手野 1-3-1

姫路キャッスルホテル 姫路市三左衛門堀西の町 210 番地



キャッスルホテルにおける聞き取り調査

調査対象

1) グローリー株式会社

[フィリピン人労働者受け入れ企業] 人事部マネージャー 大河原勲氏

[フィリピン人労働者] 2人 在留資格「企業内転勤」

2) 姫路キャッスルホテル

[フィリピン人労働者受け入れ企業] 支配人 松岡寛信氏

[フィリピン人労働者] 3人 在留資格「永住者」2人、「定住者」1人

コーディネーター

姫路経営者協会 専務理事 村瀬利浩氏

姫路経営者協会 担当部長 酒見直俊氏

日程

2018年8月31日(金)

事前学習

2018年8月1日(水)

・フィリピン人労働者についての先行研究の学習

[参考論文] 高畑幸著「興業から介護へ～在日フィリピン人、日系人、そして二世世代への経済危機への影響～」2011年、移民・ディアスポラ研究 移住労働と世界的経済危機 第3章、107～121頁



姫路キャッスルホテルにて

内容

1) 企業側からの説明

2) 社内見学

3) 雇用されているフィリピン人労働者への聞き取り調査

内容の詳細

2018年8月31日(金)に、「SGH フィールドワーク in 姫路 2018」が実施され、本校1年次生8人と2年次生1人の計9人が参加した。当初は8月24日(金)に17人の参加生徒で実施する予定だったが警報のため延期され、この日の実施となった。今回で4回目になる「フィールドワーク in 姫路」はフィリピン人労働者を雇用している姫路市内の企業を訪問し、フィリピン人労働者の現状を調査し、フィリピンスタディツアーや今後の課題を考察することを目的に実施した。まず、グローリー株式会社を訪問した。まず、企業側から企業説明を受けた。グローリー株式会社は海外22か国に工場を持ち、9,500人の従業員のうち約3,000人の外国人を雇用している。外国人従業員の国籍は約20か国である。次に社内見学をした。私たちが見学した第二製造部では11人の従業員のうち3人は外国人であった。在留資格は技能実習である。社内見学のあと、グローリー株式会社で働く2人のフィリピン人女性労働者に対する聞き取り調査を実施した。2人の在留資格は企業内転勤である。フィリピンの工場より派遣され、組立業務を担当している。本校生の質問に対してフィリピン人労働者が答えるという形で調査を行った。2人とも日本に来た理由はスキルや生活レベルの向上のためであった。日本に来て困っていることは何ですかという質問に対して、2人とも日本語の習得をあげた。社内では週末に日本人担当者が外国人労働者に対する日本語を教える時間を設けている。しかし、うち1人は休日に自費で日本語を習いに行くと回答した。外国人労働者に対する日本語支援のあり方について考えさせられた。



グローリー株式会社における聞き取り調査

昼からは姫路キャッスルホテルにバスで移動した。昼食後、ホテル側からの説明を受けた。まず、ルートイングループでは294のホテルを運営している。これからベトナムに日本語学校を作り、ベトナム人に日本語を習得してもらい、現地のホテルで働くか、日本のホテルで働いてもらう計画であると話された。そして、姫路キャッスルホテルでは152人の従業員のうち9人の外国人労働者を雇用している。9人の国籍の内訳は韓国4人、フィリピン3人、ベトナム2人である。在留資格は8人が永住者・定住者であり、準社員として働いている。1人はワーキングホリデーを利用して就労ビザで働いている韓国人である。次に、姫路キャッスルホテルで働くフィリピン人労働者に聞き取り調査を行った。対象は3人で、すべて女性であった。ホテルではルームメイクを担当している。聞き取り調査は生徒の質問に対してフィリピン人労働者が回答する形式をとった。聞き取り調査の結果、3人とも最初は在留資格「興業」で入国し、現在は永住者または定住者として日本で働いている。日本に来たきっかけは、3人ともフィリピンに住んでいた時に近所の人に日本に行くことを勧められたということであった。自分たちは日本が景気のよいときにやってきたので、景気がそんなよくない今ならフィリピンにいる人たちに日本に来ることは勧めないとも答えた。3人ともフィリピンにいる家族に送金していると答えた。日本で働いてよかったことはという質問に対しては、日本人が自分たちを対等に扱ってくれることと回答した。日本で困っていることはという質問に対して、3人とも日本語を話すことはできるが読み書きができないことをあげた。子どもは日本の学校で学ぶことができるが、自分たちは学ぶ機会がなかったと答えた。本校生の多くの質問に対してフィリピン人労働者に非常に積極的かつ丁寧に回答をしていただき、フィリピン人労働者の実態や生活、意識を理解するよい契機となった。

この日のすべての活動を終え、バスで本校に帰り解散した。

成果および成果の発信

今回の実地調査に関しては、データベースとして結果をまとめた。

成果については、中間発表会で全校生徒に対して報告し、校外では「第6回国際問題を考える日」において他の高校生に対して報告した。

基礎データ	
性別	女
年齢	40
調査場所	グローリー株式会社
職業	グローリー株式会社 金型設計
名前	Mericris Lerid
家族構成	母親、4人の弟、2人の妹、本人の8人家族 独身
調査内容	
1	日本で働きたいと思った理由は何か フィリピンでは得られない技術や経験を身につけられると思ったから。
2	日本以外の国で働いていたことはありますか ない。
3	日本で働いていてよかった点は何か 新しいソフトウェアを学べる。友達が増えたこと。仕事のスキルアップができたこと。
4	日本での生活で困っていることは何か 日本語で正しく相手に伝えることが難しい。
5	将来、日本で居住したいか。母国に帰りたいか。または他国に行きたいか。 家族と一緒に住める機会があれば日本に住みたい。
6	あなたの家族構成を教えてください 母と6人の兄弟がいる。4人の弟のうち1人はアメリカの大学に進学している。2人の妹のうち1人は香港にいる。母はフィリピンにいる。
7	あなたの母国には仕送りをしていますか はい。
8	あなたの最終学歴を教えてください フィリピン大学でコンピュータープログラミングを学んでいた。
9	あなたの在留資格を教えてください 企業内転勤。
10	自分の母国から日本への労働目的の移住が増えてほしいと思うか、思うのならその理由は何か 増えて欲しいと思う。フィリピン人にとって成長できる場になると思うから。
11	実際に多くの人が日本の技術と学びたいと思っている。 自分の能力や自分の学んできたことが日本で評価されていると思うか はい。
12	日本語をどのように学んでいるか。 9月から日本語教室に行き、自ら学ぶつもりである。
13	

聞き取り調査データベース例 1

基礎データ	
性別	女
年齢	42
調査場所	姫路キャッスルホテル
職業	姫路キャッスルホテル従業員ハウスキーパー
名前	クロダ メルリン
家族構成	子ども(男) 夫とは死別
調査内容	
1	日本で働きたいと思った理由は何か 仕送りをする必要があったため。当時はバブル経済による円高で景気がよかったから。
2	日本に来たきっかけは何か。 近所の女性に勧められたから。
3	日本で働く前と実際に働いてみて、ギャップがあったか 食文化や日本語の難しさ。魚は生で食べることができない。納豆も食べることはできない。
4	日本以外の国で働いていたことはありますか どの国ですか ない。
5	日本で働いていてよかった点は何か 日本人は物事を丁寧に教えてくれる。 外国人だと見て見下されない。日本人はわからないことがあれば、すぐに教えてくれる。
6	日本での生活で困っていることは何か 字の読み書きができないこと。 日本に来た当時困っていたことは、フィリピンより物価が高いこと。
7	日本で教育を受けたことがあるか。 ない。
8	将来、日本で居住したいか 母国に帰りたいか また他国に行きたいか 日本はいい国だが、人生の最期は自分の母国であるフィリピンへ帰りたい。
9	母国に仕送りをしていますか はい。子どもが大学を卒業したので、仕送り額は減っている。
10	あなたの最終学歴をおしえてください 高卒
11	あなたの在留資格を教えてください 永住者で、在日15年目である。日本に来た当初の在留資格は興行。
12	自分の母国から日本への労働目的の移住が増えて欲しいと思うか、思うのならその理由は何か 日本はビザ取得が難しいから行きづらいと思うが、同じ国の人としては来てほしい。
13	あなたのこれまでの居住地を教えてください。 岡山、佐賀、愛媛、姫路

聞き取り調査データベース例 2

フィールドワーク in 姫路報告書例

1年3組7番 今井 佑己

私がこのフィールドワークin姫路に参加した理由は、グローバル化が進む現代において直接話を聞くチャンスを得られるということ、またフィリピンスタディツアーの事前学習として実際に日本で働いている人たちの話を聞いて、日本の移民問題の現状、また課題を模索できればと考えたからだ。

私は外国へ出稼ぎに行く人はその国への興味があることがその国を選んだ理由の1つだという仮説を立てている。そのため実際にに出稼ぎに出ている人に日本を選んだ理由を聞く必要があると思った。他にもこれからの社会はグローバル化が進み日本で働く外国人が増えるため日本企業の外国人雇用への姿勢が問われる中、グローバル化に対応するために彼らはどのような方針や対策を取っているのかを調査する必要があると考えた。

これらの課題意識や問題意識をふまえて、実際の現地での調査での内容について触れようと思う。

まず私が最初に立てた仮説に対しての結果なのだが、一概にはそうとは言えないということが分かった。最初に行ったグローリー株式会社で働いていたフィリピン人は、日本で働くことによって、日本と同じような水準の技術力を身につけて、それを活かしてもらうため企業内転勤で日本に来た人だった。そのため彼女らには私の立てた仮説のような考えは見られなかった。次に行った姫路キャッスルホテルで働いていたフィリピン人も日本に来た理由は両親や兄弟を支えるため、彼女らが来た当初バブル経済で円高であり、賃金の高い日本に行ったというものであり、私の仮説とは異なるものだということが分かった。そのためフィリピン人が日本へ働きに来る理由は日本の技術力が高かったり、賃金が高かったりするのが主な理由だということが分かった。

またグローリー株式会社は女性への日本転勤期間の配慮や日本語の研修を行ったりなど、姫路キャッスルホテルの所属するルートインはベトナムに日本語学校を設立してそのまま労働採用をしたり日本語の熟練度によって接客担当や清掃担当に振り分けたり、どちらの企業も住宅提供を行ったりと、優れた施策を行っていることが分かった。

今後の課題として彼女らは日本語や家族と離れていることに困っているため、この点は改善しなければならないと思った。また私の立てた仮説があったかを確認するためこれからも日本の企業や移民問題だけでなく、もっとフィリピンの実状について勉強しようと思った。

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(9) 国内フィールドワーク「フィールドワークin池田2019」における課題研究活動

目標

フィリピンなど海外の多くの国から介護福祉士候補者を受け入れている高齢者介護施設を訪問し、日本の介護現場の現状と移民労働の現状について調査し、日本の未来の選択肢について考える契機とする。

対象学年

1、2年次生16人

調査対象

社会福祉法人池田さつき会「特別養護老人ホームポプラ」の経営者および外国人の介護福祉士候補者・介護福祉士合格者



聞き取り調査の様子

調査日

2019年2月9日 (土)

内容

- 1) 社会福祉法人池田さつき会「特別養護老人ホームポプラ」人事部長より施設経営方針の説明
- 2) 社会福祉法人池田さつき会「特別養護老人ホームポプラ」外国人介護福祉士候補者および介護福祉士合格者に対する聞き取り調査 英語・日本語による聞き取り調査

実地調査データベース例

調査日	2019年2月9日
調査場所	特別養護老人ホームポプラ (池田)
調査対象氏名	アナ
性別	女性
年齢	27
職業	EPA介護福祉士候補者
在留資格	特別活動 (EPA)
家族構成	家族6人 (母、姉、兄3人)
出身国	フィリピン
調査内容	
1	他の国ではなく、なぜ日本に来ましたか？
Ans.	家族のために貯金をしたかったから。子供から日本のアニメを見ていたから、日本にずっと旅行にいきたいと考えていた。友人にEPAのプログラムのことを聞き、参加した。日本が安全できれいな国だと友人に勧められた。
2	日本に来てよかったところは何か？
Ans.	ごみ分別がすごく分けていていいと思う。交通の便が良く、どこでも行けて便利である。あんまり渋滞がない。
3	日本に来て大変なことは何か？
Ans.	横浜に住んでいたことがあるが、駅で迷ったことがある。駅の地図がまぎらわしい。家族と離れて時々寂しくなる。でもメッセージャーで毎日家族と話せるし、まわりにフィリピン人の友人がいるから大丈夫。
4	家族を日本に連れていきたいですか？
Ans.	家族と一緒に暮らしたいと思わない。なぜなら家族は日本語がわからずに不便に感じるだろうから。
5	これからも日本に住みたいですか？
Ans.	合格したら、日本にずっと働きたい。不合格ならフィリピンで看護士をする。でもチャンスがあれば日本に戻って働きたい。
6	家族と離れて寂しくはないですか？
Ans.	家族と離れて時々寂しくなる。でもメッセージャーで毎日家族と話せるし、まわりにフィリピン人の友人がいるから大丈夫。
7	支援してほしいことはありますか？
Ans.	日本語の支援、国家試験に合格するまでの勉強の支援。

内容の詳細

本校1年次と2年次生の16人がSGH課題研究活動の一環として特別養護老人ホーム「ポプラ」を訪問した。目的は、海外から介護人材を受け入れている特別養護老人ホームを訪問し、日本の介護現場および移民労働の現状を調査し、日本の未来の選択肢を考える契機とすることである。このフィールドワークは2016年度から始まり今年で3回目となるが、継続して調査を行うことで、介護現場における外国人介護人材活用に関する状況の変化を知ること为目标に実施した。

まず、企業側から説明を受けた。特別養護老人ホーム「ポプラ」では、現在、60人の職員のうち24人の外国人介護人材が働いている。うち、17人がフィリピン人EPA介護福祉士および介護福祉士候補生である。残りのうち6人は留学生であり、国籍はネパール人4人、ベトナム人が2人である。残り1人は配偶者ビザで働い

ているベトナム人である。昨年度の1月の時点では、雇用している外国人介護人材は19人であった。企業側によると、ここ数年で外国人介護人材の受け入れに関しては新しい法律の施行等で大きな変化があり、同時にこれまでのEPAだけでなく、留学生の介護人材を受け入れ、採用人数も大幅に増やしてきた。合わせて、介護人材を受け入れる国もフィリピンだけでなく、ベトナム、ネパールと対象国を広げている。今後は、在留資格「技能実習」、新設される在留資格「特定技能」と介護人材の受け行ける窓口をさらに増やす予定であると話された。また、EPA介護福祉士候補者はこれまで国家試験に合格しなければ帰国しなければいけなかったが、在留資格「特定活動」で働いているEPA介護福祉士候補者を在留資格「特定技能」に切り替え、継続して雇用する予定であると話された。さらに、特別養護老人ホーム「ポプラ」の近くに介護学校「ポプラ学園(仮称)」を作るとともに、2020年には年ネパールに「ポプラ学園ネパール校」を作り200人のネパール人の就学支援を行うとともに介護人材を育成し、将来「ポプラ」で働く人材を獲得する意向であると話された。

次に、ポプラで働く外国人介護人材に本校生が聞き取り調査を行った。対象は、フィリピン人EPA介護福祉士合格者1人と2018年に来日したフィリピン人EPA介護福祉士候補者3人、そして日本語学校に通うベトナム人留学生の1人である。多くの介護人材は台湾やサウジアラビアに働き行く人が多いがなぜ日本を選んだかという質問をすると、子どもの頃からアニメやドラマで日本には馴染みがあり興味があったからという答えが帰ってきた。また、日本は安全で安心して暮らせるからという答えもあった。日本で困っていることを質問すると、外出するときに駅の地図や表記が漢字で読めないのが困ると回答した。また、病院に行くときに日本語がわからないのが困ると回答もあった。そして、将来は日本で働きたいか、自国に帰りたいかという質問に対しては、すべての人が日本で介護福祉士の国家試験に合格して継続して日本で働きたいと答えた。もし合格しなかったら母国に帰り日本語教師になりたいと答えた人もいた。

日本の介護現場の現状と介護現場で働く外国人の現状を知ることができ、非常に有意義な体験であった。

成果および成果の発信

今回の実地調査に関しては、成果集にデータベースとしてまとめ生徒と他校に配布した。

フィールドワークin池田報告書例

1年3組16番 西條 仁那

私がこのフィールドワークに参加した理由は、聞き取り調査をして新たな発見をすることが好きだからです。また、フィールドワークin姫路や、SGH フィリピンスタディツアーで得たデータとの比較ができると思ったからです。

今回のフィールドワークに参加するにあたっての問題意識は、日本で働いている人からはどのような結果を得られるのかを楽しみにしながら参加しました。フィールドワークin姫路でもインタビューをしましたが、今回は今非常に注目されている介護の現場で働いている人を対象にしていたので、好奇心をくすぐられました。また、フィリピンスタディツアーで得られた日本以外の国へ行った人のデータがとても印象に残っていたので、日本で働いている人の良いことと困っていることはなんだろうかと様々な思いを巡らせて参加しました。

現地調査で分かったことは、中東諸国と日本の労働環境が全く違うということ、日本ではやはりコミュニケーションが外国人労働者にとっては一番の問題になっていることです。ポプラに働きに来られている方は日本語が上手で驚きました。日本語を学ぶために多くの努力をしたのだらうと思いました。正直、そこまでしなければいけないのかと驚きました。日本はコミュニケーションの問題さえなければ外国から大勢労働者が来るであろうという外国人労働者たちのうちの1人が言っていた言葉が忘れられません。改めて日本はもったいないことをしていると思ったと同時に、入管法を改正したにも関わらず、本当に外国人労働者を受け入れる気があるのかと疑ってしまいました。また、ポプラさんは積極的に外国人を受け入れており、その姿勢や、働いていらっしゃる外国人の方々がお話している姿を見て、なんて素敵な場所だろうと思いました。居心地がよかったです。谷さんの話から、フィリピンなどから来る外国人労働者の方が日本人より介護の世界に合っている事を知って安心し、これからも増えて欲しいと思いました。

今後、今回の調査結果を踏まえて、日本の利点と改善点をまとめて、大量の外国人労働者を快く受け入れることのできる環境にするためにはどのような事をする必要があるのかを見出したいです。また、どうすればたくさんの外国人が日本の介護の現場に働きに来るのか、どうすれば外国人の受け入れに不満をもつ日本人の考え方を変えられるのかということも、一緒に考えたいです。

研究開発の内容

6 課題研究活動の取組

(10) 国内フィールドワーク「フィールドワーク in ワン・ワールド・フェスティバル 2019」における課題研究活動

目標

NGO・NPO や国際機関・政府機関・教育機関・企業などの 100 を超える出典団体が国際協力や社会的課題解決の取り組みを幅広く紹介する西日本最大規模のイベントにおけるフィールドワークを通して、SGH の課題である「移民研究」をはじめとする社会的課題や日本の未来の選択肢を考える契機とすることを目的とする。

対象学年

1 年次生全員 118 人

調査対象

ワン・ワールド・フェスティバルの出典団体



UNHCR ブースでの調査活動

調査日

2019 年 2 月 2 日(土)

内容

ワン・ワールド・フェスティバルにおける各自の調査活動



くじらブースでの調査活動

内容の詳細

本校 1 年次生全員がカンテレ扇町スクエアおよび北区民センターを会場に開催されたワン・ワールド・フェスティバル 2019 に参加して、フィールドワークを実施した。ワン・ワールド・フェスティバルは、「国連持続可能な開発サミット」で提言された SDG's が示す 17 の目標と理念を共有して、様々な団体・機関と出会い、情報と出会い、人と出会って、今後につなげるための「きっかけ」や「場」を提供することを目的に開催された。NGO・NPO、行政をはじめとする各種団体、学校、企業、教育機関等、100 を超える出典団体が国際協力や社会的課題解決の取り組みを幅広く紹介する西日本最大規模のイベントである。これに参加することで SGH の課題である「移民研究」をはじめとする社会的課題や日本の未来の選択肢を考える契機とすることを目的としてフィールドワークを実施した。生徒たちは事前に考えた調査項目について、各ブースを訪れメモをしながら熱心に聞き取り調査を行った。中には、ワークショップに参加して他の人とディスカッションをし、世界の諸問題について調査した生徒もいた。この日の活動を終えた生徒たちは聞き取り調査した内容をワークシートにまとめた。国際社会が抱える様々な課題について考える非常に良い機会となった。

ワン・ワールド・フェスティバル報告書例

訪問したブース等の名称

国連 UNHCR 協会
聞きたいこと / 調査したいこと

UNHCR について
調査したこと / わかったこと

UNHCR とは難民を支援する機関である。難民が発生する原因は主に紛争である。シリア、アフガニスタンは未解決問題のままである。難民は 1 日 500kcal の支援物資で生きている。難民として他国に逃亡し、普通の暮らしに戻るまで、約 16 年かかる。UNHCR 援助対象者は、約 7,144 万人であり、統計史上最多となっている。

訪問したブース等の名称

フィリピンスタディツアーの
可能性

聞きたいこと / 調査したいこと
フィリピンについて

調査したこと / わかったこと

- ・平均年収は 30 万円
- ・助け合いは当たり前
- ・自殺数がアジアで最も少ない
- ・国民の 82% が幸せと回答
- ・学歴社会

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(11) 国内フィールドワーク「SGHフィールドワークin浜松2019」における課題研究活動

目標

SGH「ブラジル移民史発見プロジェクト」課題研究の一環として、浜松学院大学での講義および聞き取り調査と浜松国際交流協会(HICE)での日本で働く日系ブラジル人への聞き取り調査を通して課題研究を深める契機とする。

対象学年

1,2年次生23人

訪問先

浜松学院大学 (2019年2月18日) 浜松市中区布橋3-2-3

浜松国際交流協会 (2019年2月19日) 浜松市中区早馬町2-1



光安アパレシダ先生による
講義の様子

実施日

2019年2月18日 (月) ~ 19日 (火)

事前学習

2019年2月12日 (火) 先行研究に関する学習

[参考論文]中井歩「ニューカマーと90年代以降の地方行政 - 浜松市の定住外国人と行政的対応 - 」The Human Science Research Bulletin 2007, No.6, 191-203

2019年2月13日 (水) プレゼンテーションの練習



HICE における
聞き取り調査の様子

内容

2月18日 (月)

浜松学院大学での本校生による「ブラジル移民史発見プロジェクト」課題研究の成果報告および光安アパレシダ准教授による講義「日系ブラジル人の現状と多文化共創」、浜松学院大学の日系ブラジル人学生への聞き取り調査

2月18日 (土)

浜松国際交流協会(HICE)において、HICEの事業説明およびHICEで働く日系ブラジル人への聞き取り調査

内容の詳細

2月18日 (月)

「ブラジル移民史発見プロジェクト」課題研究活動に取り組む1,2年次生23人が「フィールドワークin浜松2019」に参加した。1日目は浜松学院大学を訪問した。目的は、これまで取り組んできた「ブラジル移民史

発見プロジェクト」研究成果を光安アパレシダ先生に報告し、ご助言をいただくことで23日に芦屋市上宮川文化センターで行われる発表会に活かすことである。あわせて光安アパレシダ先生による講義を受けることで、日系ブラジル人の現状を知るとともにこれからの共創のあり方を考える契機とすることである。あわせて浜松学院大学で学ぶ日系ブラジル人の学生に聞き取り調査を行い、今後の研究に活かすことを目的にした。

まず、本校生が「高校生による移民の歴史発見プロジェクト～日本からブラジルに渡った日本人移民の歴史探求～」というテーマでプレゼンテーションを行った。このプレゼンテーションは、第1部「なぜ日本人はブラジルに移住したのか?」、第2部「日本人移民の暮らし」という構成で行った。生徒はこれまで取り組んできた研究成果を、パワーポイントを使って報告をした。この後、光安アパレシダ先生よりご助言をいただいた。先生は、今の日本人はかつて日本人がブラジルに移住したことをよく知らない人が多いので、是非、この研究成果を多くの人に発信してほしいとアドバイスをいただいた。次に、光安アパレシダ先生による「日系ブラジル人の現状と多文化共創」というテーマで講義があった。この講義は(a)日本とブラジルの関係について、(b)日系ブラジル人の現状と多文化共創についてという2つの観点で行われた。まず、日本とブラジルとの関係について話された。日本人のブラジルへの移民は1908年に始まり、多くの日本人はサンパウロ州やパラナ州に居住していることを説明された。先生はご自分のルーツをとりあげ、光安家は日本人、日系人、アフリカ系、ポルトガル系、イタリア系の家族構成であり、現在は民族の多様性が進んでいることを話された。次にブラジルで活躍する日本の企業を取り上げられた。また、ブラジルで人気がある日本のアニメを取り上げ、ブラジルでは日本の企業や文化が社会で受け入れられていることを説明された。次に、ブラジルから日本にもたらされているものについて話された。鉄鉱石やコーヒー、大豆、アサイー、そして航空機を例にあげて、これらのものはブラジルから日本に輸出されていることを説明された。現在では、日本とブラジルは深い関係があることがわかった。次に、日系ブラジル人の現状について話された。1990年の入管法改正により、南米・フィリピンから日系人が多く来日し、彼らは定住者の資格を持ち日本で長期滞在し永住者の資格を持つようになったと説明された。しかし、2008年のリーマンショックを契機に日本に居住する日系ブラジル人は減少するが、近年、ブラジルの政治や経済情勢の悪化により、また日本にやって来るブラジル人が増えていると話された。これにより、日本語を話せない子どもが増えていることを指摘された。子どもたちは日本語がわからず学校で苦労している現状について説明された。最後に、多文化共生を実現するには多くの課題があることを説明された。具体的には、日本語の学習、住まい、不就学の問題、差別など多岐にわたり、一つ一つを丁寧に理解する必要性を述べられた。講義の後は質疑応答が行われ、本校生の質問に光安アパレシダ先生は丁寧に回答した。最後に、浜松学院大学の学生である渡辺氏に聞き取り調査を行った。渡辺氏は日系3世であり、小学生の時に来日した。日本語習得に苦労したが、独学で学んだという。彼は日本人で

実地調査データベースの例

調査日	2019年2月18日
調査場所	浜松学院大学
調査対象氏名	渡辺 ジュンヤ
職業	浜松学院大学4年生
基本情報	
1	あなたの年齢区分を教えてください
Ans.	20代
2	あなたの性別を教えてください
Ans.	男性
3	あなたは日本に来て何世目ですか？
Ans.	三世
4	あなたの日系世代は何ですか？
Ans.	日系三世
5	あなたの日系世代は何ですか？
Ans.	未婚
6	あなたの学歴について教えてください
Ans.	大学以上(日本)
7	あなたの国籍を教えてください
Ans.	ブラジル
民族意識	
1	あなたはオリンピックでどのチームを応援しますか？
Ans.	ブラジル
2	あなたは家庭内でブラジル料理と日本料理のどちらを頻りに食べますか？
Ans.	ブラジル料理
3	あなたは自分をどの程度ブラジル人と思えますか？
Ans.	ややブラジル人
生活で使用することば	
1	あなたは家庭において、以下の家族に対してどのようなことばを使っていますか？
Ans.	祖父世代：日本語にポルトガル語が混ざる 親世代：ポルトガル語のみ 子供世代：ポルトガル語のみ
2	あなたは仕事や学校でどのようなことばを使っていますか？
Ans.	日本語のみ
3	あなたは自分の日本語とポルトガル語能力についてどのように評価していますか？
Ans.	日本語の読み書き能力：よくできる 日本語の聞く話す能力：よくできる ポルトガル語の読み書き能力：よくできる ポルトガル語の聞く話す能力：よくできる
4	過去に、あなたは日本語を学ぶためのクラスに通っていましたか？
Ans.	通っていません(理由：家庭ではいつもポルトガル語を使用しているから)
5	過去にあなたは子や孫をポルトガル語教室に通わせていましたか？また、理由を教えてください。
Ans.	通っていません
6	過去にあなたは子や孫をポルトガル語教室に通わせていましたか？また、理由を教えてください。
Ans.	子や孫がいない

ありブラジル人でもあるというアイデンティティを持っていることがわかった。また、家庭ではブラジル料理を食べるがフェイジョンは醤油で味付けるなど、ブラジルと日本の食文化が融合していることがわかった。

この日は、セルビッツというブラジル料理の店で食事をした。このセルビッツはブラジル料理の他、ブラジルの雑貨を売っている店である。この店に来店するのはほぼすべてが日系ブラジル人であった。そして、この店にはポルトガル語で書かれた新聞や情報誌が多く置かれていた。この浜松では日系ブラジル人が集住しており、彼らの生活と文化を保ちながら生活していることがわかった。

2月19日 (火)

「フィールドワークin浜松2019」の二日目は、浜松国際交流協会HICEを訪問した。多文化共生政策を進める浜松市でその中心的な役割を果たしている浜松国際交流協会での取り組みを知ることで、今後の日本の選択肢を考える契機とすることを目的とした。また、このHICEで働く日系ブラジル人に聞き取り調査を行い、日系ブラジル人の現状について調査することをもう一つの目的とした。

まず、HICEの事業報告を受けた。浜松国際交流協会は、浜松市の国際交流、多文化共生分野における推進母体として設立され今年で36年目となる。多文化共生センターと外国人学習支援センターの2つの事業に取り組んでいる。まず、浜松がブラジル人の他、フィリピン人、ベトナム人、中国人、ペルー人など多くの外国人が居住していることを説明された。その中で、多文化共生センターは、相談・情報提供、地域共生、多文化防災、人材育成、多様性を生かしたまちづくり、多文化共生活動支援といった6つの活動を行っていると話された。浜松市に住む外国人に対して、言語支援、メンタルケアなど多くの支援を行っていることがわかった。

次に、HICEで働く日系ブラジル人職員2人に聞き取り調査を実施した。この後、HICEの施設を見学した。様々な言語で書かれた外国人向けの情報誌やパンフレットが置かれており、多文化共生が進んでいることが実感できた。

成果および成果の発信

今回の実地調査に関しては、成果集にデータベースとしてまとめ生徒と他校に配布した。

フィールドワークin浜松2019報告書例

1年2組30番 原 詩乃

私は今回、1日目に浜松学院大学に足を運んで日系ブラジル人の光安氏、渡辺氏に話を聞いてきました。光安氏から、ブラジルの日本への移民について詳しく教えていただきました。そして、渡辺氏からは、日本での暮らしについて話を聞きました。ブラジル人はブラジルの政治、経済の状況が悪化したため日本に移住し、更に、1990年の日本の入管法改正により、移民が増加しているということがわかりました。しかし、文化の違い、言葉の壁を乗り越えるのに苦労したとおっしゃっていました。実際に、和式トイレの使い方など聞きにくいこともあり日本の生活に慣れるのが大変だったり、日本語がわからないから、勉強についていけずにそのまま中退してしまうなどの例があるとおっしゃっていました。また、日本とブラジルの価値観の違いなどもあるので、これらを改善するような政策を日本は更に作っていく必要があると思います。また、日本語を教える、サポートすることのできる機会も作ることが日系ブラジル人にとって必要なことだと思います。また、ブラジルに限らず、日本人も講演会などを通して移民についての知識を高めることによって、移民の人と支えあうことができると思います。

2日目には、HICEの方々の聞き取り調査をしました。日系ブラジル人である、岡田氏、大島氏に話を聞いているうちに2人とも自分をブラジル人と思っており、本当はブラジルで暮らしたいが、子どもことや将来の生活のことを考えて、日本に暮らすことにしたとおっしゃっていました。そのため、環境もしくは経済的な面で変化が起きれば日系ブラジル人の多くはブラジルに帰還するのではないだろうかと考えた。また、食生活の面でも、フェイジョンを頻繁に食べるわけではないがブラジルの料理を日本料理と同じ頻度で作り、食べるとおっしゃっていました。更には、フェイジョンに醤油やうめぼしなどの日本の伝統的な食品を加えて食べていることから日本とブラジルの伝統文化を融合した新しい文化ができていくと感じた。

この2日間を通して、日本とブラジルの深い関係を知ることができた。そして、日本の入管法改正やブラジルの経済悪化から更に移民が増えるだろう。移民受け入れを支えるプロジェクトや機会を更に作る必要があります。そして、日本人である私たちも支えられる人材になるべきだと思います。

研究開発の内容

6 課題研究活動の取組

(12) 国内スタディツアー「スタディツアー@関西学院大学・立命館大学・神戸市外国語大学」における課題研究活動

目標

課題研究活動の一環として、大学を訪問し移民の研究者による講義およびディスカッションを通して、移民研究を深める契機とする。

対象学年

1年次全員 120人

訪問先

関西学院大学
神戸市外国語大学
立命館大学

実施日

2018年7月17日(火)



関西学院大学にて長友淳教授による講義

内容

- 1) 大学側による説明
- 2) 移民研究者による講義および質疑応答
- 3) 施設見学、キャンパスツアー

内容の詳細

スタディツアー@関西学院大学

国際高等学校1年次生40人が「スタディツアー@関西学院大学」に参加した。国際高校をバスで出発し、関西学院大学の上ヶ原キャンパスに到着した。

まず、関西学院大学国際学部の長友淳教授の講義を受けた。講義のタイトルは「移民研究を行う意義～『移民マップ』作成から見えてくること～」であった。

最初に、長友教授より研究の意義について話があった。次に、移民の定義について話があった。広義の意味での移民と狭義の意味での移民とがあり、言葉の定義づけを行うことが研究では重要であることを話された。

次に、社会学とはどのような学問なのかという話をされた。分析単位と調査手法という2つ観点から社会学を説明されたが、分析単位がマイクロである文化人類学やマクロである経済学・政治学に対して、社会学はその中間にあたることを説明された。次に、質的な調査方法をとる文化人類学と、量的な調査方法をとる経済学・政治学に対して、社会学はその中間にあたることを説明された。そのうえで、リサーチクエストンをしっかり立てることが課題研究活動では重要であることを訴えられた。

次に、多様化する移民という話をされた。まず、高度人材としての「留学生」の受け入れについて説明された。次に、家族統合についてアメリカ合衆国を例にあげて説明された。さらに、労働移民についてオーストラリアを例にあげて説明された。最後に、難民についてドイツでの難民受け入れを例にあげて説明された。

次に「移民マップ」作成の意義について説明された。人の移動を地図にすることで可視化するところから、様々な考察ができることを話された。

最後に移民研究の意義について説明された。まず、移民が増えると犯罪が増えるというような偏見から脱

却することが重要であることを訴えられた。次に、課題研究の論理性について無理な一般化はしないほうがよいというお話をされた。次に、政策提言についてふれられ、個人のレベルで無理して提言する必要はなく、分析の結果を明らかにすることが重要であると話された。最後に、比較するという課題研究の手法は危険であるという話をされた。例えば、国と国の移民政策についても単純に比較できるものではなく、事例研究としてアプローチすることが需要であると訴えられた。

長友教授は話だけでなく、途中、生徒のディスカッションを通して講義を進められた。大学の講義にふれられ有意義な体験となった。

長友教授の講義の後は、関西学院大学高大接続センターの野原氏より大学説明を受けた。

その後、関西学院大学の食堂で食事を済ませた後、キャンパスを見学し、バスで国際高校に戻って来た。

スタディツアー@神戸市外国語大学

国際高等学校 1 年次生 40 人が「スタディツアー@神戸市外国語大学」に参加した。国際高校をバスで出発し、神戸市外国語大学に到着した。

大学説明を受けた後、国際関係学科の篠田実紀教授の講義を受けた。講義のタイトルは「移民と国家」であった。まず、移民と難民の定義について話された。次に、太平洋戦争時におけるアメリカ合衆国の国内で起こった日系人の強制収容について説明された。真珠湾攻撃を発端に太平洋戦争が始まると、戦時転住局主導で 110,000 人以上の当時アメリカ合衆国に居住していた日系人が収容所に収容された。収容所があった場所は都市から離れた所で、日系人は自分が住んでいた場所から地方の収容所に送られたことを説明された。当時、日本人が収容所でどのような待遇を受けていたかについて触れられた。現在、日系人の収容所は撤去され、その場所に慰霊塔が残されているだけで、その歴史は人々の記憶から忘れ去られようとしていることを指摘された。戦争時におけるアメリカにいた日系人の歴史について考えるよい契機となった。



神戸市外国語大学にて
篠田実紀教授による講義

講義の後は、構内で昼食をとったあとキャンパスツアーを行った。その後は、教室で神戸市外国語大学に在籍する本校の卒業生との交流を行った。参加してくれた卒業生は 4 人で、その中には SGH 課題研究活動に取り組んだ学生もあり、本校の 1 年次生に向けて課題研究活動に取り組む上での助言をするとともに、励ましの言葉を送った。

すべての活動を終えて、バスで本校に帰ってきた。

スタディツアー@立命館大学

国際高等学校 1 年次生 40 人が「スタディツアー@立命館大学」に参加した。国際高校をバスで出発し、立命館大学の衣笠キャンパスに到着した。

まず、立命館大学国際関係学部の南川文里教授の講義を受けた。講義のタイトルは「トランプ時代のアメリカと移民～国際関係学の視点から～」であった。

最初に、ベンジャミン・フランクリンや J.F.ケネディの言葉をとりあげアメリカ合衆国が移民の国であるという話をされた。次に、出生地主義と血統主義の説明をされ、出生地主義をとるアメリカ合衆国に対して、日本は血統主義をとることを説明された。次に、オバマ大統領就任演説をとりあげ、アメリカ合衆国の多文化共生政策について説明された。さらに、1820 年から 2009 年までの移民の数のデータをあげ、近年はヒス

パニックやアジア系の移民が増加している傾向があることを指摘された。その中で、アメリカ経済を動かす移民企業家を例にあげて、アメリカ合衆国において移民が社会に貢献していることを訴えられた。次に、トランプ氏が大統領に出馬する表明文をとりあげ、トランプ氏が当初から移民に対して偏見の考えを持っていることを指摘された。さらに、トランプ氏の支持者のうち 50%が、移民が重大な罪を犯すと考えていることをデータで示された。これを受けて大統領に就任したトランプ氏は中東諸国からの入国を規制する政策を打ち出した。さらに、2012年のデータからアメリカ合衆国における外国生まれの人々のうち 74%が合法移民であり、非合法移民が 26%いることを指摘された。このような現状で、トランプ大統領は非合法移民の分離政策を実施している。このようなトランプ政権の難民・入国規制政策に対して評価している人が 38%に対して、評価しない人が 59%と多数を占めることを指摘された。さらに、移民がアメリカ合衆国に害を及ぼしていると考えている人が 25%いるのに対して、75%の人が移民はアメリカ合衆国にとって役に立つ存在であると考えているデータを示された。最後に、移民・難民問題への挑戦という観点でお話をされた。難民を生み出す戦争を防止すること、移民・難民の社会統合共生社会の実現、さらに途上国における貧困の問題、移民・難民支援の国際ルールの作成などの課題をあげられた。南川教授の講義は現在のアメリカ合衆国を中心にとりあげたもので生徒は興味をもって先生の話聞いた。



立命館大学にて
南川文理教授による講義

講義を終えた後は、大学説明を受け、立命館大学の学生によるキャンパスツアーを実施した。その後、構内で昼食をすましてバスで国際高校に帰ってきた。

スタディツアー@関西学院大学・神戸市外国語大学・立命館大学報告書例

関西学院大学

1. 本日の講演を聞いて、その要旨をまとめよ。また、講演において講師が最も訴えたかったことは何かを書くこと。
 - ・研究とは、学という枠に収まる学問領域、オリジナルデータ、先行研究との往復、理論との往復という特徴がある。
 - ・移民研究を行うにあたって、問いの設定に注意。一般化、政策提言、安易な比較が問題になっている。壮大な問いには無理があり、先行研究レビューをしっかりと行う必要がある。
2. 講師の話聞き、あなたの意見およびあなたが考える課題を述べよ。
 - ・移民は怖いというイメージがあることが課題だと思いました。移民は心に深い傷を負っており、心のケアが必要という、移民の現状を知らせるべきだと思います。
3. 質疑応答を含めて、全体の感想を書きなさい。
 - ・人によって移民の定義が異なるということを知り、難民や不法滞在者も移民に含まれるということに驚きました。そして何より、日本が難民の受け入れに非協力的であることに愕然としました。事件やテロを起こすかもしれないという懸念は分かりますが、収容所に押し込めて、結局受け入れずに送還しているという事実が非常に残念に思いました。

立命館大学

1. 本日の講演を聞いて、その要旨をまとめよ。また、講演において講師が最も訴えたかったことは何かを書くこと。
 - ・アメリカの憲法では、アメリカで生まれたらアメリカ人。日本の憲法では、父または母が日本人であれば日本人。アメリカは出生地主義。
 - ・トランプ支持者の多くは移民に対しネガティブな考えを持っている。
 - ・2016年時点で、移民はアメリカにとって必要かという問いに、7割以上が必要と答えている。
2. 講師の話聞き、あなたの意見およびあなたが考える課題を述べよ。
 - ・日本の血統主義。アメリカのように国籍は関係なく受け入れ、そういった人々がこれからの日本を支えていく、という考えを持つべきだと思います。
3. 質疑応答を含めて、全体の感想を書きなさい。
 - ・トランプ大統領の政策と世論に大きなギャップがあると知りました。このギャップを埋めることが、トランプ大統領、アメリカにとって重要な課題だと思います。移民政策に成功した、あるいは失敗した国について調べたいと思います。

神戸市外国語大学

1. 本日の講演を聞いて、その要旨をまとめよ。また、講演において講師が最も訴えたかったことは何かを書くこと。
 - ・移民...自らの意志で、より良い暮らしを求めてくる人。Migrant。自国を離れてその国に12ヶ月以上滞在する人。
 - ・難民...自らの意志ではなく、自国から迫害され、逃亡してきた人。Refugee。
2. 講師の話聞き、あなたの意見およびあなたが考える課題を述べよ。
 - ・自由を奪われた避難移転センターに収容された人々について、虚偽ではなく真実を報道するべき。国民を安心させるため、人々に楽しく暮らしているように振る舞わせ、報道している。
3. 質疑応答を含めて、全体の感想を書きなさい。
 - ・西海岸が日本人に優しい場所ではないと知っていたが、今日その理由が分かりました。過去の誤解が今も続いているのは悲しいと思います。言葉だけではなく、その国の幸せな歴史、悲しい歴史を幅広く勉強することの大切さを知りました。

研究開発の内容

6 課題研究活動の取組

(13) 国内スタディツアー「SGH スタディツアー@関西学院大学 2018」における課題研究活動

目標

SGH の課題研究の一環として、2 年次プロジェクトチームが取り組んでいるタイ人技能実習生に関する研究および外国人家事労働者に関する研究について、大学の教員との勉強会を通して、課題研究を深める契機とする。

対象生徒

2 年次生 6 人

訪問先

関西学院大学 国際学部

実施日

2018 年 8 月 27 日(月)



発表の様子

内容

- 1) 本校 2 年次生 2 グループによる課題研究のプレゼンテーション
- 2) 長友淳教授との質疑応答およびディスカッション

内容の詳細

関西学院大学にて「SGH スタディツアー@関西学院大学 2018」を実施した。目的は、課題研究活動に取り組む SGH プロジェクトチームの 2 年次生 6 人が現時点での課題研究活動の成果をポスターにまとめてプレゼンテーションを行い、これを関西学院大学国際学部長友淳教授に見ていただき質疑応答を通して、課題研究を深める契機とすることである。そして、スーパーグローバルハイスクール全国高校生フォーラム 2018 および SGH 甲子園の発表に向け、課題を見つけプレゼン内容を改善することである。まずタイ人技能実習生について研究しているグループの生徒 3 人がポスターを使ってプレゼンテーションを行った。これに対して長友教授と質疑応答を行った。この後、本校生と長友教授がテーマに関するディスカッションを行った。長友教授より本校生に対して、研究の目的を明確にすること、その上でリサーチクエスチョンを構築することにより全体の構成を改善すべきであるという助言をいただいた。次に、外国人家事労働者の研究をしているグループの生徒 3 人がポスターを使ってプレゼンテーションを行った。これに対して長友先生との質疑応答およびディスカッションを行った。この中で、調査結果から無理な一般化をしないこと、例えば外国人家事労働者の受け入れについて賛成が少ないから日本において家事労働に対するニーズが少ないと結論づけるのではなく、どのような人にニーズがあるかそのニーズを具体的に掘り下げることによって、日本における外国人家事労働受け入れに関する課題を明確にすることができるといった助言をいただいた。今回のスタディツアーは今後の課題研究活動の改善につながるよい機会となった。今後は全国高校生フォーラムや SGH 甲子園に活かせるよう努めていきたい。

成果および成果の発信

この課題研究活動の成果を全国高校生フォーラム 2018、甲南大学リサーチフェスタ 2018、第 6 回高校生「国際問題を考える日」で発表した。

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(14) 国内スタディツアー「SGHスタディツアー@大阪大学2018」における課題研究活動

目標

SGHの課題研究の一環として、大阪大学社会学共創連続セミナー第1回「防災のある街へ」に参加することで、外国人と防災を考える契機とする。

対象生徒

1年次生2人

訪問先

大阪大学会館 講堂 豊中市待兼山町1-13

実施日

2018年9月1日 (土)



大阪大学における講演の様子

内容

- 1) 講演 「大阪府北部地震のメカニズム」
「自然災害に対する地域防災の課題」
「大阪北部地震における阪大生と市民の避難行動」
- 2) パネルディスカッション

内容の詳細

課題研究活動に取り組む本校1年次生2人が、大阪大学で開催された大阪大学社会学共創連続セミナー第1回「防災のある街へ」に参加した。

セミナーは3部に分かれており、1部は大阪地震のメカニズムや南海トラフのリスクについての講演を聞いた。2部では、自然災害に対する地域防災の課題についての講義を聞いた。具体的には、1960年代から1990年代までは大災害があまりない時代だったが、現在、当時の人々が想定していた災害よりも大きな災害が多発しており、「これまで起きなかったから起きない」という考え方から、「これまで起こらなかったことはこれから起きる」という考え方に転換する必要があると説明された。そして第3部では、大阪地震の際の避難所でのことについて報告を受けた。日本では災害時の現場対応、情報収集は各自治体に任されているのが現状で、特に文化や言語の壁がある在留外国人への対応が課題となっている。特に熊本地震の際には4か国語だけでは対応できず、災害時における外国人との情報共有が課題となった。大阪地震の際には、避難所であった大阪大学の体育館には避難した140人のうち130人が外国人であったという報告を受けた。しかし、熊本地震の教訓を生かし、QRコードなどを使用し、様々な言語に対応したことによりパニックにならなかったと話された。

このセミナーに参加し、外国人と防災について考える契機となった。今後の課題研究活動に活かせるよう努めたい。

成果および成果の発信

今回のスタディツアーに関しては、各自が報告書を作成し成果集としてまとめて全員に配布することで成果の普及をはかった。

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(15) 国内スタディツアー「スタディツアー@移民政策学会2018年度年次大会」における課題研究活動

目標

SGHの課題研究の一環として、「移民政策学会2018年度年次大会」に参加し、日本における最先端の移民研究報告を聞くことで課題研究を深める契機とする。

対象学年

2年次生および3年次生10人

訪問先

東京大学 駒場キャンパス
東京都目黒区駒場3-8-1

実施日

2018年5月26日(土),27日(土)



大会の様子

内容

- 1) シンポジウムへの参加
- 2) 自由報告部会への参加
- 3) 「社会連携セッション」における本校生による発表

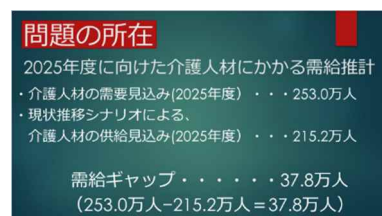
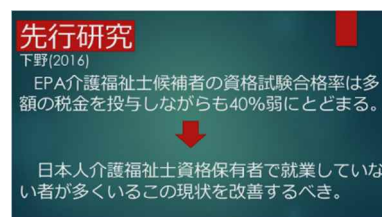
内容の詳細

SGH課題研究に取り組む本校生2,3年次生の10人が、東京大学駒場キャンパスで開催された「移民政策学会2018年度年次大会」に参加した。

1日目は、まず移民政策学会元会長の渡戸一郎氏による特別講演「再考 - 多文化主義とインターカルチャリズムの狭間で - 」が聞かれた。内容は、日本のこれまでの移民政策をめぐる議論についての話であった。この中で日本の移民政策は90年体制の骨格は変わっておらず停滞しているという意見や、移民政策の断片化が構造的に進行し続ける「合意なき移民政策」が進められているという意見が紹介された。次に、移民政策の動向という話があり、広島県安芸高田市や岡山県美作市の例をあげ、人口減少に悩む地方の中小都市では外国人の誘致や定住化を目指す事例が増加していることをあげられた。次に、「地域国際化」から「多文化主義」へという話があった。内容はヨーロッパにおける1970年代の移民受け入れ状況から1990年代の統合政策や国民化という多文化政策が取り上げられた。一方、日本では、浜松市の例をあげ、「多文化共生」という名の統合政策構築についてふれられた。課題として、母語教育や地方参政権について取り上げられた。日本の移民政策の変遷を知るにはよい機会となった。

次に、ミニシンポジウムが開かれた。「複数国籍の是非と「国のあり方」 - 国籍法と実態のギャップから - 」というテーマで、4人のパネリストによる報告を受けた。その中で韓国が複数国籍容認に至った経緯や日本での国籍確認訴訟の話があり、本校生は興味を持って熱心に聞いていた。日本の国籍法の問題点や課題を知るよい機会となった。

2日目、午前中は4つの会場で自由報告部会が開催され、それぞれの会場で研究者による研究成果が報告された。本校生10人は各会場に分かれて、自由報告部会に参加した。最新の移民政策について学ぶよい機会となった。



生徒の発表用
パワーポイント例

11時から別会場で社会連携セッションが開催され、本校3年次生の3人が研究成果について発表を行った。一人目は長岡すみれによる「移民受け入れにおける日本の課題と考察～日本とスペインの比較を通じて～」というテーマの研究報告が行われた。移民受け入れでは後進国であったスペインが21世紀に移民政策を整え、今では多くの移民を受け入れる移民受け入れのモデル国となっている現状を報告した。特にスペインで実施された移民への教育の事例をあげ、日本でも移民への教育が重要であると主張した。次に、吉川亜実による「日本における介護人材の受け入れに関する考察～池田市の特別養護老人ホーム「ポプラ」での調査結果を通して～」というテーマで研究成果の報告が行われた。日本は現在、介護現場における深刻な人材不足に陥っている現状をデータで示した上で、外国人の介護人材を受け入れる必要性を主張した。具体的には、特別養護老人ホームで行った調査結果を基に、日本にはEPA介護福祉士候補者が日本の介護現場で継続して働くことができる仕組みがないことを指摘し、外国人介護人材の受け入れの仕組みを改善することを主張した。最後に、伊藤由奈が「日本における少子高齢化の問題と考察～オーストラリアの外国人受け入れとの比較～」というテーマで研究成果の報告を行った。外国人高度人材の受け入れに焦点をあて、ポイント制度で受け入れられるオーストラリアの技術移民と日本の高度専門職を具体的なデータを提示したうえで比較分析を行った。日本は外国人高度人材への魅力という面ではオーストラリアより劣ることをデータで指摘し、高度人材受け入れの仕組みについて改善が必要であることを主張した。3人の報告が行われた後、質疑応答の時間が設けられた。3人に対して会場の多くの専門家より質問があり、本校生はこれらの質問に対して丁寧に答えることができた。本校生が学会で発表するのは今回で4回連続となるが、3人が報告するのは今回が初めてであり、このような場で多く生徒が発表できたことは非常に有意義でよい経験となった。今回の経験を今後の課題研究活動に活かし、さらにより論文の作成に努めていきたい。

午後は「日本の難民政策～難民グローバル・コンパクトから見たその立ち位置～」というテーマでシンポジウムが開催され、本校生も参加した。日本の難民受け入れの現状とその課題を知ることができた。

成果および成果の発信

今回の学会での発表は、校内および校外の発表会でポスターにまとめて報告を行った。

スタディツアーin移民政策学会2018年度年次大会報告書例

.....
2年1組 25番 中沢 薫

移民政策学会1日目は特別講演会とミニシンポジウムが行われた。特別講演会は、渡戸一郎教授による多文化共生についての内容だった。グローバル化が進む中で、日本でも多民族化、多文化化が進展しつつある。しかし、依然として「みんな同じが当たり前」が社会秩序形成のエスノナショナルな基盤として強固なので、外国人との差異を敏感に受け止める傾向が強いのも事実である。どれだけ柔軟な考えを持つことができるかがこの問題を解決する鍵だと思った。ミニシンポジウムは主に複数国籍についての講義だった。最も印象に残ったのは宣元錫教授による講義だ。韓国では条件付きで複数国籍が容認されている。韓国で複数国籍が認められるようになった要因は、二重国籍を有する人の95%が韓国籍を放棄したことによる人口の流出である。私は、韓国の政策を参考にして日本でも複数国籍を容認するべきだと思う。22歳まで認められている複数国籍を突然否認する意味は果たして本当にあるのか疑問に思う。「複数国籍を持っていると2つの国から保護されるため複数国籍を有する者に利益を与えるのではないか。」と最初は考えていたが、「もしそうであったとしても、1つの国籍しか有さない者に不利益はない。」という意見を聞いて、考えが変わった。もっと柔軟な考え方をすべきだと反省した。今回のミニシンポジウムの複数国籍についての講演は非常に興味深いものだった。具体的にどのような人が重国籍なのか、重国籍を認めている国はどこなのか、日本の政策などをこれから調べていきたいと思う。

2日目は技能実習生についての自由報告と高校生による研究発表、難民についての国際セッションを聞いた。技能実習生については何度か勉強したことがあったため、内容を深く理解することができた。また、改めて日本が学歴を重視していることを知った。海外では学歴よりも職歴が重要視されるそう。今の日本では、即戦力となる技術を持った人材が、学歴によって採用されないという事態が多く出てきてしまうと思う。雇用する側と雇用される側が互いに利益を得るためにはどうすればいいのかを考えていくべきだと思った。高校生による研究発表では、本校の3年次の生徒3人の他、名城大学付属高等学校の生徒3人が発表した。名城大学付属高等学校は地域に密着して多文化共生について研究していた。研究に対する自分たちの提案が明確で具体的だった。本校は移民がテーマで、少子高齢化の点から研究発表をしていた。しかし、発表を聴いていた専門家から「海外では少子高齢化以外にも移民を受け入れているかもしれないので、その部分をもっと深く調べてはどうか。」というアドバイスを聞いて、自分も他の観点について調べてみようと思った。来年度には私も論文を完成させなければならないので、今回の移民政策学会で学んだことの中からテーマを決めたいと思う。また、論文発表にも挑戦したいと思っている。

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(16) 国内スタディツアー「スタディツアー@移民政務学会2018年度冬季大会」における課題研究活動

目標

SGHの課題研究の一環として、「移民政務学会2018年度冬季大会」に参加し、日本における最先端の移民研究報告を聞くことで課題研究を深める契機とする。

対象学年

1年次生 2人

2年次生 8人

訪問先

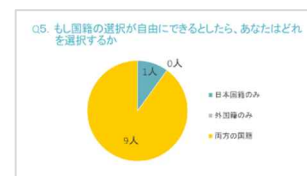
静岡県立大学 草薙キャンパス 静岡県駿河区谷田52-1



本校生による学会発表

実施日

2018年12月15日(土)



内容

本校生による発表パワーポイント例

- 1) 自由報告部会への参加
- 2) 「社会連携セッション」における本校生による発表
- 3) シンポジウムへの参加

内容の詳細

移民政務学会2018年度年冬季大会が静岡県立大学で開催され、本校から1年次生2人、2年次生8人の計10人が参加した。

まず、難民インタレストグループに参加した。ここではアフガニスタン出身の難民のアタイ・ジャファルさんの話を聞いた。彼は4歳のとき内戦に巻き込まれパキスタンに難民として移り、2009年来日した。「難民申請」は通らず「特別在留許可」という在留資格で暮らしている。「認定難民」と違い日本政府から経済的な支援も含めサポートはない。自国では目の前で多くの人が死んでいく現状を聞き、日本の難民受け入れについて考えるよい契機となった。

次に4つの会場で自由報告部会が開催され、それぞれの会場で研究者による研究成果が報告された。本校生10人は各会場に分かれて、自由報告部会に参加した。最新の移民政策について学ぶよい機会となった。

自由報告部会と同時に社会連携セッションが開催された。このセッションでは、静岡県立大学公認クラブであるリトルワールドキャンプ実行委員会による「リトルワールドキャンプ成果報告」、COLORS(Communicate with Others to Learn Other Roots and Stories)による「外国にルーツを持つ身として支援をする中で感じること～COLORSの活動を通じて～」、本校2年次生の長野羽良による「外国人労働者の受け入れについて - 技能実習における家族滞在に焦点を当てて -」、本校2年次生の中沢薫による「日本の国籍制度に関する考察 - 日本における重国籍保有者に焦点をあてて -」、本校2年次生の山本希穂による「難民に関する高校生の意識に関する考察 - 大学生と高校生の難民に関する意識調査の比較を通して - 」という報告が行われた。

本校から3人の2年次生が課題研究活動の成果をそれぞれ報告した。長野は、日本にやって来る技能実習生は家族滞在が認められていないが、ヨーロッパでは国際人権B規約に基づき家族の呼び寄せ指令が出されたことを例にあげ、家族と共に暮らすことは基本的な権利であると指摘した。技能実習生に行った聞き取り調査の結果から73%の技能実習生が将来も日本で働くことを希望していることを報告し、これは妻子や家族を母国と日本の間で分離させた状態が長く続くことを意味すると指摘した。家族と共に暮らすという権利を守るために、家族滞在を認める仕組みを作り出すことが必要であると結論づけた。次に、中沢は現在の日本では出生数は減少している一方で新生児の約50人に1人が重国籍を持ち、他の国にルーツを持つ子どもが増えていることを報告した。一方、国籍法により22歳までに国籍を選択しなければならず、意に反して日本国籍を喪失した事例が発生していることを指摘した。問題の所在として、重国籍者のアイデンティティを国が本人の意思に反して決めてしまうことをあげた。重国籍の生徒への調査の結果から、彼らは重国籍を持つことを希望しており、日本人でも外国人でもないアイデンティティを持つことを報告した。現在の国籍制度は、重国籍者のアイデンティティを否定することになりかねないので、重国籍者の人権に配慮した国籍制度に改正する必要があると結論づけた。山本は、大多数の大学生が難民の定義や存在も知らないという先行研究をあげ、本校の高校生に対して難民に関する意識調査を行った。その結果、先行研究の大学生より本校生の方が難民に関する理解が深いことを報告した。この理由として、本校はSGHの活動として移民・難民の学習に取り組んでいることをあげた。また、難民支援協会の代表理事である石川えり氏の講演後に同様の意識調査をしたところ、難民の理解度はさらに深まったことを報告した。難民に対する理解を深めるためには学校での教育が有効であると結論づけた。3人の発表の後、質疑応答が行われた。専門家より多くの質問をいただき、生徒は丁寧に回答した。

本校生が学会で発表するのは今回で5回連続となるが、このような場で多く生徒が発表できたことは非常に有意義でよい経験となった。今回の経験を今後の課題研究活動に活かし、さらにより論文の作成に努めていきたい。

その後、「さかなと外国人 - 和食を支える日系人・技能実習生・留学生」というテーマでシンポジウムが開催され、本校生も参加した。日本の漁業を多くの外国人が支えている現状とその課題を知ることができた。

成果および成果の発信

今回の学会での発表は、第6回高校生「国際問題を考える日」でポスターにまとめて報告を行った。

スタディツアーin移民政策学会2018年度冬季大会報告書例

~~~~~  
 2年2組13番 笠井 遥香  
 ~~~~~

2018年12月15日、県立静岡大学での移民政策学会に参加しました。各代表者が今までの研究を発表し、発表者以外の参加者は、参加を希望するプレゼンの教室に自由に入出入りできるような形式でした。国際高校からは3名のプレゼンを行った代表者がいましたが、今回私はオーディエンス側として参加しました。

私がこの学会において特に印象に残ったのは、プログラムの最初のアタイ・ジャファル氏のプレゼンでした。国際高校に入って、難民や移民についての講演会を何回か受けさせていただきましたが、そのほとんどが難民や移民の方々に支援し、研究されている方だったので、実際の難民の方から直接お話を伺うのは非常に貴重で、私にとって新鮮なものでした。多くの苦勞や、パワーハラスメントが日常になっていたジャファル氏の経験は、私たちが簡単に理解できることではありませんが、その現状を知り、何か働きかけることが私たちだけでなく彼らにとっても、重要なことだと気づきました。「難民問題、そして私に寄り添ってくれた多くの人達がいたから今の私があります。世界の平和に貢献したいです。」ジャファル氏のこの言葉に心を揺さぶられました。自らの命を守り、生きるために必死だったそうですが、それでもこの世界を少しでも良くしたいという気持ちが強く伝わってきました。それと同時に、このプレゼンを聞いた私たちは、このことを周りの日本人に伝えるべきだと思いました。なぜなら、私たち国際生は難民の現状を知る機会が多く、触れることがよくありますが、他校の人は難民の現状や問題どころか、定義までも明確には把握しておらず、知る機会も少ないのではないかと思うからです。

今回のこの活動を通して、私は多くの有意義な情報を得ることが出来ました。しかしそれは、世界中すべての国際問題のごく一部で、まだ他にも多くの考えなければならぬ課題があるのだと感じます。私は今回のこのような学会を通して、それらの国際問題の現状や論文作成法、どのように人に伝えるかを学び、今後の提案日本の選択の授業で製作する論文に生かしていきたいと思ひます。また、最終目標として、日本が外国人だけでなく、難民などの方々をも受け入れやすい、グローバルな国をめざせるよう、少しでもその活動に貢献をしたいと考えています。

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(17) SGH講演会における課題研究活動

【SGH基調講演】

目標

移民研究を行っている大学の教員の講義を聞くことで、移民研究に関する理解を深める契機とする。

対象学年

1年次生120人

場所

本校国際交流ホール

実施日

2018年4月23日 (月)

講師

関西学院大学 国際学部 教授 長友 淳 氏



長友教授による講演の様子

内容

関西学院大学国際学部の長友淳教授を招き、平成30年度SGH基調講演を実施した。「移民研究を始めるにあたって～ディベート課題研究活動に向けて～」というテーマで、これから移民研究を始める1年次生が課題研究活動に取り組むために必要な課題について講演をいただいた。また、質疑応答により移民研究に関して理解を深めると契機とした。

内容の詳細

関西学院大学の長友教授による「移民研究を始めるにあたって～ディベート課題研究活動に向けて～」の講演内容は、(a)「移民研究の意義」、(b)「オーストラリアにおける事例研究」、(c)「ディベート課題研究活動にむけて」、という3つの観点から話をされた。

まず、移民研究の意義について話があった。移民研究を通して、自分の社会を知ることができることが研究の意義であると話された。また、研究にあたっては、経済面に注目するとともに、移出国のプッシュ要因、移入国のプル要因の両面からアプローチすることの重要性を訴えた。

次に、オーストラリアの事例研究について説明された。オーストラリアはなぜ白豪主義をやめ多文化主義を取り入れたかということについて話された。背景にはアメリカにおける公民権運動や南アフリカにおけるアパルトヘイトに対する批難など国際的な情勢が大きく影響していることを指摘された。また、多文化主義を取り入れることにより1990年代よりアジア系の移民が増えていった経緯を話された。また、オーストラリアのポイント制を取り上げ、自国が必要とするスキルをもった人材をポイント制によって受け入れていることは移民受け入れ政策を考えるうえで参考になると指摘された。

最後に、本校で取り組むべきディベート課題研究活動の意義についてお話された。(ア)感情論にならない

こと、(イ)根拠に基づくこと、(ウ)イメージで語らないこと、という3点に注意してほしいと話された。また、質疑応答の場面では、質問が単発で終わることなく反論や結論に結びつくように工夫すべきであると指摘された。結論では、新たな議論を出すのではなく、自分たちの立論の正当性を根拠を用いて述べることで、そして相手の立論の矛盾点をつくることが重要であると述べられた。

この後、質疑応答の時間がとられ、生徒からの質問に対して長友教授が丁寧に回答された。

これから移民研究を行う本校1年次生に対して、移民や移民研究について丁寧にわかりやすく話をいただき、有意義な講演会であった。

成果および成果の発信

長友教授の講演を受け、ディベート課題研究活動を始める契機とした。ディベートの成果は報告書にまとめ、校内外に配布し、成果の共有を図った。

長友教授による講演に関する生徒のワークシート回答例

1. 講演を聞いて、あなたが考える「移民研究の意義」とはどのようなものか。具体的に書くこと。

- ・ 移民研究を通して、これからの日本、そして世界に目を向け、問題点を発見し、その解決策を自ら提示、他人と共有し、より良い世界を作っていくこと。
- ・ 移民だけでなく、移民の周りに関わっている人やモノ、環境などを含めて研究すること。移民とはどういう人々のことを言うのか、移民へはどのような取り組みや対策をしているのか、移民への接し方や、国ごとの移民への関心などである。

2. 講演を聞いて、本日の話をディベート課題研究にどのように活かそうと思ったか。具体的に書くこと。

- ・ 感情論にならない。エビデンス(アカデミックな論文など)に基づく議論をする。イメージで語らない。
- ・ と が自分に当てはまっていることに気がきました。私は自分の意見を貫くタイプなので、感情的になってしまうことが多いです。SGHを機に改善し、良いディベートをしたいです。
- ・ 自分の意見や視野を、ディベートを通して広げていくこと。

3. 講演を聞いて、全般的な感想を書くこと。

- ・ オーストラリアは、白豪主義から多民族主義に転換した国だと知りました。戦後の労働力不足を補うために移民を受け入れたそうです。日本にもオーストラリアを見習うべきところはあると思いました。
- ・ オーストラリアの移民の人々のことや、移民に対する差別や接し方、環境や取り組みなどを知ることができ、自分の知識がまた1つ広がったと思います。オーストラリアだけでなく、他の国の移民やその歴史についても、これからのSGH活動で学んでいきたいと思います。
- ・ 移民を通して多文化主義を導入できるなど、良い点があるのなら、移民の受け入れを増やすべきだと思います。

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(18) SGH講演会における課題研究活動

【第1回SGH特別講演】

目標

移民研究を行っている研究者の講義を聞くことで、移民研究に関する理解を深める契機とする。また1年次生のディベートおよび移民マップの課題研究活動を進める契機とする。および2、3年次生の論文作成等の課題研究活動を進める契機とする。

対象学年

1年次生120人、2年次生120人、3年次生120人

場所

本校体育館

実施日

2018年7月18日(水) 3,4時間目

講師

筑波大学名誉教授 駒井 洋



駒井教授による講演の様子

内容

講師に筑波大学名誉教授である駒井洋氏を招き、平成30年度第1回SGH特別講演を実施した。「日本の移民問題を考える 外国人を受け入れるために考えること」というテーマで、移民研究に関する課題研究活動を行っている全校生に対して、日本の移民政策について講演いただいた。また質疑応答により移民研究に関して理解を深めると契機とした。

内容の詳細

駒井氏は次の骨子に沿って講演を勧められた。

- 1) SGH研究論文についての感想
- 2) 移民「問題」の前提
- 3) 日本の移民問題の基本構造
- 4) 世界市民主義の基本理念

まず、駒井氏は本校の昨年度に本校生が作成した論文についてコメントをいただいた。一点目に、問題意識を明確に提示することが重要であると述べられた。特に、自分自身と移民との接点に注目したうえで、移民が疎外されていることに対する「社会への怒り」が問題意識の原点であると述べられた。次に先行研究を取り上げるうえでの留意事項について説明された。先行研究を単なる事実としてとらえるのではなく、どのような問題意識で書かれており自分の問題意識の方が優れているのだという視点をもってほしいと話された。最後に、よい論文とはよい家を建てるのと同じで、よい家とはしっかりとした柱があり欠陥がないのと同様に、よい論文は論理的に一貫性があり欠陥がないものであると話された。

次に、世界市民主義と国民国家という観点から話があった。具体的には、高度な人材は受け入れるが難民は排除することは、カントの世界市民主義の考え方には反しており、国家という概念をこえて、すべて人を

無条件で受け入れるべきだと述べられた。次にグローバル資本主義と放逐という観点で話された。グローバル資本主義においては、富が一部に集中して分配されることがない。これにより毎年5万人以上の餓死者が発生している。このような現状から多く人が生きていくために地中海をわたりヨーロッパにわたっている現状に目を向けるべきだと述べられた。

次に日本の移民問題の基本構造について話された。まず、90年体制の確立について説明された。1990年に入管法が改正されたが、労働者は受け入れるが「移民」を受け入れないという姿勢は現在も変わっていないと指摘された。その中で多くの外国人が日本で居住し、その結果として外国人と外国人の婚姻による国際児が84万人も存在する。一方で、日本に帰化する外国人も45万人を数える。日本には移民政策がなく、そのために包摂政策も存在しないことが問題であると指摘された。特に技能実習制度を取り上げ、低賃金労働を強いられ家族滞在が許されず5年で帰国しなければならないのは人権を無視した政策であると話された。

最後に、世界市民主義の基本理念について話された。人権とは、生存権、社会権、自由権、参政権が含まれるが、日本は日本国籍を持つ人にしか人権を与えていない。これはカントがいう「すべての人の人権を認める」という理念に反すると述べられた。最後にロールズの「公正としての正義」を取り上げ、最も不遇な人々にも富を分配すべきであり、移民にも人権や幸福追求権を認めるべきであると話された。

駒井教授による講演に関する3年生のワークシート回答例

講演の後に質疑応答の時間が設けられ、多く生徒が質問や意見を述べ、これに対して駒井氏が丁寧に回答して下さった。今回の駒井氏の講演は、本校の移民研究の進捗状況を踏まえたうえで、分かりやすく丁寧に話されたので移民問題について理解が深まった。移民研究を進める上で有意義な経験となった。

成果および成果の発信

駒井氏の講演内容は、1年次のディベートにおける立論や反論および結論の参考とした。また、2,3年次における論文作成や課題研究活動の参考とした。論文の成果については、校内の中間発表会や校外の学会や発表会で報告を行った。

3年生

第一部「SGH 研究論文についての感想」に関して、研究や論文作成にあたり、重要なことは何か。話を聞いて、まとめなさい。

- ・問題意識を持つことが最も重要である。
- ・先行研究としては、問題意識の優れた本や論文を用いて、単なるデータとして扱ってはいけない。どのような視点で書かれているかが重要であり、自分の視点の方が優れていることを主張しなければならない。
- ・問題意識によって調査方法は変わるが、二次資料よりも自分でデータを作ることが大切である。
- ・良い論文を作ることは家を作ることと同じで、柱が不可欠であり、矛盾してはいけない。

2. 第二部「移民問題の前提」に関して、移民問題の前提とは何か。話を聞いて、まとめなさい。

- ・移民問題の主な原因は、国民国家とグローバル経済主義の2つである。国民国家である先進国は、有能な人材を求めため、難民を受け入れないことが移民問題につながっている。
- ・グローバル資本主義によって特定の場所に富が集中するため、アフリカを中心に貧困の人々が増加している。
- ・カントの「地球は人間全てが平等に共有すべきである」という世界市民主義の考え方。

3. 第三部「日本の移民問題の基本構造」に関して、日本の移民問題とは何か。話を聞いて、まとめなさい。

- ・90年体制では、「移民」の概念をそもそも認めておらず、移民は原則受け入れないことが定められている。
- ・一方で、合法で約270万人の日本で暮らす人々や、国際児、帰化をした人々、中国やブラジルからの日系移民が実際には多く存在するという矛盾が発生している。
- ・日本が定める技能実習制度は非人道的である。単身で、厳しい人身拘束のもと最長5年の滞在し、その後の入国は白紙状態である。
- ・在日韓国人や国際児への支援はほとんどなく、日本に順応できなかった人々が不良化してしまうという悪循環が生まれている。

4. 第四部「世界市民主義の基本理念」に関して、世界市民主義の基本理念とは何か。話を聞いて、まとめなさい。

- ・国際連合が第二次世界大戦後に発表した人権宣言によって定められる最低限の人権、生存権、教育・労働などに関する社会権、自由権、参政権を守ることが必要。
- ・全ての人々に公正な機会が与えられ、最も不遇な人々を有利にしようという考え=格差原理が重要である。
- ・inclusion × integration。移民の文化を認め、経済的、社会的にも受け入れるべきである。

5. 講演全体を通して、感想および日本の移民問題に関するあなたの考えを書きなさい。

- ・日本政府が移民という概念を認めていないことには驚きました。多くの「移民」と呼ばれる人々が暮らしている現実と矛盾していることを考えると、全く制度が追いついておらず、面倒なことは後回しにするのが日本のスタンスなのかなと感じました。
- ・これまで学んできたように、日本は他国と比べて移民に対する対応が充実していないということに改めて実感しました。特に国際児はこれから増加し、今のままで辛い思いをする国際児が増えてしまうため、もっと制度を整えるべきだと思います。
- ・日本国憲法で定められている基本的人権を移民たちに適用することを急がないのは、日本はまだ移民に対して良いイメージを持っていないからだと思います。日本では、移民が働く日本人の職が無くなると思われるのかもしれない。移民も含めて同じ「日本」に暮らしている人間として、移民に対するイメージを改め、日本国憲法を適用するべきだと考えます。

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(19) SGH講演会における課題研究活動

【第2回SGH特別講演】

目標

日本で難民支援を行う専門家の講演を聞き、難民に関する理解を深める契機とする。

対象学年

1年次生118人、2年次生120人、3年次生120人

場所

本校体育館

実施日

2018年11月15日 (木) 6,7時間目

講師

難民支援協会 代表理事 石川えり氏



石川代表理事による講演の様子

内容

難民支援協会から代表理事の石川えり氏を招き、平成30年度第2回SGH特別講演を実施した。「日本の難民支援の現状と、今、私たちにできること」というテーマで、移民研究に関する課題研究活動を行っている全校生に対して、難民問題を考える契機とすることを目的に講演を行った。

事前学習

2018年11月8日(木) 7時間目

全校生が「難民を知る」(2018.8.1.The BIG ISSUE) を読み、ワークシートにまとめ学習した。

内容の詳細

難民支援協会の代表理事である石川えり氏を招き、第2回SGH特別講演を実施した。

石川氏は、講演の冒頭で2013年に来日したシリア難民のジュリ氏を取り上げた。2015年に在留資格「人道配慮」が認められ、家族を呼び寄せることができたことを説明した。

次に難民の定義について説明された。続けて、現在の難民発生の実況について話された。近年は、アフガニスタン、南スーダン、コンゴ民主共和国、ソマリアなどで難民が多く発生していると説明された。次にシリアの都市アレッポを取り上げ、反政府組織があることから政府軍の空爆を受けて廃墟となったアレッポの映像を提示された。これにより多くの人々が難民となっていることが理解できた。シリア難民の受け入れ国はトルコやレバノンなどの周辺国が多く、これらの国ではこれ以上の難民を受け入れることは困難であると説明された。

続けて、日本と難民の関係について話された。日本の難民受け入れの歴史は古く、モロゾフは難民として神戸にやってきたことを紹介された。1978年にはインドシナ難民が、2010年には第3国定住によるミャンマー難民が日本にやってきたことを説明された。しかし、2017年には2万件の難民申請があり、日本が難民認定をしたのはわずか20人で認定率は0.2%であった。これに対してドイツの難民認定率は25%であり、日本は先

進国の中でも極めて難民認定率が低いことを指摘された。また、日本の難民申請制度についても話された。難民として認定されるためにはA4の用紙に800ページ以上の書類を用意する必要があり、これには日本語訳をつけなければならない。しかも、難民申請しても認定されるまでに3年はかかり、再申請および裁判をすると認定までに10年かかると説明された。しかも、申請すれば半年すれば就労ができるが、それまでは働くことができないので支援なしでは生きていけないのが現状であると話された。また、難民と認定されると日本語支援を受けることができるが、認定されないと支援は受けられないと話された。

また入国管理局による収容施設の問題についても取り上げられた。難民としてやってきても在留資格を持たない人は入国管理局の収容施設に入れられることがある。この施設は完全に閉鎖された空間であり、仮放免になるまで最長7年もかかることがあると話された。中にはこの過酷な状況から自殺する人もいると話された。

最後に私たちが考えるべきことについて話された。日本には、難民を含め200万人以上の外国人が居住していることをとりあげ、難民を含めて社会の一員として認めていく社会統合の必要性を強調された。

講演の後、質疑応答の時間が設けられた。難民問題を研究している生徒など多くの生徒が質問し、これに対して石川氏は丁寧に回答した。

実際に、難民申請者や難民の支援をしている石川氏の話聞き、日本における難民受け入れについて考えるよい契機となった。



石川代表理事による講演に関して質問をする本校生の様子

成果および成果の発信

石川氏の講演内容は、1年次の移民マップにおける移動の要因の参考とした。また、2,3年次における論文作成や課題研究活動の参考とした。なお、この石川氏の講演により難民に関する高校生の意識がどのように変わったかを分析し論文にまとめた生徒は、移民政策学会2018年度冬季大会でこの研究成果を報告した。

石川代表理事による講演に関する3年生のワークシート回答例

3年生

1. 日本の難民支援の現状について、講演を聞きわかったこと、および気がついたことを書きなさい。

- ・難民認定率は0.2%と、G7諸国と比べて下位に位置する。ドイツなどの受け入れに積極的な国は90%以上である。また、申請には大量の書類と、日本語訳をつけた書類を提出しなければならない。
- ・受け入れ率の低さは、紛争地から遠いことが表向きの理由である。
- ・申請してから入管、認定/不認定まで平均3年、人によっては10年かかる。その間は支援もなく、生活に苦勞する。
- ・大阪にも難民収容施設があり、政府から帰国するように言われていても、帰国できない人を収容している。
- ・公的だけではなく、民間でも難民認定を始めている。
- ・難民としてではなく、留学生として受け入れることもあるが、定住支援等は少ない。

2. 日本の難民支援に関して、わたしたちができることは何か。あなたの考えを書きなさい。

- ・難民に関心を持ち、日本の難民支援の遅れに対して危機感を持つこと。
- ・難民支援の募金に協力すること。
- ・受け入れ数を増やすことが大切。
- ・難民に対する根拠のない偏見を取り除くことが、日本で難民の人が生きやすい環境を作る第一歩である。

3. 講演全体を通して、感想および日本の難民支援に関するあなたの考えを書きなさい。

- ・石川先生と同じく、日本の難民認定制度は厳しすぎると考えます。一度難民と認定すると継続的な経済的、または生活上の支援が必要になるので、認めにくい現状は理解できるが、日本は難民条約に批准している以上、難民が平和で安全な国家のもとに暮らす権利を奪ってはならないと思います。
- ・世界で最も平和で安全な国の日本がもっと難民問題と向き合い、平和の大切さを率先して紛争地にもアピールできたらいいなと思いました。
- ・反政府的な発言をしただけで秘密警察に追われるという、日本では考えられないような話を聞き、最初から衝撃を受けました。また、先進国である日本の難民支援が非常に遅れていることに失望しましたが、支援している人々がいること自体が大きな救いとなるし、難民の現状が幅広く知られることで、改善が望めるのではないかと思います。

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(20) 「平成30年度SGH課題研究中間発表会」における課題研究活動

目標

SGH活動の成果を発表することを通して、課題研究に対する関心を深め、より高次の研究活動に結びつけるとともにプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力の伸長を図る。

対象年次

全年次生(1年次生118人、2年次生120人、3年次生120人)

日程

2018年12月19日(水)

場所

兵庫県立国際高等学校 体育館



中間発表会の様子

内容

1) 1年次生発表

- (a) 「日本への移出経験があるフィリピン人に対する調査に関する事例研究～外国人を受け入れるために私たちが考えなければいけないこと～」 英語・日本語によるプレゼンテーション

2) 2年次生発表

- (a) 移民史発掘プロジェクト「KISEKI - ブラジルに渡った日本人」 動画によるプレゼンテーション
- (b) “Thai youths' attitude toward working in Japan - From the results of interviews of high school and college students in Thailand - ” 英語によるプレゼンテーション
- (c) 「アメリカ・イギリス・カナダにおける日本で働くことに関する意識調査」 日本語によるプレゼンテーション
- (d) 「日本の国籍制度に関する考察 - 日本における重国籍保有者に焦点をあてて - 」 日本語によるプレゼンテーション

3) 3年次生発表

- (a) 「日本における外国人介護人材の受け入れに関する考察 - EPAフィリピン人介護人材に対する実地調査を通して - 」 日本語・英語によるプレゼンテーション
- (b) 「外国人児童生徒に対する母語支援教育についての考察 - 兵庫県の取り組みを事例に - 」 日本語によるプレゼンテーション
- (c) 「在日朝鮮・韓国人の民族アイデンティティと母語の維持 - 民族アイデンティティと言語に関する実態調査から - 」 日本語によるプレゼンテーション

内容の詳細

まず、1年次生は、フィールドワークin姫路およびフィールドワークin池田で実施した調査結果を英語で報告した。次に11月に実施した「フィリピンスタディツアー」に参加した生徒が、フィリピンで実施した日本への移出経験者に対する聞き取り調査の結果を報告した。

2年次生の発表は、「移民史発見プロジェクト」課題研究活動に取り組む2年次プロジェクトチームのメンバー2人が、これまでの成果をドキュメンタリー作品として映像にまとめ上映した。次のグループは、タイでの聞き取り調査の結果をまとめ、日本で働くことに興味のある若者が多いが、彼らは日本で働くタイ人の実態を知らず、彼らが就きたい職業と日本が求めている人材にギャップがあることを英語で報告を行った。次のグループは、アメリカ・カナダ・イギリスで行った、日本で働くことに関する意識調査について結果をまとめ報告した。最後に、移民政策学会2018年度冬季大会で発表を行った生徒が、その内容を報告した。具体的には、本校の重国籍者に聞き取り調査を実施した結果、重国籍者の多くが日本人でもなく外国人でもないというアイデンティティを持ち、できれば重国籍を維持したいと考えていることを報告した。

3年次生は、学校設定科目「提案日本の選択」において3年間の課題研究活動の成果を論文にまとめ、授業内で行われた発表会において高い評価を得た3人の生徒が発表を行った。3人とも論拠となるデータを示しながら説得力のあるプレゼンテーションを行った。なお、吉川亜実の発表は移民政策学会2018年度年次大会にて報告されたものである。



3年次生によるプレゼンテーション(1)



3年次生によるプレゼンテーション(2)

評価

この発表会終了後に発表者と外部の支援員を対象に発表内容についての自己評価と他者評価を行った。この評価シートはSGH課題研究活動のルーブリックを基礎に作成した。

移民テーマに生徒ら学習 言語の壁など課題報告

芦屋国際高校

県立国際高校（芦屋市新浜町）で19日、移民をテーマにした成果を報告する発表会があった。全校生徒や保護者ら約300人を前に、各学年の代表生徒が英語を交えて堂々と発表した。

同校は3年前、世界を舞台に活躍できる人材育成のために、生徒が授業や海外の調査で学んだ成果を報告する発表会があった。全校生徒や保護者ら約300人を前に、各学年の代表生徒が英語を交えて堂々と発表した。

1年生はフィリピンを訪ね、日本への移住経験があるフィリピン人から聞き取った内容を報告。言語の壁を指摘する声が多く聞かれ、「読み書きを含めた日本語教育を充実させるべき」と提案した。

2年の山中風和さん（17）らのグループは約60年前、移民としてブラジルに渡った神戸の女性への取材を動画で紹介した。「移民側の立場になって問題を考えてほしい」と話し、移民

を関する文部科学省の「スーパーグローバルハイスクールの指定当初から、SGH事業として移民研究を通じて日本の選択肢を提案することを目的に、学習に取り組んできた。

1年生はフィリピンを訪ね、日本への移住経験があるフィリピン人から聞き取った内容を報告。言語の壁を指摘する声が多く聞かれ、「読み書きを含めた日本語教育を充実させるべき」と提案した。

2年の山中風和さん（17）らのグループは約60年前、移民としてブラジルに渡った神戸の女性への取材を動画で紹介した。「移民側の立場になって問題を考えてほしい」と話し、移民

海外で調査した結果を報告する生徒たち（芦屋市新浜町）

船やアマゾンでの生活を当時の写真を交えて伝えた。また、移民の子どもたちに対する母語教育の大切さを論文にまとめた3年の山本龍貴さん（18）は、生徒全体の約1割を外国人生徒が占めることを踏まえて、日本人の生徒に「二つの言語文化で苦難を担っている友たちがいると知ってほしい」と訴えた。（名倉あかり）

学年	1位	2位	3位
1年次	言語 9人	文化 7人	費用 2人
2年次	言語 25人	文化 9人	費用 仕事 3人
3年次	言語 15人	費用 4人	費用 3人

神戸新聞 2018年12月20日朝刊

研究開発の内容

6 課題研究活動の取組

(21) 校外の発表会「2018 年度スーパーグローバルハイスクール全国高校生フォーラム」における課題研究活動

目標

SGH 活動の成果を英語で発表することを通して、課題研究に対する関心を深め、より高次の研究活動に結びつけるとともにプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力の伸長を図る。

対象学年

2 年次生 4 人

日程

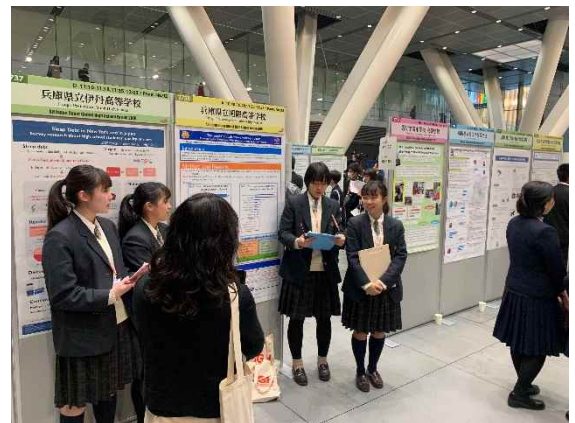
2018 年 12 月 15 日(土)

場所

東京国際フォーラム 東京都千代田区丸の内 3-5-1

内容

- 1) 基調講演
- 2) ポスターセッション
- 3) 生徒交流会(テーマ別分科会)
- 4) 生徒交流会(全体会)
- 5) 優秀校によるプレゼンテーション、表彰式
- 6) 表彰式・閉会式



本校生徒によるポスターセッション

内容の詳細

東京国際フォーラムにて 2018 年度スーパーグローバルハイスクール全国高校生フォーラムが開催された。全国から SGH 指定校およびアソシエイト校 140 校が集まった。本校からは課題研究活動に取り組む 2 年次生 4 人が参加した。午前中は開会式の後、ポスターセッションが行われた。本校は、” Thai youths' attitude toward working in Japan - From the results of interviews of high school and college students in Thailand - ” というテーマで英語によるプレゼンテーションを行った。内容は、人材不足に苦しむ姫路の中小企業ではタイ人の技能実習生が厳しい労働条件で働いていることが先行調査で分かった。実際にタイの若者が日本で外国人の労働実態を知っているかを調べた。次にタイで実施した聞き取り調査の結果、タイの高校生・大学生 53 人のうち 23 人が日本で将来働きたいと回答した。しかし、日本で働くタイ人の労働実態については知らないことが分かった。日本で働きたいというタイの若者に対して、日本で労働の現状を正しく伝えることが必要であるという発表を行った。高校教員や高校生など聴衆からの多くの質問に対して本校生は丁寧に英語で対応した。

午後からはテーマ別の分科会が行われ、本校生は Gr-9 の「移民・難民・多文化共生」の分科会に参加した。本校生 4 人はそれぞれ他校の課題研究に取り組む生徒と英語で議論および情報交換を行った。

その後は全体会、ポスターセッション優秀校によるプレゼンテーション、表彰式が行われた。本校における課題研究の成果を全国の発表会で報告できたことは非常に良い経験となった。また、他校の生徒と交流すること

により先進的な課題研究の事例を知ることができたことは有意義な体験であった。この経験を今後の課題研究活動に活かせるように努めたい。

本校生徒作成 プレゼンテーションポスター

Thai youths' attitude toward working in Japan

— From the results of interviews of high school and college students in Thailand —

Hyogo Prefectural International High School (2738) Shiho Hiramatsu · Haruna Mae · Yuna Sugimoto · Momoe Noguchi

Introduction

A previous survey carried out in small and medium-sized business in Himeji revealed that the working environment quality for technical intern trainees from Thailand was quite low. In order to collect additional data to understand this situation, we decided to research the background of the Thai worker in Thai.

Method and Results

[Purpose] Finding out the reason why the gap between technical intern trainees' expectation and actual dissatisfaction occurs.

[Method] Interview on 53 Thai youth : They are familiar with Japanese culture and language. The possibility of their coming to Japan is high.

[Results]

Fig.1 Expectation for working in Japan (Multiple answers allowed)

Improve my skills and knowledge.	29
Earning a lot of money.	18
Evaluations on my skills and abilities.	14
Going with my families	11
I do not want to work in Japan.	6

Lack of sufficient information

★11 people answered they expected to come to Japan with their family.
★ Under the ongoing law, foreign workers are nearly prohibited to bring their family.
SUGGESTION
It seems that they may not know about the law of working in Japan and actual situation of Japanese government being restrict for family visa.

Fig.2 The occupation Thai youth prefer (Multiple answers allowed)

business manager	34.5%
tour guide	31.0%
flight attendant	10.3%
factory worker	5.2%
politician	5.2%
domestic worker	3.4%
public officials	3.4%
nurse	1.7%
engineer	1.7%
secretary	1.7%
farmer	0
care worker	0
building industry	0
accommodation...	0
shipbuilding...	0

Gap between expectation and demand

Thai youth Expectation
 • Business master
 • Tour guide
 • Flight attendant
 • Domestic worker

Japanese demands
 • Farmer
 • Care worker
 • Building industry
 • Accommodation

SUGGESTION
We can say that there is a big mis-matching situation in jobs.

Conclusion

- Improving the quality of working environment
Needless to say
- Providing information
The Japanese government should put more effort into providing information for That people through **three steps**.
- Revising law system of working
 - a) Japanese government should concentrate on improving working environment of those jobs. ①Extending the minimum wage ②Appropriate working time ③Providing accommodation
 - b) technical intern trainees system should be revised to accept more jobs

References
 BUDSAEN, Tanyaporn, 2012, "Foreign Trainees and Technical Internship Programs : The Case of Thai Trainees", *Journal of the Graduate School of Humanities and Sciences* 14, Ochanomizu University , pp.311-319,
https://teapot.lib.ocha.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=39420&item_no=1&page_id=64&block_id=115

研究開発の内容

6 課題研究活動の取組

(22) 校外の発表会「リサーチフェスタ 2018」における課題研究活動

目標

SGH 活動の成果を英語で発表することを通して、課題研究に対する関心を深め、より高次の研究活動に結びつけるとともにプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力の伸長を図る。

対象学年

3 年次生 3 人

2 年次生 2 人

1 年次生 3 人

日程

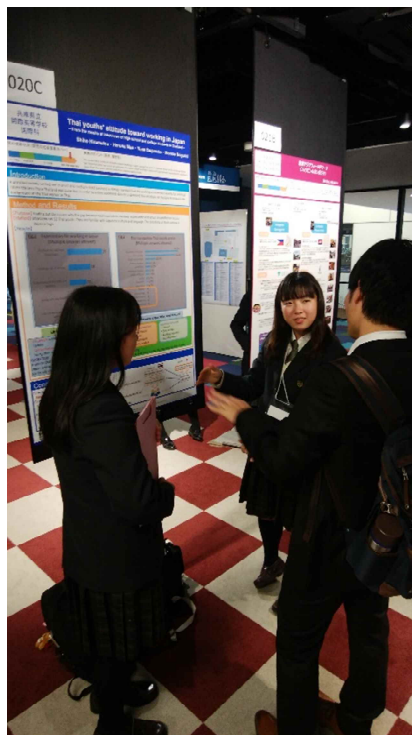
2018 年 12 月 23 日(日)

場所

甲南大学 KONAN INFINITY COMMONS

内容

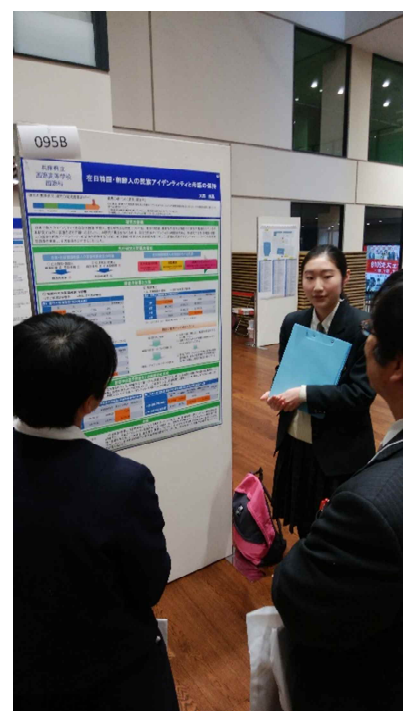
- 1) プレゼンテーション
- 2) グループワーク
- 3) 交流会・表彰式



本校 2 年次生徒によるプレゼンテーション

内容の詳細

2018 年 12 月 23 日に甲南大学岡本キャンパスにおいてリサーチフェスタ 2018 が開催され、大学生や県内および県外の高校が参加し 192 の課題研究の発表が行われた。本校からは SGH 課題研究活動に取り組む 3 年次生 3 人、2 年次生 2 人、1 年次生 3 人の計 8 人が参加した。3 年次生は 3 年間の課題研究の成果をポスターにまとめて発表を行った。大西由真は「在日朝鮮・韓国人の民族アイデンティティと母語の維持 - 民族アイデンティティと言語に関する実態調査から - 」、山本姫良々は「外国人児童生徒に対する母語支援教育についての考察 - 兵庫県の取り組みを事例に - 」、吉川亜実は「日本における外国人介護人材の受け入れに関する考察 - EPA フィリピン人介護人材に対する実地調査を通して - 」というテーマで、それぞれが学校設定科目「提案 日本の選択」の授業で作成した課題研究論文の内容を発表した。2 年次生の平松史帆と杉本優奈は “Thai youths' attitude toward working in Japan - From the results of interviews of high school and college students in Thailand - ” というテーマで英語を使って発表を行



本校 3 年次生徒による
プレゼンテーション

った。1 年次生の後藤千春・谷口みなみ・矢野詩織は「日本への移出経験があるフィリピン人に対する調査に関する事例研究～外国人を受け入れるために私たちが考えなければいけないこと～」というテーマで発表を行った。

プレゼンテーションの後は交流会が行われ、本校生は他校の生徒と一緒にグループワークに取り組んだ。この後、表彰式があり、本校 3 年次生の大西由真がロジカルデザイン賞を、同じく 3 年次生の吉川亜実がビッグデータ賞を受賞した。このリサーチフェスタは、課題研究に取り組む高校生他、大学生や大学院生も参加し、お互いの研究成果を知ることができ、非常に有意義な経験であった。

「リサーチフェスタ 2018」 ビッグデータ賞 受賞ポスターおよびロジカルデザイン賞 受賞ポスター

兵庫県立 国際高等学校 国際科

日本における外国人介護人材の受け入れに関する考察 -EPAフィリピン人に対する実地調査を通して-

A study of accepting care workers from abroad in Japan
—Through interviews with care workers in Japan on the Philippines EPA—

吉川 亜実

研究の進捗状況(研究の完成度表示バー)

目的及び調査方法

目的

調査

先行研究

調査

＜日本の現状＞

＜EPAに基づく外国人介護福祉士の定義＞

＜日本の現状＞

＜問題と考察＞

さらなる外国人介護人材の受け入れを目指して

＜課題と展望＞

兵庫県立 国際高等学校 国際科

在日韓国・朝鮮人の民族アイデンティティと母語の保持

大西 由真

研究の進捗状況(研究の完成度表示バー)

研究の動機

先行研究と問題の所在

調査の結果と分析

① 家庭内での言語使用の特徴

② 言語能力

③ 民族アイデンティティ

新解学校通学経験者と非経験者の比較

考察

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(23) 校外の発表会「第6回高校生国際問題を考える日」における課題研究活動

目標

SGH 活動の成果を発表することを通して、課題研究に対する関心を深め、より高次の研究活動に結びつけるとともにプレゼンテーション能力やコミュニケーション能力の伸長を図る。

対象学年

3年次生 2人

2年次生 9人

1年次生 13人

日程

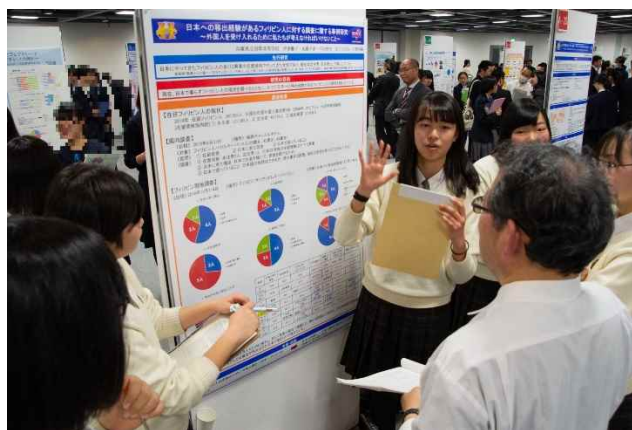
2019年2月11日(月)

場所

神戸ファッションマート 神戸市東灘区向洋町 6-9

内容

- (1) 基調講演 大阪大学 副学長 栗本英世
- (2) パネルディスカッション
- (3) 昼休み(教員向けランチオンセミナー)
- (4) ポスターセッション
- (5) 講評 大阪大学 全学教育推進機構講師 柿澤寿信



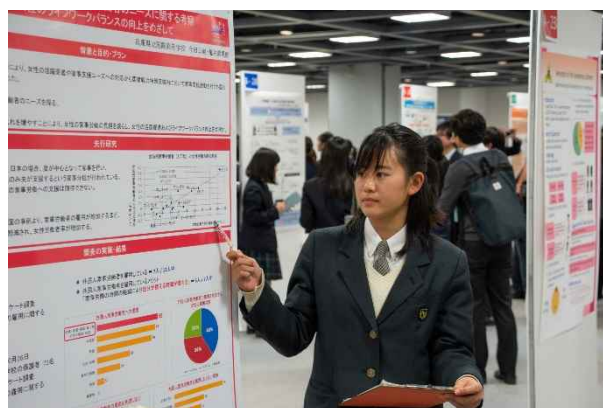
本校1年生による
ポスターセッション

内容の詳細

六甲アイランドの神戸ファッションマートで兵庫県教育委員会・大阪大学・WHO 神戸センターが主催する「第6回高校生国際問題を考える日」が実施された。本校からは、課題研究活動を行う1年次生13人、2年次生9人、3年次生2人の合計24人が参加した。

まず、大阪大学副学長である栗本英世氏による「MDGsからSDGs - 「だれひとり取り残さない」持続的開発のために世界的取り組みの目的と課題」というテーマで基調講演が行われた。次に、参加する高校生の中から4人の代表生徒によるパネルディスカッションが行われた。テーマは「SDGsの実現に向けて」であった。

昼休みの時間を利用して、教員向けランチオンセミナーが実施された。目的は、先駆的に課題研究活動に取り組んでいる学校の実践例を多くの学校で共有



本校2年生による
ポスターセッション

することで、各校の課題研究活動を深化させる契機とすることである。兵庫県立国際高等学校からはSGH担当の前川が、兵庫県立長田高等学校、兵庫県立柏原高等学校、兵庫県立川西明峰高等学校、兵庫県立兵庫高等学校、徳島県立城東高等学校、大阪府立千里高等学校の教員6人を対象にランチョンセミナーを実施した。内容は、兵庫県立国際高等学校が開発した課題研究活動に関するルーブリック「兵庫県立国際高等学校SGHルーブリック」の活用について報告を行った。具体的には、「兵庫県立国際高等学校SGHルーブリック」をもとにして、ディベート課題研究活動のルーブリック、「移民マップ」課題研究活動のルーブリック、論文「提案 日本の選択」課題研究活動のルーブリックといった生徒の課題研究活動ごとに派生ルーブリックを作成して生徒の課題研究活動を評価するとともに、課題研究活動の改善に活かしている実践報告を行った。各校の担当者からは、課題研究活動ごとにルーブリックを作成し工夫をしているところに感心したという感想があがった。

午後からは、ポスターセッションが行われた。本校からは10の発表を行った。具体的には、1年次生による「日本への移出経験があるフィリピン人に対する調査に関する事例研究～外国人を受け入れるために私たちが考えなければいけないこと～」、「フィリピン大学生の日本で働くことに関する意識調査の事例報告」、「日本以外の国への移出経験があるフィリピン人に対する調査に関する事例研究～外国人を受け入れるために私たちが考えなければいけないこと～」、2年次生による



本校3年生徒による
ポスターセッション

「日本の国籍制度に関する考察 - 日本における重国籍保有者に焦点をあてて -」、「難民に関する高校生の意識に関する考察 - 大学生と高校生の難民に関する意識調査の比較を通して -」、「外国人労働者の受け入れについて - 技能実習における家族滞在に焦点を当てて -」、「"Thai youths' attitude toward working in Japan - From the results of interviews of high school and college students in Thailand -」、「日本における外国人家事労働者のニーズに関する考察～女性のライフワークバランスの向上をめざして～」、3年次生による「外国人児童生徒の保護者への言語及び生活支援の提案」、「在日韓国・朝鮮人の民族アイデンティティと母語の維持 - 民族アイデンティティと言語に関する実態調査から」の発表を行った。なお、2年次生の「"Thai youths' attitude toward working in Japan - From the results of interviews of high school and college students in Thailand -」については英語による発表を行った。それぞれ10分間の発表と5分間の質疑応答を2回実施した。本校生の発表には大学教員や高校教員、高校生、社会人など多くの聴衆が集まり、それぞれの課題研究の成果について報告を行い、これに対して聴衆から多くの質問や助言をいただき、本校生が丁寧に対応した。

ポスターセッション終了後に全体で講評が行われた。大阪大学の柿澤氏より、この日のポスターセッションを振り返り、課題研究を深めるため必要なことについて話があった。研究とは、仮説検証のプロセスであり、その過程で論理的な思考に基づいた分析を行うことの重要性を説かれた。講評の中で、本校2年次生の「日本における外国人家事労働者のニーズに関する考察～女性のライフワークバランスの向上をめざして～」を事例としてとりあげ、アカデミックな先行研究と、それらをふまえた研究の位置づけを明確にすることの重要性を訴えられ、本校のこの発表はアカデミックな先行研究を取り上げている点が評価できると話された。また、

本校1年次生の「日本以外の国への移出経験があるフィリピン人に対する調査に関する事例研究～外国人を受け入れるために私たちが考えなければいけないこと～」の研究を事例としてとりあげ、比較の観点と整理が重要であると述べられ、本校のこの研究は、日本以外の国への移出経験者を対象に取り上げており、この観点は感心できると話された。柿澤氏は講評の中で4つの発表を事例としてとりあげたが、そのうち2つが本校生のものであった。本校の課題研究活動を高く評価していただけないことに感謝するとともに、生徒にとって自信とこれからの課題研究活動へのよい動機づけとなった。

この日は、これからも課題研究活動を続ける1,2年次生にとっては非常に良い経験となり、また論文をまとめた3年次生にとっては成果発表のよい機会となり、非常に有意義な一日だった。



全体講評の様子

全体講評で取り上げられた本校生による発表ポスター

日本以外の国への移出経験があるフィリピン人に対する調査に関する事例研究
～外国人を受け入れるために私たちが考えなければいけないこと～

兵庫県立国際高等学校 真好亜彩・清間有咲・高見愛・西條仁那

目的
日本以外の国への移出経験があるフィリピン人に対する調査を実施し、移出先での現状を知ること、日本がこれらからの外国人を受け入れるに当たり考えなければいけないことを提示する。

先行研究

【フィリピン人口移出の原因】

- 1970年代 オールショック ⇒ 技術者や労働力が必要
- 1974 マルコス政権 ⇒ 海外雇用政策を規定
- 1986 POEAの権限強化

フィリピン労働者の主な選着先 (計1023万人:13年末時点、同政府調べ)

- 米国 353.6万人
- サウジアラビア 102.9
- アラブ首長国連邦 82.2
- カナダ 72.2
- オーストラリア 39.8

【調査結果】

【分析・結論】

【分析】
中東諸国移出者 = 厳しい労働環境
⇒ NIES諸国への移出者 = 労働環境に満足
中東諸国での家事労働 = 人権侵害の危険性
移出の理由は経済的要素 ⇒ なぜ労働環境が厳しい中東諸国に行くのか?
⇒ フィリピンの労働者を送り出す仕組みに問題

【結論】
【移出国】フィリピン=移出者に移出先の情報提供 + 【移入国】中東諸国 = 国内の労働状況を情報提供
⇒ 日本 2019年在留資格「特定技能」新設 = 外国人労働者の大量受け入れ
⇒ 移出国へ日本の労働状況などの正しい情報提供

日本における外国人家事労働者のニーズに関する考察
女性のライフワークバランスの向上をめざして

兵庫県立国際高等学校 今田日向・亀井濃里鼓

背景と目的・プラン

① 背景
2013年国家戦略特別区域法により、女性の活躍促進や家事支援ニーズへの対応から国家戦略特別区域内において家事支援活動を行う外国人を受け入れる事業が開始された。

② 目的
日本における外国人家事労働者のニーズを探る。

③ プラン
外国人家事労働者の受け入れを増やすことにより、女性の家事労働の負担を減らし、女性の活躍促進およびライフワークバランス向上を目指す。

先行研究

① 松田・鈴木(2002)によると、日本の場合、妻が中心となって家事を行い、妻がすべてできない場合にのみ夫が支援するという家事分担が行われている。
⇒ 女性の就労に際しての夫の家事労働への支援は期待できない。

② 伊藤(2016)によると、先進国の事例より、家事労働者の雇用が増加するほど、女性の家事労働の負担が軽減され、女性労働者率が増加する。

調査の実施・結果

① 日程: 2017年11月3日
対象: タイ日本人会 12人
方法: 質問紙法によるアンケート調査
目的: 外国人家事労働者の雇用に関する意識調査

② 日程: 2018年10月11日～10月26日
対象: 兵庫県立国際高等学校の保護者 71名
方法: 質問紙法によるアンケート調査
目的: 外国人家事労働者の雇用に関する意識調査

考察・結論

考察
● 外国人家事労働者を雇用したいと考えている家庭
夫および妻が働いており、1/3の家庭は妻がフルタイムで働いている。
● 外国人家事労働者を雇用したくないという家庭
夫および妻が働いていない、2/3の家庭は妻がパートタイムで働いている。

結論
● 外国人家事労働者を雇用したいというニーズは、その家庭における夫と妻の労働形態に影響する。
● 夫と妻の労働時間が増加するほど外国人家事労働者の雇用に対するニーズは高くなる。

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(24) 校外での英語による「SGH高槻高等学校グローバルヘルス高校生フォーラム」における課題研究活動

目標

SGH高槻高等学校グローバルヘルス高校生フォーラムに参加することで、本校が取り組んできた課題研究活動の成果を活かし、フォーラムに貢献することを目的とする。あわせて、英語による発信力を育成することを目標とする。

対象学年

2年次生 1人

日程

2019年1月12日 (土)

場所

高槻高等学校 高槻市沢良木町2-5



本校生による英語での発表の様子

内容

- 1) 基調講演1 茅野 龍馬 WHO神戸センター
- 2) 基調講演2 木原 正博 京都大学教授
- 3) テーマ別ワークショップ
- 4) 生徒発表
- 5) 講評

内容の詳細

本校で課題研究活動に取り組む2年次生1人が高槻高等学校で開催された「グローバルヘルス高校生フォーラム」に参加した。このフォーラムには高槻高等学校・中学校の生徒約130人とスーパーグローバルハイスクール(SGH)に指定されている高等学校から招待された約20人の生徒が参加した。まず、WHO神戸センターの茅野氏および京都大学の木原教授によるグローバルヘルスに関する英語による基調講演があった。次に、生徒はテーマ別ワークショップが行われた。参加生徒は設定された16のテーマに分かれてグループディスカッションを英語で行った。本校生は「長時間労働と健康」というテーマのワークショップに参加した。このなかで、本校生は日本で働く技能実習生の長時間労働について調査に基づく報告をした。これを受け、グループでは外国人の長時間労働に焦点を当てて、解決方法を話し合った。このワークショップの後、全員が集まりそれぞれのグループからディスカッションの内容について報告を英語で行った。本校生もグループの一員として英語でスピーチを行った。生徒の報告に対して英語で講評があり、閉会あいさつでフォーラムは終了した。他のSGHの課題研究活動に取り組む生徒と意見を交わすことができ、よい経験となった。



茅野氏による講演の様子

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(25) 校内での英語による「ドイツフンボルト校生との移民・難民問題に関するディスカッション」における課題研究活動

目標

ドイツのフンボルト校の生徒と本校生がお互いに移民についてのディスカッションを行うことで、移民研究に関する理解を深め、日本の未来の選択肢について考える契機とする。

対象学年

1,2,3年次生7人

交流生徒

ドイツフンボルト校生12人

実施日

2018年6月1日(金)



本校生とフンボルト校生による
ディスカッションの様子

内容

- 1) 本校生による日本の移民難民問題に関するプレゼンテーション
- 2) 両校生によるディスカッション

なお、プレゼンテーションおよびディスカッションはすべて英語で行った。

内容の詳細

本校を訪問している姉妹校ドイツのフンボルト校生11人と本校生7人(1年次生2人, 2年次生4人, 3年次生1人)が移民問題に関するディスカッションを英語で行った。

まず、本校SGH担当教員が日本の移民政策について述べたあと、本校生が 1)日本への移民による社会貢献についての報告、2)日本への難民受け入れに関する報告 3)移民を受け入れることによる言語教育に関する報告を行い、フンボルト校生と意見を交換した。

まず1点目の移民の社会貢献について、フンボルト校生は移民に何かをしてもらうために来てもらうのではなく、いること自体が社会貢献であるという意見であった。理由は、移民が入ってくると経済が発展するからということであった。2点目の難民の受け入れについては、困っている人を受け入れるのは当たり前であるという意見が多かった。難民が増えれば仕事が減るといった意見があるが、むしろ新たなビジネスが生まれるので経済的な発展につながるという意見もあった。3点目の言語教育に関しては、言語教育は政府に責任があり国が移民に対する言語支援を行っていくべきであるという意見が出された。

フンボルト校生は手をあげて積極的に意見を述べていた。意見を述べたい意思がある生徒はずっと手をあげているなど、積極的に自らの意見を言うという姿勢に感心した。有意義な体験ができ、これを今後の課題研究活動に活かしていこうと思う。

成果および成果の発信

今回のディスカッションに関しては、各自が報告書を作成し成果集としてまとめて全員に配布することで成果の普及をはかった。

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(26) 校内での英語による「オランダ教員との移民についてのディスカッション」における課題研究活動

目標

オランダの教員と本校生がお互いに移民についてのディスカッションを行うことで、移民研究に関する理解を深め、日本の未来の選択肢について考える契機とする。

対象学年

1年次生9人

交流教員

オランダ教員5人

実施日

2018年10月25日 (木)



ディスカッションの様子

内容

- 1) 本校生による日本の移民難民問題に関するプレゼンテーション
 - 2) 本校生とオランダ教員によるディスカッション
- なお、プレゼンテーションおよびディスカッションはすべて英語で行った。

内容の詳細

5名のオランダ教員が本校を訪れ授業見学をし、7時間目に本校1年次生9名と移民問題について討議した。

まず、本校SGH担当教員が日本の移民政策について述べたあと、本校生が 1)日本への移民による社会貢献についての報告、2)日本への難民受け入れに関する報告 3)日本における外国人との日常生活における習慣の違いに関する報告を行い、オランダ教員と意見を交換した。

まず1点目の移民の社会貢献について、オランダは1960年代から70年代にかけて移民を大量に受け入れており、現在では移民がいるのは当たり前という状況であることがわかった。移民をオランダ人にする事で、彼らは働いて税金を払い社会貢献をしているという意見だった。ただし、現在のオランダでは、移民受け入れについては肯定派と否定派に分かれているという。2点目の難民の受け入れについては、全員が困っている人を難民として受け入れるべきであるという意見であった。オランダでは、ゲイなど性的マイノリティも難民として受け入れているという報告を受けた。難民を受け入れ、彼らに教育を施し、オランダ人として受け入れるオランダの統合政策について理解できた。3点目の生活習慣については、オランダでも生活習慣の違いからトラブルがおこることがあるという報告を受けた。現在のオランダでは特にモロッコなどの北アフリカからの移民が大量に入っている。オランダ教員が務める学校でもオランダ語を話せない生徒をいじめる事例があるが、話し合いによってお互いのことを理解し問題は解決すると話された。

オランダ教員は本校生に対して、わかりやすい英語で話しかけ、本校生の意見をたくさん聞いていただいた。オランダの移民の現状を知ることができ有意義な経験ができた。

成果および成果の発信

今回のディスカッションに関しては、各自が報告書を作成し成果集としてまとめて全員に配布することで成果の普及をはかった。

研究開発の内容

6 課題研究活動の取組

(27) 校外の英語での普及活動「SGH プレゼンテーション@西宮市立西宮浜中学校」における課題研究活動

目標

本校の SGH 課題研究活動の成果を広く中学生にも普及させることを目的とする。また、中学生に日本には多くの外国人が居住していることを認識させ、自分と異なる様々な人々の文化や価値観を尊重し、共に生きる社会を作り上げることの大切さに気付かせることを目標とした。

対象学年

3 年次生 7 人

プレゼンテーション対象

西宮市立西宮浜中学校 3 年生 80 人、教員 9 人、
西宮市教育委員会職員 2 人

実施日

2018 年 7 月 9 日(月)



西宮市立西宮浜中学校における
プレゼンテーションの様子 1

内容

国際高校 3 年生 7 名による SGH(スーパーグローバルハイスクール)課題研究活動の報告

- 1) 国際高校生徒によるプレゼンテーション
 - a) 国際高校の紹介 英語
 - b) 国際高校生徒の自己紹介 英語
 - c) 国際高校 SGH 課題研究活動の紹介 生徒による英語劇
 - d) 国際高校 SGH 課題研究活動の紹介「ベトナム・カンボジアでの高校生の活動」 英語・日本語
テロップ
 - e) 国際高校 SGH ベトナムスタディーツアー調査報告 英語・日本語
 - f) 質疑応答 (5 分) 日本語
- 2) 国際高校 SGH 活動報告「日本の移民史発掘プロジェクト」研究成果の報告(動画) 英語
- 3) 謝辞 (西宮浜中学校 生徒会長)

内容の詳細

兵庫県立国際高等学校で課題研究活動に取り組む 3 年次生プロジェクトチームのメンバー 7 人が西宮市立西宮浜中学校で 3 年生 80 人を対象に、本校の SGH 活動内容についてプレゼンテーションを行った。プレゼンテーションは質疑応答を除き、英語で行った。この時間は、西宮浜中学校の英語の授業の一環として実施された。

まず、本校の紹介を行った後に、英語劇を行った。ストーリーは、抽選会で世界旅行が当たった本校生が、中国、韓国、ブラジルの 3 か国を旅するというものである。各国をめぐるなかで、中学生にクイズを出題し、中学生に答えてもらった。中国では、主人公が水餃子を食べるシーンで、日本では焼き餃子を主流だが、中国

では水餃子が主に食べられているのかなぜかという質問をした。そして、日本と中国の食文化の共通点と相違点について話をした。次に、韓国では国際高校生が韓国のアイドルグループ TWICE(トゥワイス)に扮してダンスを披露した。そして、このグループには日本人がいるが誰が日本人かという質問をパワーポイントで行った。韓国は現在多くの移民を受け入れる国であり、このグループにも日本人の他、台湾人もいることを説明した。最後に、ブラジルの場面では、主人公がリオのカーニバルに参加するシーンがあり、本校生と中学生全員がサンバを踊った。最後の質問は、リオのカーニバルにアジア系のチームが参加しているが、なぜブラジルの伝統的行事であるカーニバルにアジア系民族が参加しているかを質問した。彼らはブラジルで生まれた日系ブラジル人であり、ブラジルでは日系ブラジル人が社会で認められているという説明をした。最後に、主人公が中国、韓国、ブラジルという3か国を旅した理由について説明した。これらの国は日本の在留外国人のうち人数が多い上位5か国であり、私たちは多くの外国人とともに暮らしていることを理解しなければいけないことを説明した。なお、この英語劇では本校生は中国や韓国の民族衣装を着てプレゼンテーションを行った。また、ブラジルのサンバのシーンではブラジル民族楽器を中学生に演奏してもらった。これらの衣装や楽器は本校にある子ども多文化センターのご協力により貸していただいたものである。この英語劇の脚本は、本校の3年次生プロジェクトチームが移民研究の成果を中学生にも理解できるように2月から作成してきたものである。クイズやダンスを取り入れ中学生が参加できる形態としたことで、中学生に興味を持って聞いてもらった。

休憩の後、本校のSGH課題研究活動の紹介、ベトナムで行った調査結果の報告、最後に現在取り組んでいる日本のブラジル移民について取り上げた「日本人の移民史発掘プロジェクト」について英語で説明をした。

すべてのプレゼンテーションを終え、質疑応答の間では、本校生が中学生の質問を丁寧に答えた。

中学生へのSGH課題研究活動のプレゼンテーションは今回が初めてであったが、中学生の皆さんが積極的に参加していただいたおかげで非常に有意義な経験となった。



西宮市立西宮浜中学校における
プレゼンテーションの様子2

西宮市立西宮浜中学校3年生による感想

国際高校の生徒のプレゼンテーションの中で、ブラジルの現地の学校の人で、経済的な面と言語のサポートがあれば日本で働きたいという人が大勢いたので、少し驚きました。また、日本での少子高齢化の問題と移民、日系ブラジル人と言われる人を結びつけて考える機会があり、非常に興味深かったです。私が一番楽しかったのは、英語と日本語の両方で分かりやすくしてくれた劇です。その中では、中国、韓国、ブラジルの国が紹介されて、その他に、ベトナムの話もしてくれました。

この高校では、授業の中で英語を使用したり、ホームステイの経験ができるらしく、非常に楽しそうだと感じました。

外国との文化の違いについて非常に勉強になりました。多文化共生についても考える大きなきっかけとなりました。さらに、外国への興味も高まりました。ダンスやクイズなど、一緒に参加できるものがあり、非常に楽しかったです。

特に印象に残っているのは、英語劇です。様々な国についての食文化や祭りなどを知ることができました。私も将来、様々な国に行き、多くのことを体験し、自分の中で新しい発見をしていきたいと思います。英語は好きな科目の1つであるので、これから知識を増やすため、勉強を頑張っていきたいと思います。

実施報告書

6 課題研究活動の取組

(28) 校外での普及活動「高校生による移民の歴史発見プロジェクト」における課題研究活動

目標

本校のSGH課題研究活動の成果を広く一般の人々にも普及させることを目的とする。

対象学年

1,2年次生15人

プレゼンテーション対象

芦屋市の市民を含む40人

実施日

2019年2月23日(土)

場所

芦屋市立上宮川文化センター
芦屋市上宮川町10-5

内容

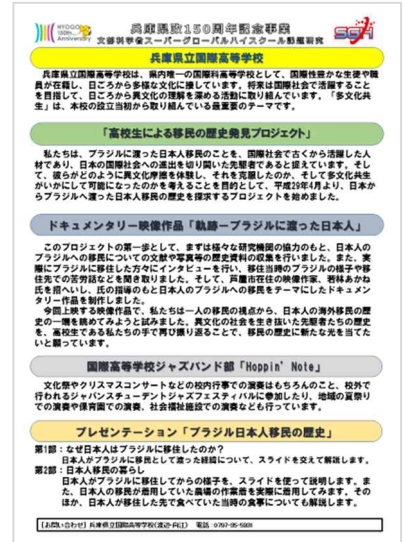
国際高校1,2年生15人によるSGH課題研究活動の報告

- 1) 兵庫県立国際高等学校ジャズバンド部による演奏会
- 2) ドキュメンタリー作品の上映
- 3) プレゼンテーション”ブラジル日本人移民の歴史”
 - a) 第1部:なぜ日本人はブラジルに移住したのか?
 - b) 第2部: (ア) 日本人移民の暮らし
(イ) 日本人移民の食生活
- 4) 自由見学・質疑応答

内容の詳細

兵庫県立国際高等学校で課題研究活動に取り組む1,2年次生プロジェクトチームのメンバー15人が芦屋市立上宮川文化センターで「高校生による移民の歴史発見プロジェクト～日本からブラジルに渡った日本人移民の歴史探求～」課題研究活動の成果について発表を行った。この発表会は、広く一般の人に本校の課題研究活動の成果を知ってもらうために芦屋市との共同で開催した。この日は、子どもから大人まで40人が発表会に参加した。

まず、本校ジャズバンド部の歓迎演奏が行われた。



発表会のパンフレット



生徒による発表の様子

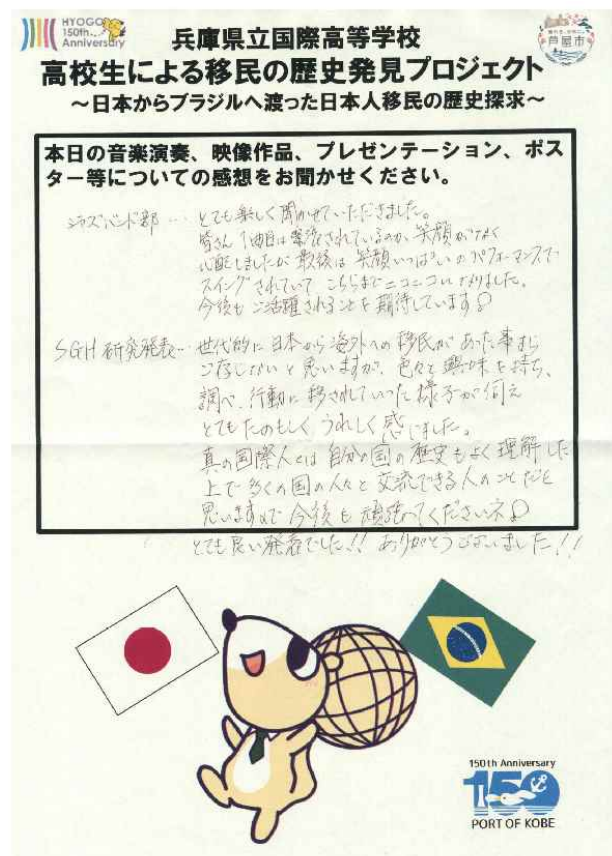
次に、ドキュメンタリー映像作品「軌跡 - ブラジルに渡った日本人」を上映した。この作品は、様々な研究機関の協力のもと、日本人のブラジルへの移民についての文献や写真等の歴史資料の収集を行い、実際にブラジルに移住した方々にインタビューを行い、移住当時の様子や移住先での苦労話などを聞き取り、これをまとめた映像作品である。この作品の制作にあたり、芦屋市在住の映像作家、若林あかね氏にご協力をいただいた。この日、来訪者は本校の作品を熱心に鑑賞していた。

次に、本校生がブラジル日本人移民の歴史についてプレゼンテーションを行った。第1部はなぜ日本人はブラジルに移住したのかというテーマで発表を行った。当日の日本とブラジルの経済的な要因、国際的な動向に焦点を当て、本校生が、日本人がブラジルに渡った経緯について説明した。次に、ブラジルに移住した日本人の暮らしを衣・食・住に焦点を当てて発表を行った。まずは、写真のスライドを使ってブラジルに移住した当時の暮らしについて本校生が説明した。また、当時、移民が農作業で使用していた着物を生徒が着て観衆に披露した。最後に、ブラジルに移住した日本人移民の食生活についてプレゼンテーションを行った。年代ごとの食生活の特徴を説明し、日本人がどのような食生活をしてきたか、また日本食が現在のブラジルにどのような影響を与えているかを説明した。

プレゼンテーションの終了後は、会場に張り付けたポスターを観覧していただき本校生が質疑応答を行った。

この課題研究活動は、昨年度から本校のプロジェクトチームが取り組んできたものであり、この日、一般の方に向けて成果の発表ができたことは非常に意義が有意義であった。参加していただいた皆様とともに、このプロジェクトに協力していただいた方々に感謝の意を伝えたい。

アンケート回答例



実施報告書

7 課題研究活動以外の取組

(1) 学校設定科目「言語技術における取組」

目標

言葉を有効に使いこなす技術を身につけ、3年次において論文を作成するための下記の3つの能力をつけることを目標とした。

- 1) 物事を論理的・分析的に検討し、適正な判断ができる能力
- 2) 問題解決する能力
- 3) 考察したことを口頭・記述で自在に表現できる能力

対象学年

2年次生19人 (グローバルリーダーコースGLC)



発表会における生徒の様子

授業形態

本校の学校設定教科(国際)の2年次生の学校設定科目として平成28年度よりスタートした。教諭2名が2単位の授業を2時間連続で行った。テーマに合わせて一斉授業、個別指導、グループワークなどの形態をとった。

内容

- 1) 言語力(漢字、語彙、敬語など日本語で正しく表現できる力)を身につける
- 2) 考える力、書く力(テーマに基づき、論理的に考え、日本語で文章表現する力)を身につける
- 3) 聞く力、話す力(テーマに基づき、適切に質問したり、質問に答えたりする力。相手の主張を正しく理解し、正しく自分の主張をする力。異なる意見の中から、更に良いものを導き出す力)を身につける。
- 4) 論文作成に向けての先行研究に関するリサーチ活動および調査項目(リサーチクエスション)の構築

指導の経緯

2017年度において、この言語技術の授業で作成した論文を本校生が移民政策学会2017年度年次大会で発表を行った際、学会側から「研究の方法や調査の方法、調査結果に基づく論理展開など、研究の中身というより研究方法に関する事前学習が必要と思われる」というコメントをいただいた。これを受けて、昨年度より言語技術の授業で論文を書く前に先行研究のリサーチ活動に取り組んだ。今年度は、さらに調査項目(リサーチクエスション)の構築を授業内で行った。

内容の詳細

1学期は、表記、文体の統一、文の係り受け、要約の仕方など正しい文章を書くための基礎基本の徹底に重点を置いた。2学期は、文章の構成力、読解力の養成を中心に行った。3学期は論文作成に向けて、各自テーマの設定、テーマにそった先行研究のリサーチ活動を行った。リサーチ活動はサイニアーティクルを活用した論文の検索、および検索した論文の要約を行うことで先行研究の学習をした。あわせて調査項目(リサーチクエスション)の構築にも取り組んだ。

課題研究のテーマ設定に関しては、プレゼン資料を作成して授業内で発表会を行い、評価表を用いて生徒および教員による相互評価を行った。具体的には、テーマ設定、先行研究、調査項目(リサーチクエスション)の3つ項目に関して評価を行った。

成果および成果の発表

今年度は先行研究の学習および調査項目(リサーチクエスション)の構築に取り組むことで、論文作成にむけて昨年度より一歩進んだ準備をすることができた。なお、これまで取り組んできた3,000字の論文作成については生徒の自主作成としたが、論文を書いた生徒のうち3人が移民政策学会2018年度冬季大会で採用され、学会発表を行った。

実施報告書

7 課題研究活動以外の取組

(2) 科目「社会と情報」における取組

目標

ネットワークや情報機器を使って情報活用能力を身につけることを目標とする。情報機器や情報通信ネットワークを利用してコミュニケーションをはかるための基礎的なスキルを学ぶ。また、SGH課題研究活動と連携して、移民研究を進める契機とする。

対象学年

1年次生全員120人

授業形態

本校の1年次生の必修科目として設定している。

教員3名、2単位、2時間連続で行う。

内容

- 1) 情報機器の使い方を学ぶ
- 2) 情報の伝え方を学ぶ
- 3) 情報社会の課題を考える
- 4) 情報社会のしくみを知る

内容の詳細

1学期に1年次生全員が「各国の広報大使」をテーマに、自分が選んだ国について、その国の移民情勢や移民問題を調べ、あわせて問題の解決策を考えパワーポイントのスライドシート3枚にまとめた。その上で全員が調べた国についてパワーポイントを使い、一人2分間のプレゼンテーションを行った。

成果および成果の発信

生徒のパワーポイントスライドシートを成果集としてまとめた。また、調べた移民情勢や移民問題に関する知識はディベートや「移民マップ」課題研究活動の参考とした。

本校生が各国の移民問題について調査し、作成したスライドシートの例

	<p>～インドからの出稼ぎ移民問題～</p> <p>インドのケララ州では、世界最多550万人の出稼ぎ労働者を送り出している。</p> <p>⇒帰国した出稼ぎ労働者の86%が「出稼ぎ先の労働経験が役立っていない。」と答えた。</p> <p>？海外での労働経験を活かすためにできることは？</p> <p><small>出典：「インドからの出稼ぎ労働者」調査報告書 2014年11月</small></p>	<p>～私が思う解決策～</p> <p>帰国後の出稼ぎ労働者を</p> <p>支援するプログラムを設置する</p> <p><small>留学プログラムのように、帰国後の雇用先のサポートや一時的な金銭的援助をすることで、出稼ぎ労働者の負担も減り、インドの経済発展につながる可能性があると考えた。</small></p>
<p>インドについて</p> <ol style="list-style-type: none">1.インドの移民問題2.解決策3.インドのアピールポイント <p>1年2組9番 上田 桃子</p>	<p>1.インドの移民問題</p> <p>インドでは、教育レベルの高い優秀な人材が他国に移住してしまう「頭脳流出」が問題となっている。</p> <p>出典 https://www.dir.co.jp/report/research/economics/japan/20141120_009161.pdf</p>	<p>2.解決策</p> <p>【原因】 インドと先進国間の所得の差</p> <p>【解決策】 教育レベルを点数化し、その点数によって賞金の値段をかえる。 ⇒教育レベルの高い優秀な人材が他国に流れるのを防ぐ。</p>

実施報告書

8 課題研究活動の評価

(1) 評価方法

目標

育てたい生徒の能力や資質について観点別に目標を設定し、課題研究活動の過程で評価を行うことで、課題研究活動における課題を検証することにより課題研究活動を改善し、生徒の能力や資質の向上につなげることを目標とする。

本校のルーブリック

平成 27 年度に「兵庫県立国際高等学校 スーパーグローバルハイスクール ルーブリック」を作成した。また、このルーブリックを基に様々な課題研究活動に関するルーブリックを作成し、改定も加えながら生徒の実態把握と能力の向上に結びつけるために、すべての SGH 課題研究活動に関する評価の中心として活用した。

方法

「兵庫県立国際高等学校 スーパーグローバルハイスクール ルーブリック」は、次の 3 つの観点について評価を行うものである。すなわち、(a)創造的思考力、(b)批判的思考力・論理的思考力、(c)異文化理解、の 3 つの観点について 4 段階で評価するものである。

本年度は SGH 課題研究 4 期に入り、本校 3 年次生全員を対象にこのルーブリックによる最終評価を行い、3 年間の課題研究活動の成果を検証するとともに、昨年度の 3 年次生と比較検証を行った。

また、このルーブリックを基に、ディベート課題研究活動のルーブリック、「移民マップ」課題研究活動のルーブリック、学校設定科目「提案日本の選択」論文課題研究活動のルーブリックを作成し、それぞれの課題研究活動でこれらのルーブリックを使って評価を行った。なお、これらの課題研究活動では、取り組みを始める最初の段階でルーブリックを生徒に示し、身につけてほしい能力や資質について説明をした。

あわせて、このルーブリックを基に作成した「異文化理解に関するルーブリック」を用いて 1,2 年次生全員を対象に定期的に評価を行い、課題研究活動の成果を検証した。最後に「発表用ルーブリック」を用いて、SGH 中間発表会でプレゼンテーションを行った生徒に対する評価を行った。また、中間発表会では外部支援員による課題研究活動の成果に対する評価を行った。

兵庫県立国際高等学校 スーパーグローバルハイスクール ルーブリック

	創造的思考力	批判的思考力 論理的思考力	異文化理解
S	複数の資料を検討したうえで、自分なりに課題を設定する。その課題の論点（論争になる点、容易に解決できない点）を把握したうえで、取り組んでいる。統計や文献などの根拠に基づいて、独自の視点から考案した解決策を考えることができる。	国際的な問題を自分なりに分析・解釈し、信頼できる情報を選択できる。根拠に基づいて、問題について理解を深め、レポートやプレゼンテーションなどの場面や、ディスカッションの場面においても自分の考えを論理的に説明できる。	自身の文化圏の価値観を相対化し、異なる文化圏の人にもわかりやすく、その特徴を説明できる。異なる文化圏の価値観に対しても、関心を持って、知識を収集する。地球規模の問題について、相互の理解と納得を踏まえたうえで考えることができる。
A	指導を受けながら、自分なりに課題を決めることができる。その課題の論点について、ある程度理解できる。統計や文献などの根拠に基づいて、既存の考えから妥当な解決策を選択できる。	国際的な問題を分析・解釈し、与えられた資料だけでなく、1点か2点の自分で選んだ資料を加えて、取り組むことができる。根拠に基づいて問題について理解を深め、レポートやプレゼンテーションなどの場面で自分の意見を明確に述べるすることができる。ディスカッションにおいても、妥当な意見を述べるができる。	自身の文化圏の価値観を自分なりの言葉で説明できる。異なる文化圏の価値観について尊重できる。地球規模の問題を自身の問題として捉え、背景をある程度理解したうえで、双方の立場を尊重した思考ができる。
B	与えられた課題について、論点を自分なりに理解できる。根拠に基づいて解決策を自分なりに選択できる。	情報を事実と意見の違いを区別できる。与えられた資料を指導に従って活用できる。自分の意見のある程度説明できる。	自身の文化圏の価値観を中心としながらも、わかりやすく説明できる。異なる文化圏の価値観について尊重すべきと考えることができる。地球規模の問題と自身の関連性を理解し、相手の立場を考慮できる。
C	与えられた課題について、その要素を自分なりに捉えることができる。指導の下、解決策を模索することができる。	情報を事実と意見の違いに気が付くことができる。与えられた資料を指導に従って活用できる。自分なりに考えを組み立てることができる。	指導の下、自身の文化圏について考えることができる。異なる文化圏の価値観について表面的に理解できる。興味・関心の範囲内であれば、自身と社会を結びつけることができる。

(2) 課題研究活動の評価

1) 3年間のSGH課題研究活動に関する最終評価

評価対象

3年次生 120人(全員)

調査日

2019年1月25日(金)

3年間のSGH課題研究活動の評価

3年次生全員を対象に3年間の課題研究活動を評価した。評価には【資料1】「SGH自己評価票(兵庫県立国際高等学校SGHルーブリック)」を使用し、(a)創造的思考力、(b)批判的・論理的思考力、(c)異文化理解、という3つの観点について4段階で自己評価を行った。あわせて、3つの観点のうち、最も伸びた力を回答させた。最後に、3年間で何が変わったかを自由記述させた。なお、中間発表会において外部支援員にも同じ評価票を用いて評価を実施した。

分析

まず、学校設定科目「提案日本の選択」選択者における今年度の3年次生(14回生)と昨年度の3年次生(13回生)の比較分析を行う。資料2で示したとおり、学校設定科目「提案日本の選択」選択者で、(a)創造的思考力に関してはスコア4をつけた生徒が38.1%であった。昨年度の3年次生の学校設定科目「提案日本の選択」選択者で、(a)創造的思考力に関してはスコア4をつけた生徒が20.8%であり、今年度の3年次生(14回生)の方が17.3%高かった。次に、(b)批判的・論理的思考力に関して、「提案日本の選択」選択者でスコア4をつけた生徒は23.8%であった。一方、昨年度の3年次生(13回生)の学校設定科目「提案日本の選択」選択者で、(b)批判的・論理的思考力に関してはスコア4をつけた生徒が29.2%であり、今年度の3年次生(14回生)の方が5.4%低かった。最後に、(c)異文化理解に関してスコア4をつけた「提案日本の選択」選択者は23.8%であった。これに対して、昨年度の3年次生の学校設定科目「提案日本の選択」選択者で、(c)異文化理解に関してスコア4をつけた生徒は37.5%であり、今年度の3年次生(14回生)の方が13.7%低かった。ちなみに、3つの観点のうち最も伸びたと思う力は何かという質問に対して、「提案日本の選択」選択者の今年度の3年次生は、(b)批判的・論理的思考力と回答した生徒が42.9%と最も多く、昨年度の3年次生も(b)批判的・論理的思考力と回答した生徒が最も多く41.7%で、今年度の3年次生の方が1.2%高かった。

この結果から、学校設定科目「提案日本の選択」選択者における今年度の3年次生は、昨年度より(a)創造的思考力が向上したといえる。これは昨年度より早く論文作成に取り組んだことで、独自の視点で解決策を考える力がついたことがその要因である。一方で、(b)批判的・論理的思考力と(c)異文化理解は今年度の3年次生は昨年度よりもスコアは低下した。しかし、最も伸びたと思う力(b)批判的・論理的思考力と答えている生徒が昨年度の3年次生よりも多いことから、この「提案日本の選択」課題研究活動では批判的・論理的思考力の育成に効果があることが改めて示されたといえる。

次に外部支援員と「提案日本の選択」選択者との比較分析を行う。(a)創造的思考力に関してはスコア4をつけた生徒が38.1%であり、一方、スコア4をつけた外部支援員は37.5%で生徒の方が0.6%高かった。

次に、(b)批判的・論理的思考力に関して、「提案日本の選択」選択者でスコア 4 をつけた生徒は 23.8%であり、一方、スコア 4 をつけた外部支援員は 42.9%で外部支援員の方が 19.1%高かった。

この結果から、外部支援員からも「提案日本の選択」課題研究活動は(b)批判的・論理的思考力の育成に効果があるということが証明された。

最後に、学校設定科目「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒における今年度の 3 年次生(14 回生)と昨年度の 3 年次生(13 回生)の比較分析を行う。学校設定科目「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒で、(a)創造的思考力に関してはスコア 4 または 3 をつけた生徒が 50.5%であった。昨年度の 3 年次生の学校設定科目「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒で、(a)創造的思考力に関してはスコア 4 または 3 をつけた生徒が 35.1%であり、今年度の 3 年次生(14 回生)の方が 15.4%高かった。次に、(b)批判的・論理的思考力に関して、「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒でスコア 4 または 3 をつけた生徒は 44.3%であった。一方、昨年度の 3 年次生(13 回生)の学校設定科目「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒で、(b)批判的・論理的思考力に関してはスコア 4 または 3 をつけた生徒が 36.2%であり、今年度の 3 年次生(14 回生)の方が 8.1%高かった。最後に、(c)異文化理解に関してスコア 4 または 3 をつけた「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒は 76.3%であった。これに対して、昨年度の 3 年次生の学校設定科目「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒で、(c)異文化理解に関してスコア 4 または 3 をつけた生徒は 65.6%であり、今年度の 3 年次生(14 回生)の方が 10.7%高かった。

この結果から、「提案日本の選択」選択生徒以外の生徒が昨年度よりも(a)創造的思考力、(b)批判的・論理的思考力、(c)異文化理解のすべての力が向上したことがわかる。これは本校全体の課題研究活動の成果が昨年度より向上したことを表している。

資料 3 に示したとおり、「3 年間の SGH 課題研究を振り返り、何が最もかわったか」という質問に対して、「提案日本の選択」選択生徒で、「物事を多角的に考えることができるようになった」、「様々なことを知ることができた」等、物事を多角的に見て考える力がついたと回答した生徒が 18 人中 5 人いた。特に、「社会に対する関心が非常におおくなりました。自分の研究課題がテレビやニュースや新聞の記事になっていることに気づきました。」という回答に象徴されるように、課題研究活動を通して自分が気づいていない領域に視野や思考を広げることができたことがわかる。つまり、「提案日本の選択」課題研究活動は、生徒のメタ認知を高める効果があったといえる。

【資料1】「SGH 自己評価票 (兵庫県立国際高等学校 SGH ルーブリック)」

SGH 自己評価票

年 組 番(名前)

あなたが3年間のSGH課題研究活動を通して、どのような力がついたと思いますか。該当する番号に をつけなさい。

1 創造的思考力

4	複数の資料を検討したうえで、自分なりに課題を設定する。その課題の論点(論争になる点、容易に解決できない点)を把握したうえで、取り組んでいる。統計や文献などの根拠に基づいて、独自の視点から考案した解決策を考えることができる。
3	指導を受けながら、自分なりに課題を決めることができる。その課題の論点について、ある程度理解できる。統計や文献などの根拠に基づいて、既存の考えから妥当な解決策を選択できる。
2	与えられた課題について、論点を自分なりに理解できる。根拠に基づいて解決策を自分なりに選択できる。
1	与えられた課題について、その要素を自分なりに捉えることができる。指導の下、解決策を模索することができる。

2 批判的思考力・論理的思考力

4	国際的な問題を自分なりに分析・解釈し、信頼できる情報を選択できる。根拠に基づいて、問題について理解を深め、レポートやプレゼンテーションなどの場面や、ディスカッションの場面においても自分の考えを論理的に説明できる。
3	国際的な問題を分析・解釈し、与えられた資料だけでなく、1点か2点の自分で選んだ資料を加えて、取り組むことができる。根拠に基づいて問題について理解を深め、レポートやプレゼンテーションなどの場面で自分の意見を明確に述べるができる。ディスカッションにおいても、妥当な意見を述べるができる。
2	情報を事実と意見の違いを区別できる。与えられた資料を指導に従って活用できる。自分の意見をある程度説明できる。
1	情報を事実と意見の違いに気が付くことができる。与えられた資料を指導に従って活用できる。自分なりに考えを組み立てることができる。

3 異文化理解

4	自身の文化圏の価値観を相対化し、異なる文化圏の人にもわかりやすく、その特徴を説明できる。異なる文化圏の価値観に対しても、関心を持って、知識を収集する。地球規模の問題について、相互の理解と納得を踏まえたうえで考えることができる。
3	自身の文化圏の価値観を自分なりの言葉で説明できる。異なる文化圏の価値観について尊重できる。地球規模の問題を自身の問題として捉え、背景をある程度理解したうえで、双方の立場を尊重した思考ができる。
2	自身の文化圏の価値観を中心としながらも、わかりやすく説明できる。異なる文化圏の価値観について尊重すべきと考えることができている。地球規模の問題と自身の関連性を理解し、相手の立場を考慮できる。
1	指導の下、自身の文化圏について考えることができる。異なる文化圏の価値観について表面的に理解できる。興味・関心の範囲内であれば、自身と社会を結びつけることができる。

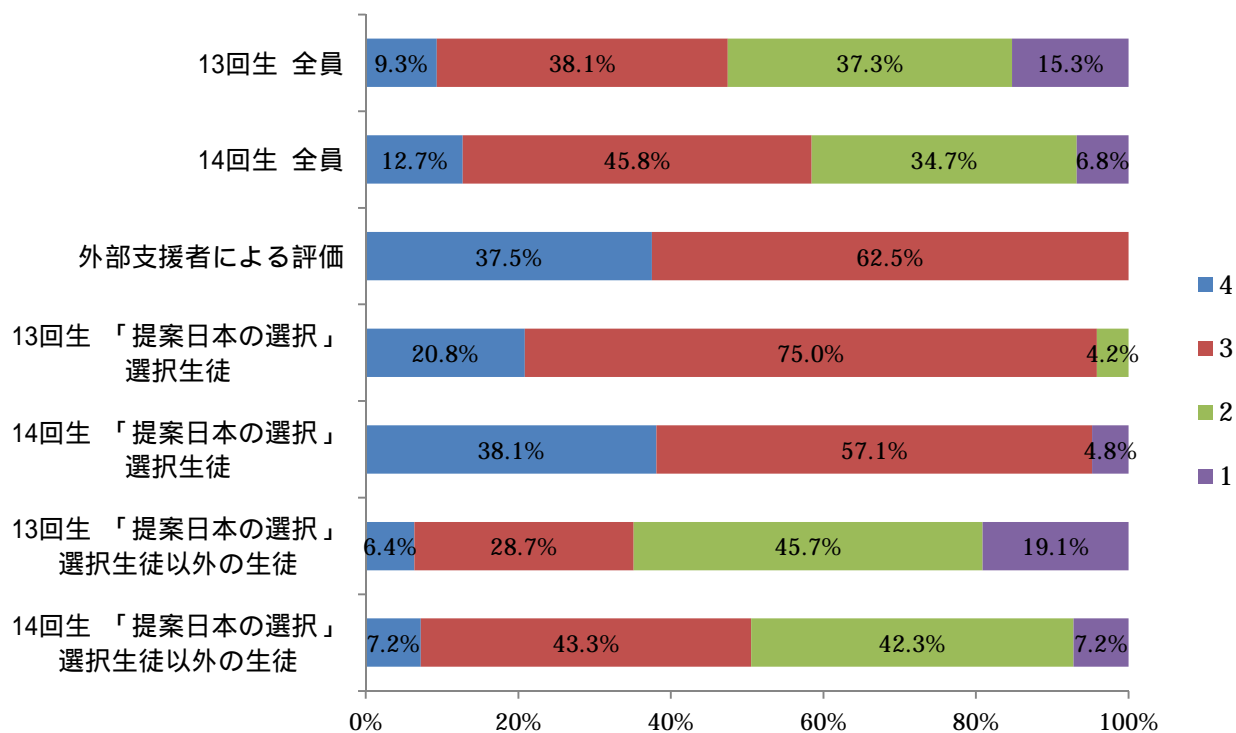
4 あなたがこの3年間のSGH課題研究活動で最も伸びたと思う力は何ですか。該当するものに をつけなさい。

創造的思考力 批判的思考力・論理的思考力 異文化理解

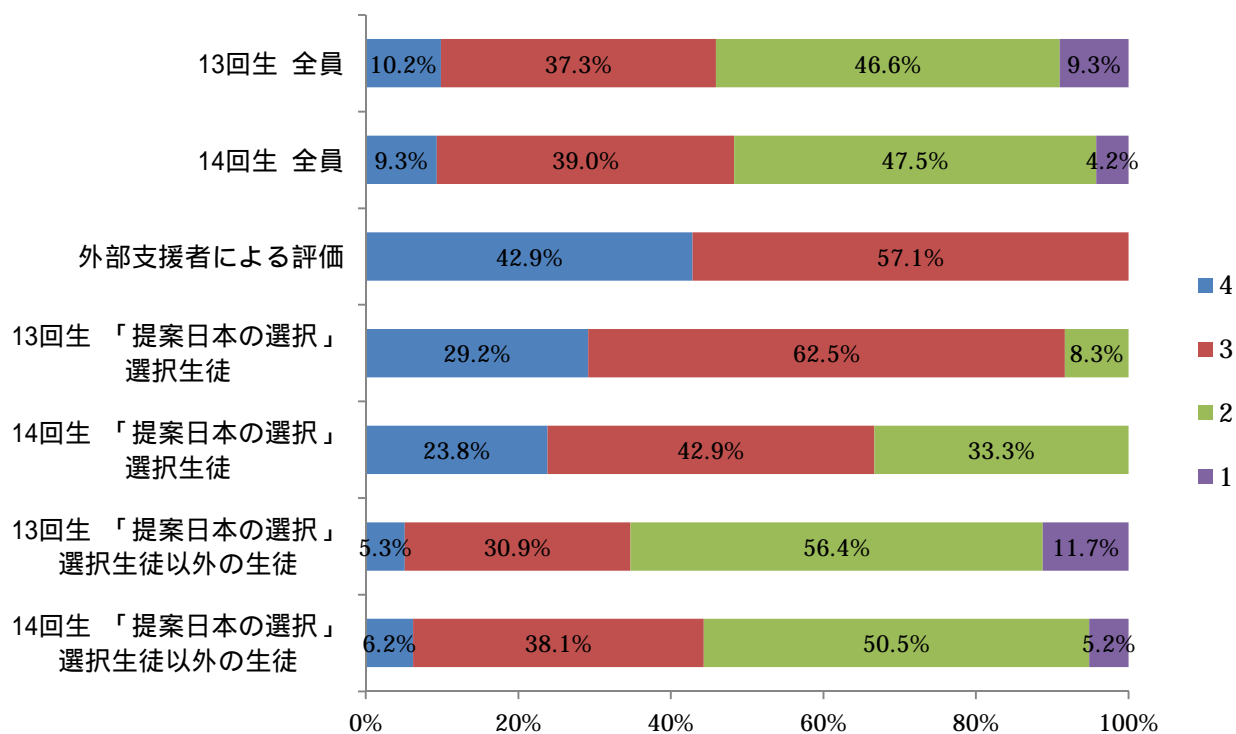
5 あなたがこの3年間のSGH課題研究活動を振り返り、自分の中で3年前より何が最も変わったと思いますか。

【資料2】3年間のSGH課題研究活動の評価結果(2019.1.25.実施分)

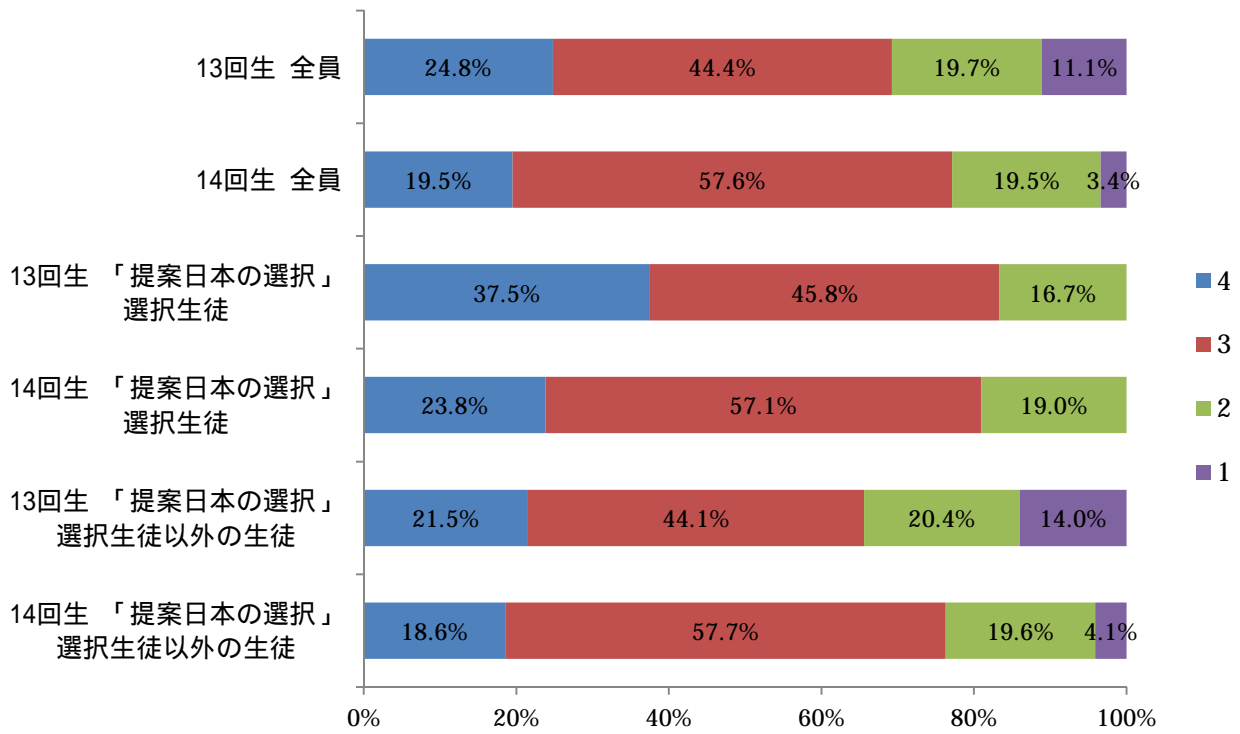
創造的思考力



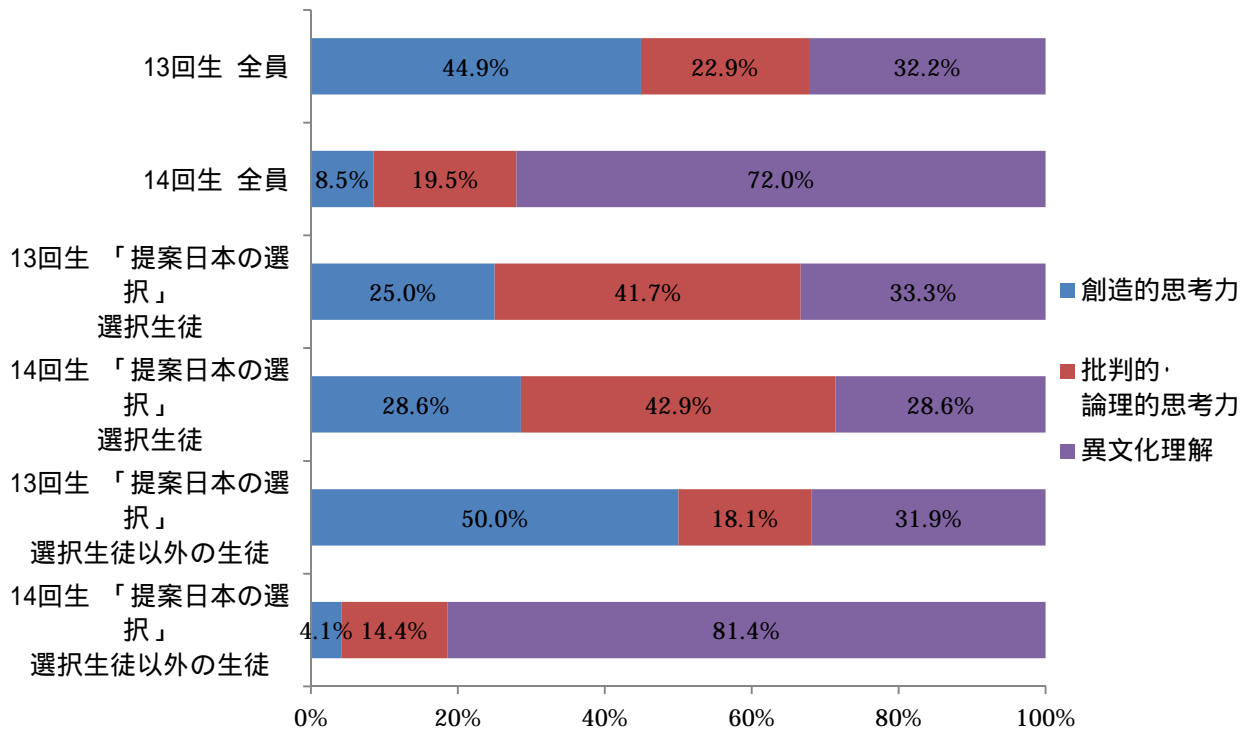
批判的・論理的思考力



異文化理解



最も伸びたと思う力



5 この3年間のSGH課題研究を振り返り、3年前より何が最も変わったと思うか。

生徒A：社会に対する関心が非常に大きくなりました。自分の研究課題となったものが、調べなくても日々、テレビのニュースや新聞の記事となっていることに気づきました。

生徒B：移民問題に関する知識や興味が増えた。

生徒C：移民に関する知識が増えた。また、プレゼンテーションなど、人前で発表する力が身に付いたと思う。

生徒D：移民に関する知識が増えた。

生徒E：国際問題への関心や興味が高くなった。

生徒F：論理的思考と異文化理解です。

生徒G：論文の執筆に挑戦できたことと、ディスカッションにも積極的に参加できたこと。

生徒H：創造的思考力が身に付いた。

生徒I：様々な国際問題について考えるようになった。

生徒J：論理的思考力が身に付いた。

生徒K：移民に対する意識が変わった。

生徒L：積極性が身に付いた。

生徒M：多面的な視野から物事を理解する力がついた。

生徒N：移民について様々なことを知ることができた。

生徒O：論文を書く中で、様々なことを様々な視点で見ることができるようになった。

生徒P：資料をまとめられるようになった。

生徒Q：多面的に物事を考えることができるようになった。

生徒R：自分の住んでいる市の現状を知った。

実施報告書

8 課題研究活動の評価

(2) 課題研究活動の評価

2) 1,2年次生における「C.C.C.1年間のまとめ」の自己評価と全年次生の比較

評価対象

1年次生 118人

2年次生 120人

調査日

1年次生 2018年4月3日(火)、2019年1月25日(金)

2年次生 2018年2月8日(木)、2019年1月30日(木)

評価

1年間を通してC.C.C.の中で課題研究活動に取り組んできた1、2年次生全員に自己評価を行った。1年次生には[資料4]16回生「C.C.C.1年間を終えて」アンケート2018年度版を、2年次生には[資料5]「C.C.C.1年間を終えて」アンケート2018年度版(15回生用)を使用した。それぞれ、(a)異文化理解(b)英語の発信力という2つの観点について4段階で評価を行った。ちなみに、1年次生に使用したアンケートの問1と問2は、2年次生のアンケートの問1を2つに分けたものであり、(a)異文化理解の観点に関する評価を行うものである。

分析

1年次生(16回生)に関して、資料6で示したとおり、「日本文化の特徴を異なる文化圏の人に説明できる」および「日本と異なる国について、その特徴を複数の観点から説明できる」という異文化理解に関して、スコア4または3をつけた生徒は入学前(4月)では56.3%および41.7%に対して、1月では73.3%および61.2%となり、それぞれ14.6%および12.1%高くなった。このことから、ディベート課題研究活動および「移民マップ」課題研究活動を通して、異文化理解が確実に向上していることが分かった。また、「英語で日本の文化の特徴を異なる文化圏の人に説明できる」という英語による発信力に関して、スコア4またはスコア3をつけた生徒は入学前(4月)では31.9%に対して、1月では31%となり、ほぼ同じであった。このことから、1年次生は今後、英語による発信力を育成しなければならない。

2年次生(15回生)に関して、資料7で示した通り、異文化理解の観点でスコア4または3をつけた生徒は昨年度(2017年度)の54.2%に対して、今年度は52.6%となり1.6%低くなった。このことから、2年次生においては異文化理解の向上が課題である。また、英語による発信力に関して、スコア4または3をつけた生徒は昨年度(2017年度)の26.9%に対して、今年度は26.8%でありスコアは変わらなかった。このことから、2年次生も英語による発信力の育成も課題である。

資料8は3年次生の異文化理解の3年間のスコアの変化を表している。スコア4または3をつけた生徒は2016年度(1年次)で45.6%、2017年度(2年次)は57.5%、2018年度(3年次)は77.1%であった。3年間で着実に異文化理解の力の向上がみられた。

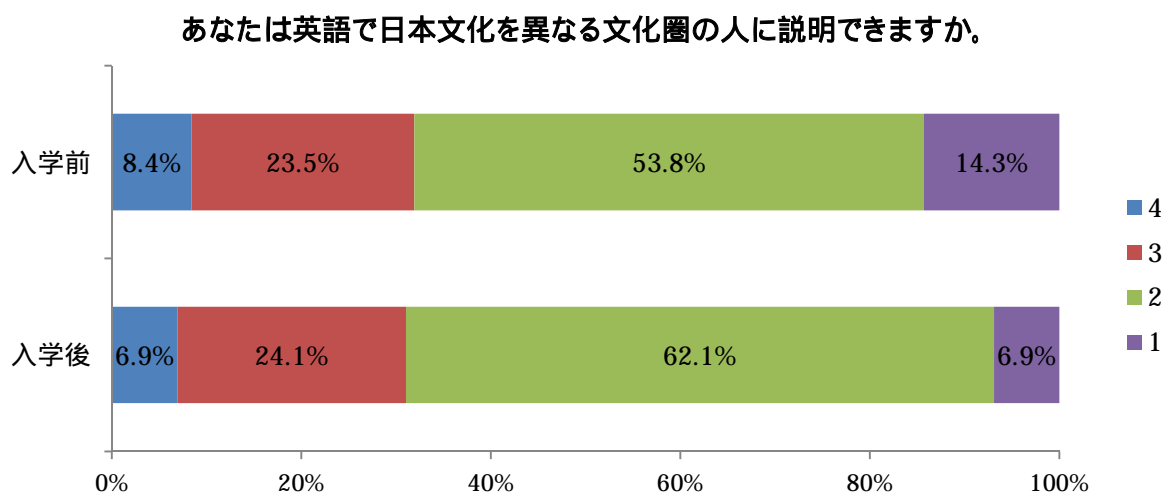
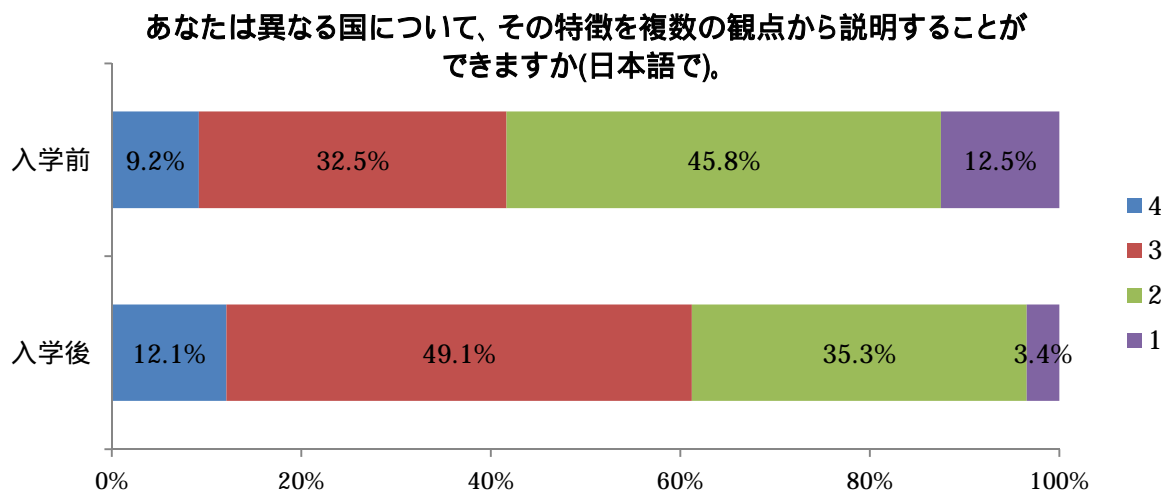
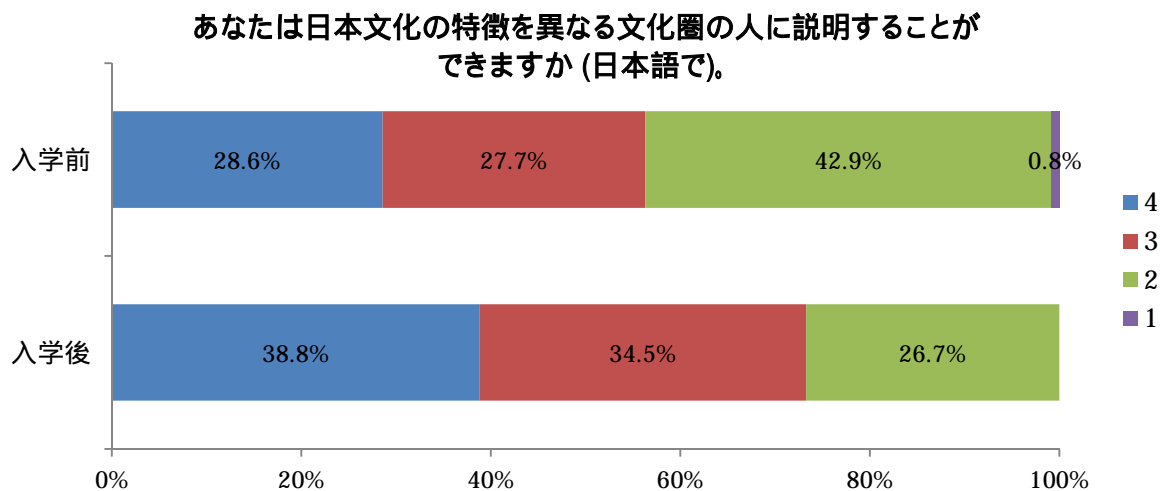
資料9は、全年次の異文化理解の比較を表している。異文化理解の観点でスコア4または3をつけた生徒は、16回生(1年次)で67.2%、15回生(2年次)で52.6%、14回生(3年次)で77.1%であった。特に15回生(2年次)の異文化理解の力の向上が課題である。

【資料 4】16 回生「C.C.C.1 年間を終えて」アンケート 2018 年版

16 回生「C.C.C.1 年間を終えて」アンケート	
1 年 組 番(名前) _____	
問 1 あなたは日本文化の特徴を異なる文化圏の人に説明することができますか(日本語で)。該当する番号に をつけてください。	
4	日本の文化を異なる文化圏の人に、わかりやすく客観的にその特徴を 2 つ以上説明することができる。
3	日本の文化を異なる文化圏の人にわかりやすく客観的にその特徴を 1 つあげて説明することができる。
2	日本の文化を自分なりに異なる文化圏の人に説明することができる。
1	日本の文化の特徴を異なる文化圏の人に説明をすることは苦手である。
問 2 あなたは異なる国について、その特徴を複数の観点から説明することができますか(日本語で)。該当する番号に をつけてください。	
4	異なる国について、歴史、経済、政治、宗教、文化など、3 つ以上の観点から総合的にとらえたうえで、その特徴を説明することができる。
3	異なる国について、歴史、経済、政治、宗教、文化など、2 つ以上の観点から総合的にとらえたうえで、その特徴を説明することができる。
2	異なる国について、歴史、経済、政治、宗教、文化などからその特徴を 1 つは説明することができる。
1	異なる国について、歴史、経済、政治、宗教、文化など複数の観点での考察が不十分である。
問 3 あなたは英語で日本の文化の特徴を異なる文化圏の人に説明できますか。該当する番号に をつけてください。	
4	日本文化の特徴を、英語で自信をもって説明することができる。
3	日本文化の特徴を、英語で説明することができる。
2	日本文化の特徴を、自信はないが英語を使って説明することは可能である。
1	日本文化の特徴を、英語で説明するのは苦手である。
2018.4.3.および 2019.1.25.実施	

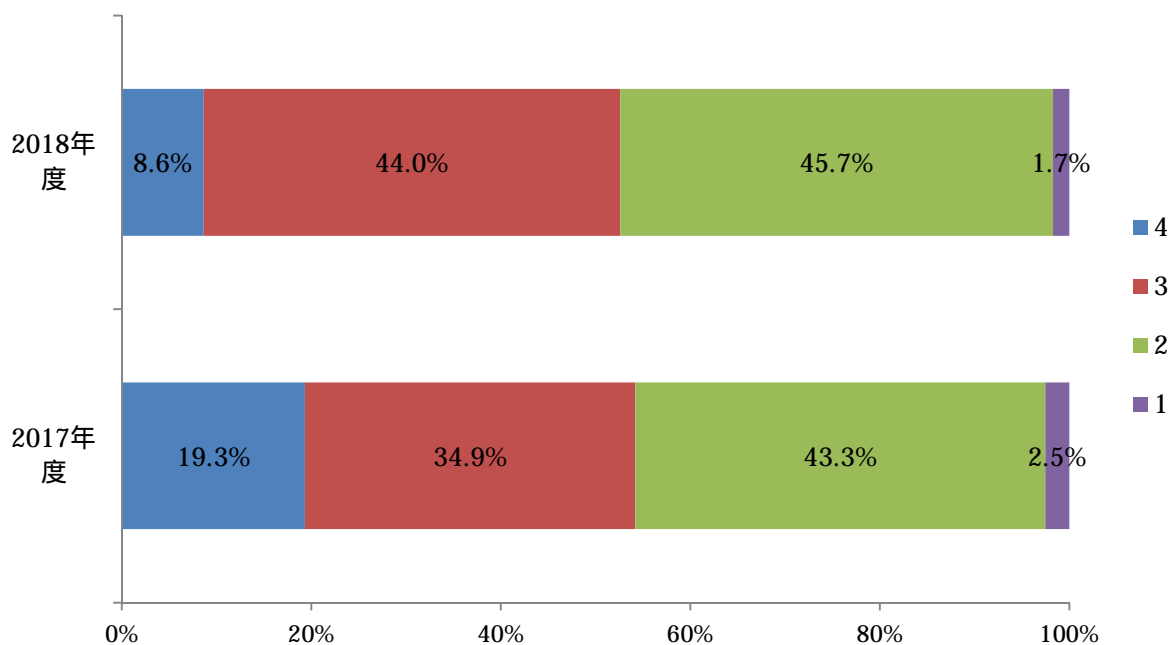
【資料 5】「C.C.C.1 年間を終えて」アンケート 2018 年度版(15 回生用)

C.C.C.1 年間を終えて」アンケート 2018 年度版(15 回生用)	
_____ 年 組 番(名前) _____	
問 1 あなたは日本語で日本文化の特徴を異なる文化圏の人に説明することができますか。また、異なる国について、その特徴を複数の観点から説明することができますか。	
4	日本の文化を異なる文化圏の人に、わかりやすく客観的にその特徴を歴史、経済、政治、宗教、文化など、2 つ以上の観点から説明することができる。異なる国について、歴史、経済、政治、宗教、文化など、3 つ以上の観点から総合的にとらえたうえで、その特徴を説明することができる。
3	日本の文化を異なる文化圏の人にわかりやすく客観的にその特徴を歴史、経済、政治、宗教、文化など、1 つあげて説明することができる。異なる国について、歴史、経済、政治、宗教、文化など、2 つ以上の観点から総合的にとらえたうえで、その特徴を説明することができる。
2	日本の文化を異なる文化圏の人に自信はないが少し説明することができる。異なる国について、歴史、経済、政治、宗教、文化などからその特徴を 1 つ説明することができる。
1	日本の文化の特徴を異なる文化圏の人に説明をすることができない。異なる国について、歴史、経済、政治、宗教、文化など複数の観点での考察が不十分である。
問 2 あなたは英語で日本文化の特徴を異なる文化圏の人に説明できますか。	
4	日本文化の特徴を、英語で自信をもって説明することができる。
3	日本文化の特徴を、英語で説明することがおおむねできる。
2	日本文化の特徴を、自信はないが英語を使って少し説明することは可能である。
1	日本文化の特徴を、英語で説明することができない。
2019.1.30.実施	

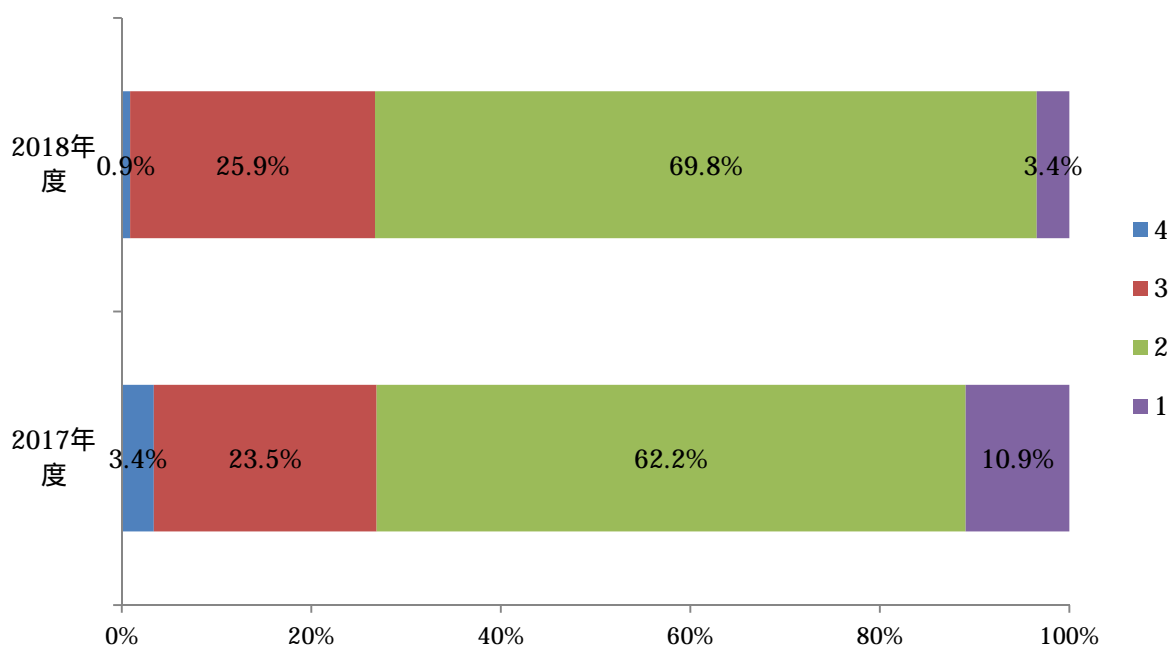


【資料7】「C.C.C.1年間を終えて」アンケート2018年度版（15回生用）集計結果
 (2018.2.8.および2019.1.30実施分)

異文化理解

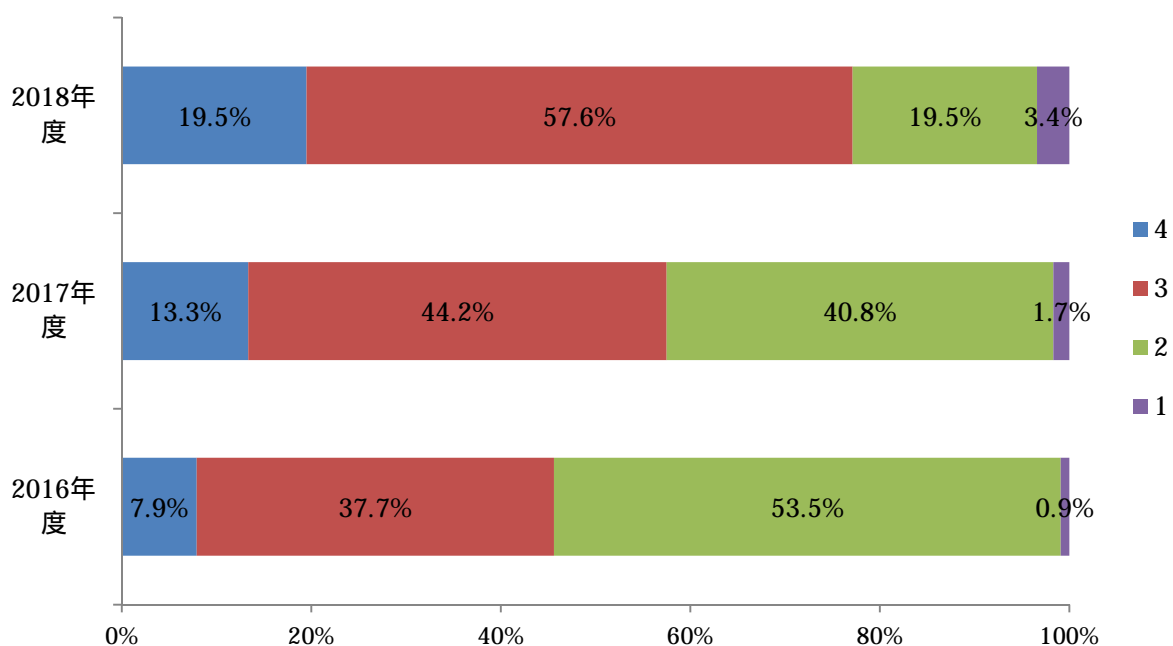


英語による発信力



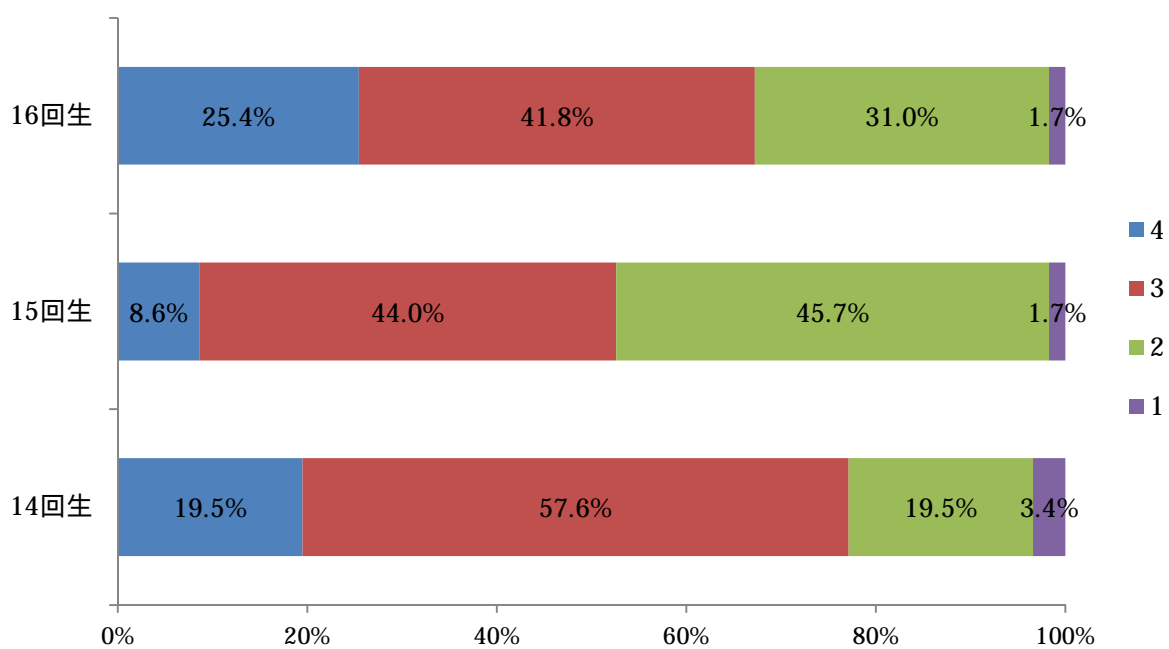
【資料8】3年次生 (14回生)「SGH自己評価票」集計結果 (2017.2.23./2018.1.24./2019.1.25.実施分)

異文化理解



【資料9】異文化理解 2018年度全年次生 (14,15,16回生) の比較

異文化理解



実施報告書

8 研究課題活動の評価

(2) 課題研究活動の評価

3) 学校設定科目「提案日本の選択」における論文の評価

評価対象

3 年次生 22 人(GLC)

調査日

2018 年 11 月 16 日(金)

評価

学校設定科目「提案日本の選択」選択生徒 22 人が作成した論文をクラス内で発表し、発表者以外の生徒および担当教員(4 人)による他者評価を行った。評価には【資料 10】論文発表会評価票(兵庫県立国際高等学校「提案日本の選択」ルーブリック 2018 年版)を使用した。(a)先行研究の検証、(b)批判的および論理的思考力、(c)テーマおよび調査目的の設定、(d)分析、(e)創造的思考力、という 5 つの観点について 4 段階で評価を行った。

分析

【資料 11】で示した通り、教員および生徒とも評価が高かったのは(c)テーマおよび調査目的の設定で、スコア 4 または 3 をつけた教員 91.6%と生徒 87.1%であった。次に評価が高かったのは(e)創造的思考力で、スコア 4 または 3 をつけた教員 84.5%と生徒 80.6%であった。一方、評価が最も低かったのは(a)先行研究の検証で、スコア 4 または 3 をつけた教員 37.5%と生徒 48.4%であった。この結果から、生徒の課題研究に関するテーマ設定は適当であったといえる。また、論文作成の課題研究活動は創造的思考力の育成に効果があることが分かった。一方、先行研究の検証で評価が低くなったのは、国外の論文を引用した生徒が少なかったことに原因があるといえる。ただし、昨年度の 3 年次生(13 回生)は (a)先行研究の検証で、スコア 4 または 3 をつけた教員 6.3%と生徒 6.1%に対して、今年度の 3 年次生(14 回生)では教員は 31.2%、生徒は 42.3%高くなった。これは昨年度の 3 年次生よりも国外の論文を引用する生徒が大きく増えたことによる。具体的には、国外の論文を引用した生徒数は昨年度の 3 年次生(13 回生)が 2 人(ドイツ語、イタリア語の論文)、引用率が 8%(24 人中の 2 人)に対して、今年度の 3 年次生(14 回生)が 6 人(英語 3 人、フランス語、ドイツ語、ロシア語の論文)、引用率が 29%(21 人中の 6 人)であった。これはルーブリックの効果といえる。

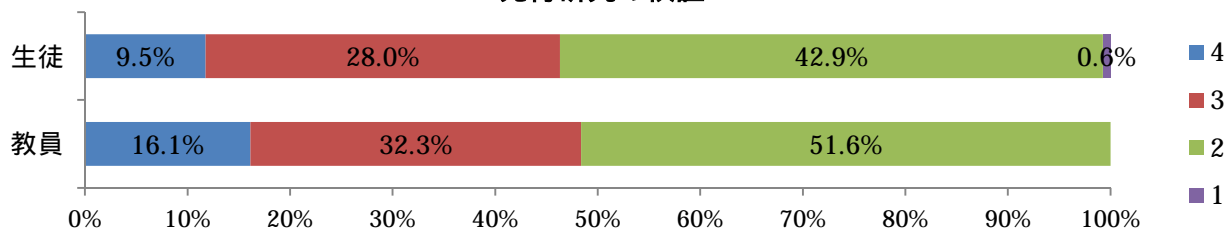
教員と生徒の間で評価の差が最も大きかったのは(d)分析で、スコア 4 または 3 をつけた生徒が 84.5%に対し教員は 67.8%で差は 16.7%であった。ただし、昨年度の 3 年次生(13 回生)は (d)分析で、スコア 4 または 3 をつけた生徒が 81.7%に対し教員は 53.2%で差は 28.5%であった。このことから昨年度より教員と生徒の差は 11.8%縮まっており、これは他の観点でも同様の傾向が見られた。つまり、今年度は教員と生徒の評価の差は確実に小さくなっている。これは教員が生徒に求める資質や能力を生徒自身がルーブリックを通して理解したことによる。この点でもルーブリックを設定した意義が大きかったといえる。

【資料10】論文発表会評価票〔兵庫県立国際高等学校「提案日本の選択」ルーブリック2018年版
(2018.11.16. 実施分)〕

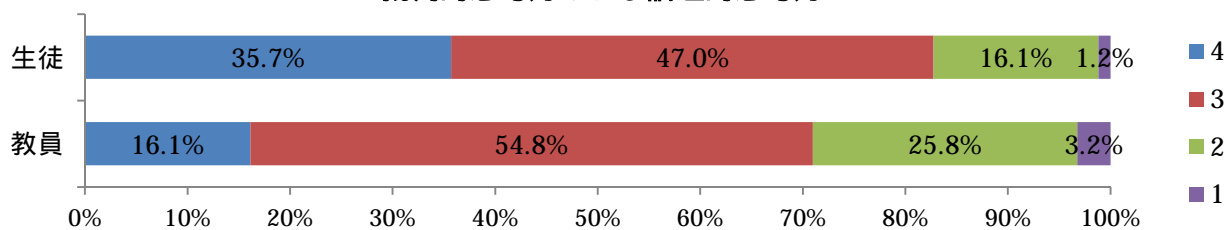
論文発表会評価票(兵庫県立国際高等学校 学校設定科目「提案日本の選択」ルーブリック 2018 年版)	
[評価者] 3年 組 番(名前)	
[発表者] 3年 組 番(名前)	
1 先行研究の検証	
4	国内外の先行研究を複数把握し、それらを比較および検討した結果、妥当な先行研究の 2,3 点(1 点以上の国外の先行研究または国外の公的機関報告書等)を選択し、自らの研究で論究できている。用語の定義を明確にし、自分が明らかにしようとしているテーマに関連づけて活用している。
3	国内の複数の先行研究と国外の先行研究を 1 つ以上検討している。先行研究を比較および整理し、より妥当なものを選択し、論究できている。用語を定義し、自分の調査に関連づけて活用している。
2	国内の先行研究を複数把握し、これまで明らかになった知見を示している。自分の結論のために有用な先行研究のみを活用している。
1	国内の先行研究を読んではいるようだが、用語が整理されておらず、これまでに明らかになった知見を、部分的にしか示していない。
2 批判的思考力および論理的思考力	
4	移民問題を客観的かつ批判的に分析・解釈し、信頼できる情報を選択できている。数値や記録などの根拠を明示し、問題点を明らかにしたうえでその原因を的確に把握している。文章としてはもちろん、発表や質疑応答の場面においても、自分の考えを論理的に説明できている。
3	移民問題を客観的に分析・解釈し、信頼できる情報を選択できている。数値や記録などの根拠を示し、問題点を明らかにしている。文書や発表の場面で、自分の意見を根拠に基づいて明確に述べるができる。質疑応答では、一部で論理的・明快でない場面もある。
2	移民問題について、情報を事実と意見の違いを区別できる。根拠を示し、自分の考えを構築している。発表や質疑応答の場面で、自分の意見がある程度根拠に基づいて説明できる。
1	移民問題について、情報を事実と意見の違いに気がつくことができる。自分の主張に関して根拠が不十分である。発表や質疑応答で、自分なりに考えを述べているが根拠が不十分である。
3 テーマおよび調査目的の設定	
4	先行研究の課題を踏まえたうえで、適切で明確なテーマを設定しており、独創性がある。それについての自分で考えた仮説および調査項目がわかりやすく整理されて示されている。
3	先行研究の課題を踏まえたうえで、適切で実現可能なテーマを設定している。それについての自分で考えた仮説や調査項目が整理されて示されている。
2	実現可能なテーマを設定しているが、先行研究から導かれる課題が示されておらず、独創性は十分とはいえない。テーマについての自分で考えた仮説や調査項目が示されている。
1	問題の設定があいまいで、実現可能なテーマとはいえない。テーマについて、一般的な仮説や調査項目しか示されていない。
4 分析	
4	調査した内容を組織的にまとめ、類似点・相違点・重要型(パターン化)の発見など、すべての観点から検討している。
3	調査した内容をわかりやすくまとめ、類似点・相違点・重要型(パターン化)の発見など、複数の観点から検討している。
2	調査した内容をまとめ、類似点・相違点・重要型(パターン化)など何らかの法則性を検討している。
1	調査で得られた情報をまとめることに終始している。
5 創造的思考力	
4	複数の資料や自らの調査結果を検討した上で、自分なりに課題を設定する。その課題の論点(論争になる点、容易に解決できない点)を把握したうえで、取り組んでいる。統計や文献などの根拠に基づいて、独自の視点から考案した解決策を考えることができる。
3	指導を受けながら、資料や調査結果を検討した上で、自分なりに課題を決めることができる。その課題の論点について、ある程度理解できる。統計や自らの調査結果などの根拠に基づいて、既存の考えから妥当な解決策を選択できる。
2	与えられた課題について、論点を自分なりに理解できる。資料に基づいて解決策を自分なりに選択できる。
1	与えられた課題について、その要素を自分なりに捉えることができる。指導の下、解決策を模索することができる。
[発表者へのアドバイス]	

【資料11】論文発表会評価票（兵庫県立国際高等学校「提案日本の選択」ループブック2018年版）集計結果

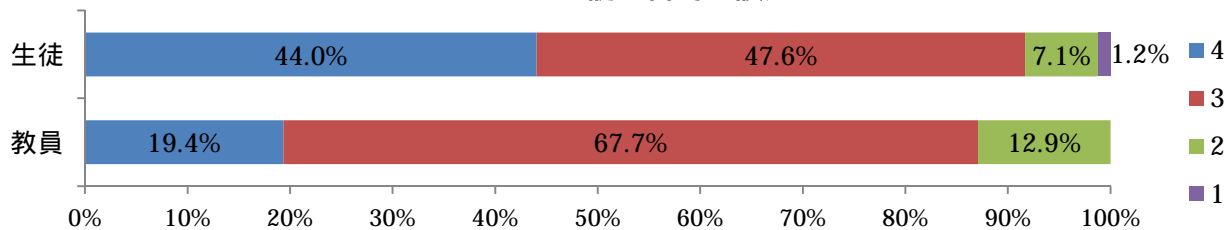
先行研究の検証



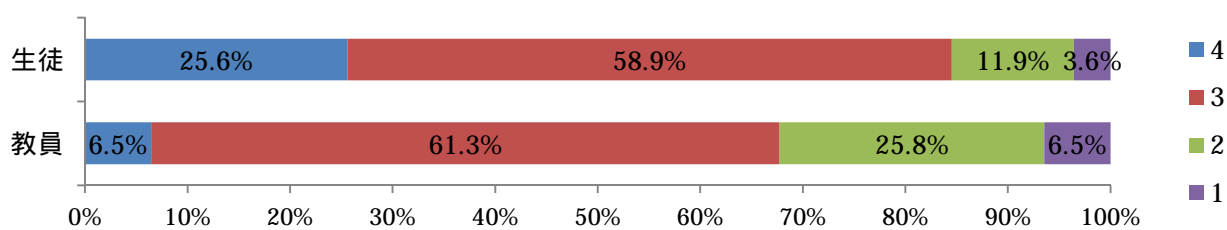
批判的思考力および論理的思考力



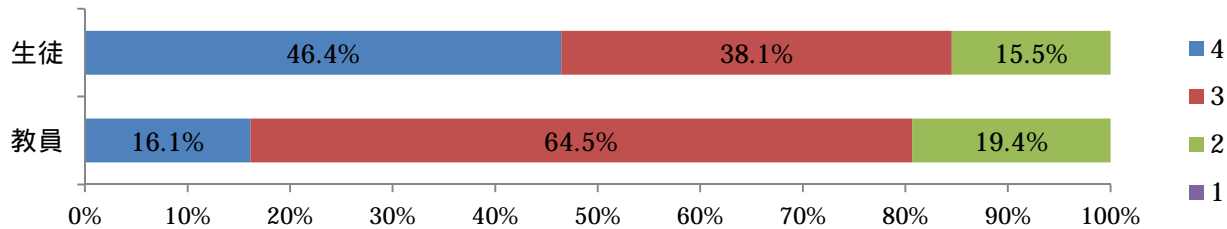
テーマおよび調査目的の設定



分析



創造的思考力



実施報告書

8 課題研究活動の評価

(2) 課題研究活動の評価

4) 「移民マップ」課題研究活動の評価

評価対象

1 年次生 120 人

調査日

「移民マップ」発表会 2018 年 12 月 20 日(木)

経緯

SGH 校内推進委員会において、生徒の「移民マップ」の考察について一部に論理の飛躍がみられ、これは 3 年次において「提案日本の選択」で生徒が作成した論文についても同様の論理の飛躍が見られるという意見が出された。最終的に論文の作成に向けて、基本的な資質や能力を 1 年次から身につけるように取り組むこととした。具体的には、「移民マップ」作成の目的を、(a)情報を的確に理解し効果的に表現する力、(b)社会的事象について資料に基づき考察する力、(c)日常の事象や社会の事象を数理的に捉える力、という 3 つの力を育成することを目的とした。

評価

「移民マップ」発表会を行い、【資料 12】で示したとおり、兵庫県立国際高等学校スーパーグローバルハイスクール「移民マップ」評価シート 2018 年版を使用し、(ア)表現力、(イ)多面的理解、(ウ)論理性、という 3 つの観点について 4 段階で生徒による評価を行った。

分析

【資料 13】のとおり、それぞれの観点について 14 回生(2016 年度)と 15 回生(2017 年度)、16 回生(2018 年度)の評価を比較した。上述(ア)～(ウ)のそれぞれの観点について、スコア 4 または 3 をつけた 14 回生(2016 年度)、15 回生(2017 年度)、16 回生(2018 年度)の差について比較した。(ア)表現力については、14 回生 61.6%、15 回生 85.9%、16 回生 89.7%であった。(イ)多面的理解については、14 回生 86.5%、15 回生 93%、16 回生 94%であった。(ウ)論理性については、14 回生 87.2%、15 回生 94.9%、16 回生 90.9%であった。

この結果から、今年度は(ア)表現力の向上が顕著であった。今年度はグラフを作成し、あわせて人口移動の変化が顕著な 3 つ以上の年代をとりあげ複数のマップを作成したことによる。ちなみに、14 回生は模造紙でマップを作成していたが、15 回生からパソコンを使用してマップを作成したことで表現力は大きく向上した。15 回生はパワーポイントを作成しプレゼンテーションを行ったが、16 回生はグラフとマップ、考察を一枚のポスターにまとめた。このような工夫が表現力の向上につながったといえる。また、(イ)多面的理解についても向上が見られた。これは、移出国のプッシュ要因と移入国のプル要因に分けて考察したことで、生徒の多面的理解が深まったといえる。

兵庫県立国際高等学校 スーパーグローバルハイスクール「移民マップ」2018 年度評価シート

[評価者] 1 年 組 番(名前) _____

[評価の観点 1] 表現力

4	図・マップのいずれについても、年代ごとに 2 つ以上の要素を表示しており、複数の情報を 1 つの図・マップの中で表現する工夫が施されている。また、図には凡例が明示されており、色分け、線の太さなどの表現から、何を伝えたいのかという点が明確で、非常に見やすく理解しやすい図とマップである。
3	図・マップのいずれかに、年代ごとに 2 つ以上の要素を表示しており、複数の情報を 1 つの図またはマップの中で表現する工夫が施されている。また、図には凡例が明示されており、色分け、線の太さなどの表現を工夫している図とマップになっている。
2	図・マップのいずれについても、年代ごとに 1 つの要素を表示しており、1 つの情報を 1 つの図およびマップの中で表現している。また、図には凡例が明示されており、色分け、線の太さなどの表現を工夫しようとしている。
1	図・マップのいずれかに、情報を 1 つの図およびマップの中で表現しているが、凡例が明示されていないなど表記に不備があり、または色分け、線の太さなどの表現が不十分なところがある。

[評価の観点 2] 多面的理解

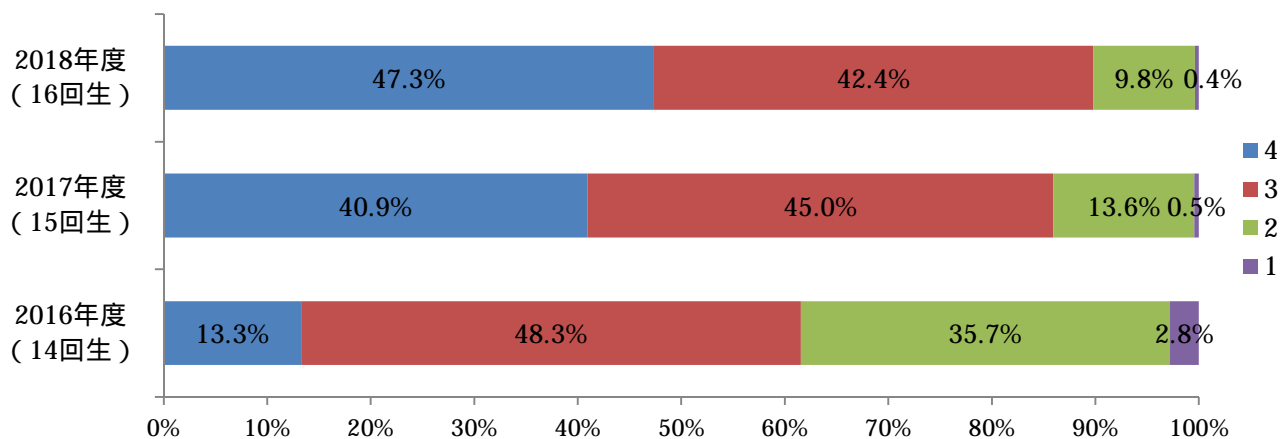
4	移出のプッシュ要因および移入のプル要因について、政治・経済・歴史・文化など現実の枠組みを意識して、合わせて 3 つ以上の視点から述べられている。
3	移出のプッシュ要因および移入のプル要因について、政治・経済・歴史・文化など現実の枠組みを意識して、2 つの視点から述べられている。
2	移出のプッシュ要因および移入のプル要因について、政治・経済・歴史・文化のうち 2 つの視点から述べているが、要因の根拠としては不十分なところがある。
1	移出のプッシュ要因および移入のプル要因について、政治・経済・歴史・文化のうち 1 つの視点のみしか言及していない。

[評価の観点 3] 論理性

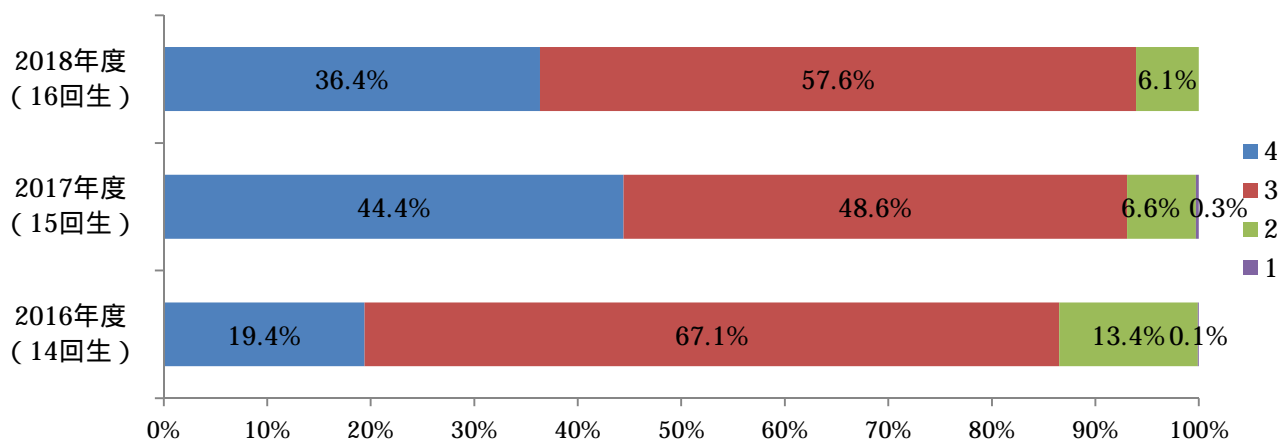
4	考察が移出および移入の要因からの確に導き出されており、論理の飛躍がなく筋が通っており誰もが納得できるものになっている。
3	考察が移出および移入の要因から導き出そうとしており、論理の飛躍がなく納得できるものになっている。
2	考察が移出および移入の要因から導き出そうとしているが、論理に飛躍が感じられる。
1	考察が移出および移入の要因から導き出そうとしておらず、論理が飛躍している。

【資料13】「移民マップ」の評価結果 2016年度 (14回生)・2017年度 (15回生)・2018年度 (16回生) 比較
 (14回生: 2016年12月15日(木)、15回生: 2017年9月11日(月)、16回生: 2018年12月20日(木) 実施分)

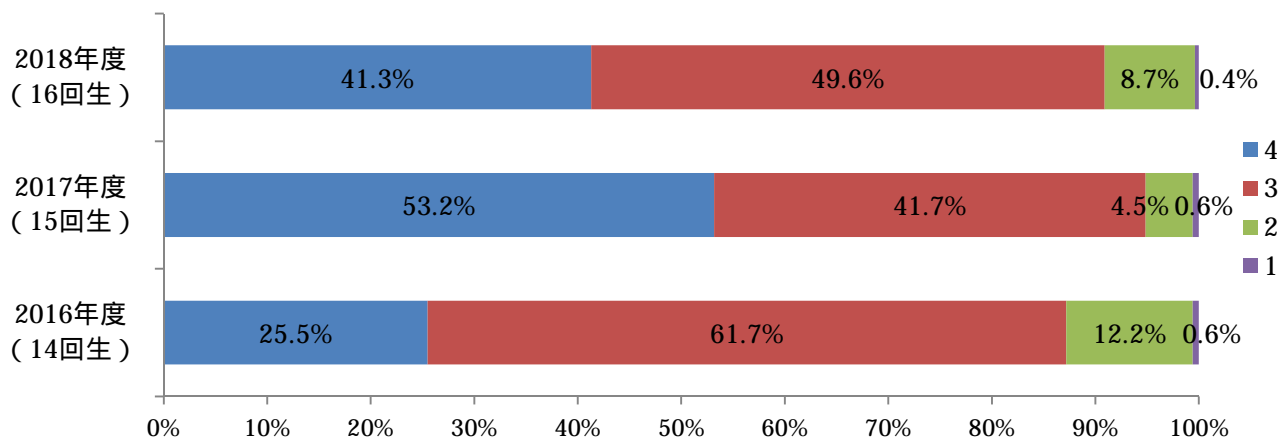
表現力



多面的理解



論理性



実施報告書

8 課題研究活動の評価

(2) 課題研究活動の評価

5) ディベート課題研究活動の評価

評価対象

1 年次生 118 人

調査日

ディベート大会予選 2018 年 9 月 13 日(木)、9 月 20 日(木)

ディベート大会決勝 2018 年 10 月 1 日(月)

経緯

一昨年度のディベート決勝において審査員の大学教員より「応答力」および「論理的思考力」の育成の必要性が指摘された。そこで、昨年度は「応答力」の育成を目指してディベートに取り組んだ結果、ルーブリック評価では一昨年度より「応答力」の向上が見られた。しかし、校内推進委員会でその内容を検討したところ、生徒は調べてきた資料を述べることはできているが、その応答は十分に相手の論理に則したものになっていないという反省点が出された。そこで今年度は、相手の議論に則したディベートができる「応答力」の育成を目指して課題研究活動に取り組みことにした。

評価

予選および決勝も、評価には【資料 14】「兵庫県立国際高等学校 スーパーグローバルハイスクール ディベート大会評価シート」を使用し、(a)調査力、(b)応答力、(c)プレゼンテーション力、(d)チームワーク(協力)、という 4 つの観点について 4 段階で生徒が評価を行った。

分析

【資料 15】で示したとおり、ディベート大会決勝では、ジャッジによる評価が最も高かったのは(d)チームワーク(協力)で、スコア 4 をつけた生徒は 60.9%であった。一方、ジャッジによる評価が最も低かったのは(c)プレゼンテーションでスコア 4 をつけた生徒は 26.1%であった。これは、今年度より C.C.C.(総合的な学習の時間)が週に 1 時間から 2 時間に増えたことで生徒の協働が深まったことによりチームワークのスコアが高くなったといえる。

次に 14 回生、15 回生、16 回生の比較を行った。【資料 16】で示すとおり、(b)応答力で、スコア 4 または 3 をつけた生徒は 14 回生(2016 年度)71%、15 回生(2017 年度)86.5%、16 回生(2018 年度)91.6%であった。(c)プレゼンテーションで、スコア 4 または 3 をつけた生徒は 14 回生(2016 年度)58%、15 回生(2017 年度)81.7%、16 回生(2018 年度)78.8%であった。最後に(d)チームワークで、スコア 4 または 3 をつけた生徒は 14 回生(2016 年度)58%、15 回生(2017 年度)81.7%、16 回生(2018 年度)78.8%であった。

このことから、今年度の 16 回生は応答力の向上が見られ、これまでの最高のスコアとなった。決勝における特別審査員の講評においても、応答力を評価していただいた。これは、共通教材を使用することにより、相手の立論を予想し、質問と反論を構築することができたことによる。

【資料 14】兵庫県立国際高等学校 スーパーグローバルハイスクール ディベート大会評価シート

16 回生(2018 年版) 兵庫県立国際高等学校 SGH ディベート大会決勝 評価シート

1 調査力：準備・予想・非認知スキル

4	<p>【文献】5つ以上の文献を参照し、立論や想定される質問への応答を準備できている。どの資料も筆者の背景や立場を調べたうえで、例えば、法的に定められているのか、筆者の願望なのか、といった信頼できる情報源か否か、最新の情報が否かといった点について自分たちで判断し、批判的に吟味して用いることができている。</p> <p>【用語】自分たちが用いる用語（在留資格など）について、類似する用語との違いを調べ、定義をわかりやすく述べた後、正確に使用している。</p> <p>【論理】立論の論理は明確で、聞き手にとってわかりやすい。政治・経済・治安・福祉など現実の枠組みを意識して、3つ以上の視点から立論できている。その工夫として、引用や図・グラフが示されているフリップなどの資料を用意している。どの主張・資料にも対応する出典を明記したうえで、聞き手が見やすいように配慮されている。十分に説得力のある立論となっている。</p>
3	<p>【文献】3つ以上の文献を参照し、立論や想定される質問への応答を一部準備できている。情報の妥当性について考慮しながら用いることができている。</p> <p>【用語】自分たちが用いる用語（在留資格など）について、定義をわかりやすく述べた後、ほぼ正確に使用している。</p> <p>【論理】立論の論理はわかりやすい。主張・資料にも対応する資料が一部用意されている。一定の説得力のある立論となっている。</p>
2	<p>【文献】情報の妥当性についての考慮は不十分ながら、複数の文献を参照し、立論を準備できている。質問を想定しても、少しい外れである。</p> <p>【用語】用語（在留資格など）を使用できているが、発表後にさらなる調査が必要である。</p> <p>【論理】立論では資料に基づいて述べることができている。</p>
1	<p>【文献】与えられた文献を参照しながら、立論は準備できている。相手の質問は想定できていない。</p> <p>【用語】用語（在留資格など）の使用が正しくなく、誤解を招く。</p> <p>【論理】資料は参照できているが、論理を裏付ける効果的な資料とはいえない。</p>

2 応答：即興性

4	<p>【質問】相手の論理を的確に理解したうえで、論点に関して効果的な質問を3つ以上できている。相手の文献の信頼性等を見極めながら、質問等で論理の不備や説明を避けた点を指摘することができる。</p> <p>【反論】質問では予測の有無にかかわらず、応答できている。反論では、相手の質問に効果的に応答しながら、事前に想定した点は資料を効果的に用いながら応じ、想定していないものについても、客観的に反論することができる。</p> <p>【最終弁論】立論からの一貫性を保持しながらも、ディベート全体の議論を踏まえたうえで、資料を参照しながら妥当な結論を導いている。十分に説得力のある結論となっている。</p>
3	<p>【質問】論点に関して効果的な質問を1つ以上できている。質問等で論理の不備を指摘することができる。</p> <p>【反論】質問では応答できている。反論では、相手の質問に応答しながら、客観的に反論することができる。</p> <p>【最終弁論】立論からの一貫性を保持しながらも、ディベートの議論を一部踏まえたうえで妥当な結論を導いている。一定の説得力のある結論となっている。</p>
2	<p>【質問】論点に関して少々ずれているが、質問を複数用意できている。</p> <p>【反論】質問では応答できている。反論では、一部相手の主張をくみ取れないところもあるが、何とかできている。</p> <p>【最終弁論】立論からの一貫性を保持しつつ、ある程度妥当な結論を導いている。議論をもう少し踏まえられとよいか。</p>
1	<p>【質問】質問は用意できた。</p> <p>【反論】応答に課題が見られる。</p> <p>【最終弁論】結論は言えているが、論理的ではない、あるいは、立論と代り映えしない。</p>

3 プレゼン：演出

4	<p>【発表】自分が相手からどのようにみられているかという点に自覚的で、顔を上げて、聞き手を見ながら、適切な声量で発表・応答することができている。準備の有無にかかわらず、相手に弱さを見せずに反論をすることができている。</p> <p>【言葉遣い】議論全体が円滑かつ気持ちの良いものとなるように、質問・反論であっても、相手や様々な立場を配慮した言葉遣いができている。</p> <p>【時間】立論・質問・反論・最終弁論のいずれにおいても、伝えたいことを時間内に収めるとともに、制限時間前5秒よりも早く終わり、待つことがない。</p>
3	<p>【発表】メモに目を落としながらも、適切な声量で発表・反論をすることができている。</p> <p>【言葉遣い】妥当な言葉遣いで議論が進められている。</p> <p>【時間】立論・質問・反論・最終弁論の少なくとも2つ以上で、伝えたいことを時間内に収めるとともに、制限時間前15秒よりも早く終わり、待つことは少ない。</p>
2	<p>【発表】メモを読みながら、発表・反論をすることができている。聞き取りやすい声量で発表できるのが望ましいという印象を受けた。</p> <p>【言葉遣い】妥当な言葉遣いで議論が進められている。</p> <p>【時間】立論・質問・反論・最終弁論において、制限時間を超える場面や、時間内に収まっても30秒程度間があるのなど、時間を効果的に用いられるとよいと思われる。</p>
1	<p>【発表】メモを読み上げるだけで、聞き取りにくい。</p> <p>【言葉遣い】不適切な言葉遣いが見られる。</p> <p>【時間】立論・質問・反論・最終弁論において、制限時間を大幅に超える場面や、時間内に収まっても1分以上秒程度間があるのなど、時間を効果的に用いられていない。</p>

4 協力：チームワーク・非認知スキル

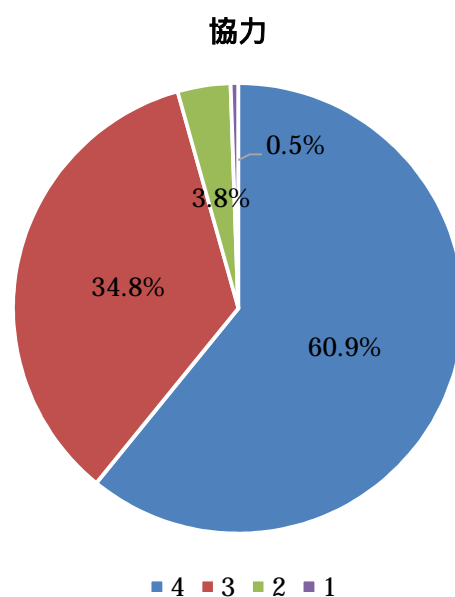
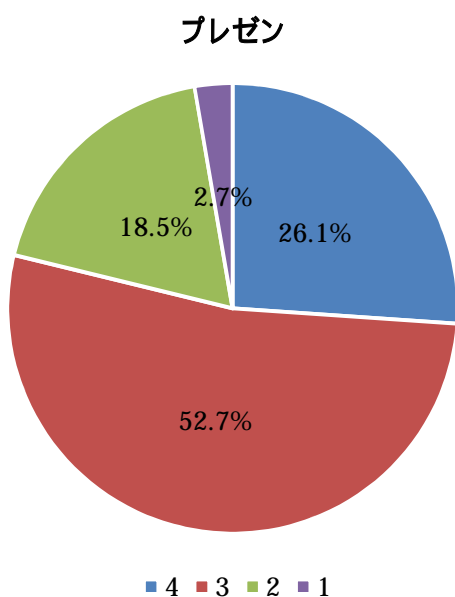
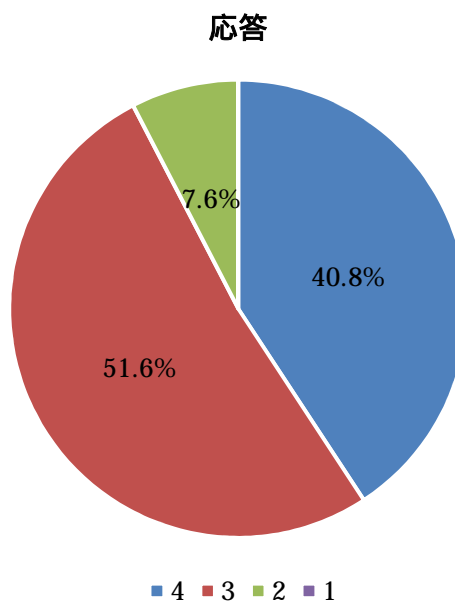
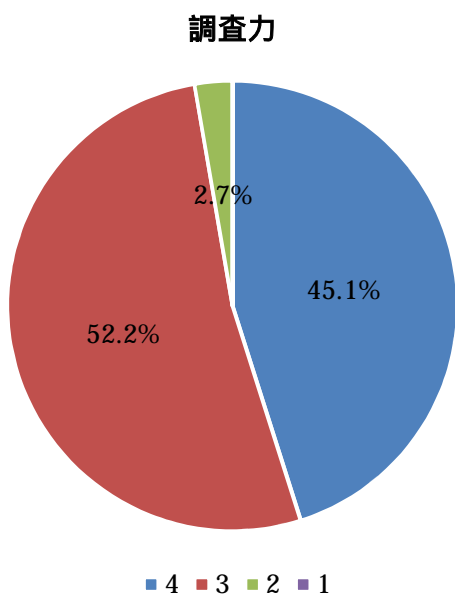
4	<p>【役割】準備・発表時点のいずれにおいても、班全体の動きの中での自分の役割を検討し、前に出る、サポートに回るといったいずれの役割でもチームの一員として活躍できている。</p> <p>【応答】質問・反論・最終弁論を考える場面では、チームの一員として取り組んでいる。班全体での話し合い、小グループなど戦略的に作戦タイムを使うことができている。</p>
3	<p>【役割】自分の役割をきちんと遂行できている。</p> <p>【応答】質問・反論・最終弁論を考える場面では、チームの一員として取り組んでいる。</p>
2	<p>【役割】自分の役割に不満を感じながらも、遂行できている。</p> <p>【応答】質問・反論・最終弁論を考える場面では、一部の生徒としかかかわれていないため、チーム全体に意見を反映することに課題が見られる。</p>
1	<p>【役割】自分の役割に不満を感じ、意欲が見られない。</p> <p>【応答】質問・反論・最終弁論を考える場面では、話し合わない、あるいは、一部の生徒と関係のない話をする場面も見られる。</p>

評価は下に記載し、合計点を書くこと

	肯定側 (組 班)	否定側 (組 班)
1 調査力：準備・予想・非認知スキル	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
2 応答：即興性	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
3 プレゼン：演出	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
4 協力：チームワーク・非認知スキル	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
【合計点】	点	点

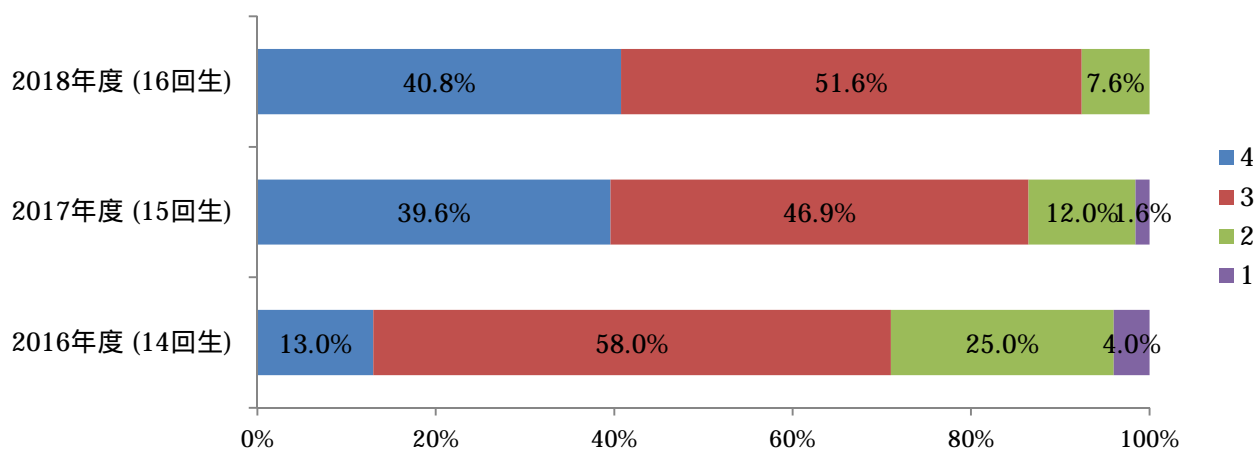
【講評】

【資料15】ディベート大会決勝の評価結果(2018.10.1.実施分)

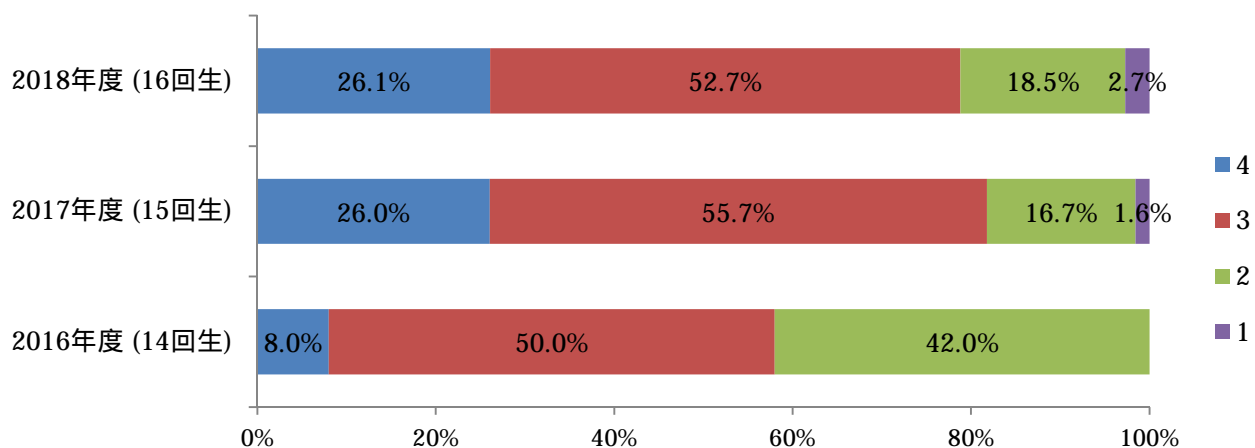


【資料16】ディベート大会決勝の評価 2016年度 (14回生)・2017年度 (15回生)・2018年度 (16回生) 比較

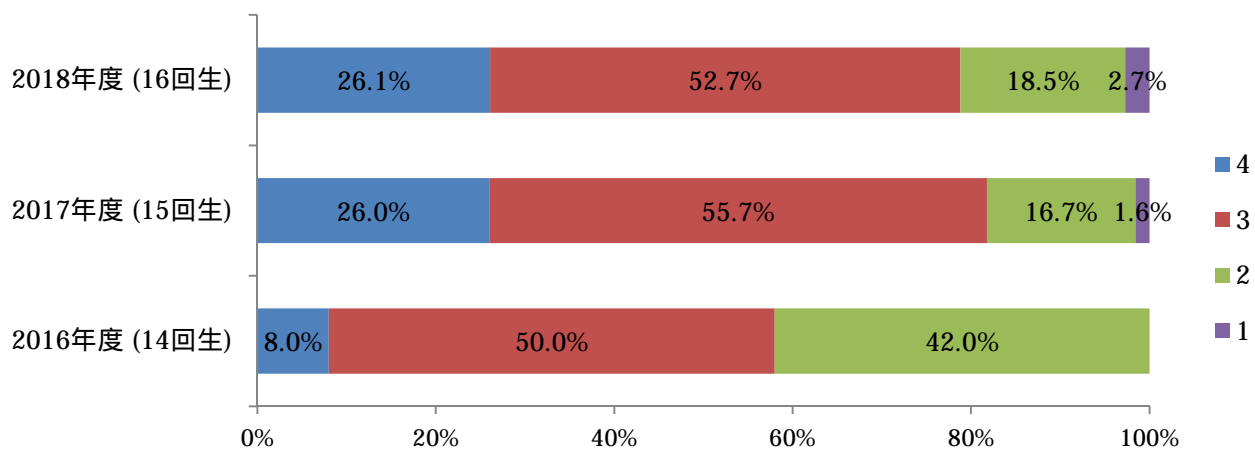
応答



プレゼンテーション



チームワーク



実施報告書

8 課題研究活動の評価

(2) 課題研究活動の評価

6) 中間発表会における評価

評価対象

1 年次生 4 人、2 年次生 11 人、3 年次生 3 人 すべて発表者

調査日

中間発表会 2018 年 12 月 19 日(水)

評価

中間発表会で発表を担当した 1 年次生 4 人、2 年次生 11 人、3 年次生 3 人に自己評価を行った。評価には〔資料 17〕兵庫県立国際高等学校スーパーグローバルハイスクール「中間発表会」自己評価シート 2018 年版を使用した。(a)プレゼンテーション力、(b)上達感、という 2 つの観点について 4 段階で評価を行った。また、今回の発表会で「何ができたか、または何ができなかったか」を自由記述で答えさせた。あわせて、外部支援員による評価を行った。評価票は本校の SGH ルーブリック〔資料 1〕をもとに、(ア)プレゼン:演出力、(イ)批判的思考力および論理的思考力、(ウ)分析、(エ)創造的思考力、という 4 つの観点について 4 段階の評価を行っていただいた。また、感想もあわせて書いていただいた。

分析

〔資料 18〕のとおり、それぞれの観点について、スコア 4 をつけた生徒の割合の差について今年度における年次間の比較してみた。(a)プレゼン:演出力においては、3 年次生 0%、2 年次生 0%、1 年次生 0%であった。(b)上達感については、3 年次生 100%、2 年次生 0%、1 年次生 0%であった。プレゼンテーションに関しては、発表者すべてが満足していないことがわかった。一方、上達感に関しては、3 年次生の全員が上達したと感じていることがわかった。これは昨年度も同じ傾向であった。これは 3 年次生の「1 年生の時は緊張で震えていたが、今年は落ち着いてプレゼンできた。」、「全く緊張しなかったので、自分でも驚いた。」というコメントから、経験をつむことで達成感が向上したことがわかる。1 年次生の「自分でも聞いていてわかるくらい、声が細かった。」というコメントと対照的であった。1 年次生も経験をつむことで将来、達成感が得られることが予見できる。一方、外部支援員は「全ての生徒が自信を持って堂々と発表している姿に驚いた。」というコメントから、1 年次生から 3 年次生すべての生徒が自分のベストのパフォーマンスをしていたことがわかる。経験により、自信が付き、達成感が得られ、自尊感情が深まることがわかる。課題研究活動は継続し努力を重ね、経験をつむことが重要であることがわかった。

兵庫県立国際高等学校スーパーグローバルハイスクール「中間発表会」自己評価シート 2018 年版

1 プレゼン：演出力

あなたのこの中間発表会のプレゼンテーションについて、客観的(感情的ではなく)に評価をしてください。

4	【発表】自分が相手からどのようにみられているかという点に自覚的で、顔を上げて、聞き手を見ながら、適切な声量で発表することができた。 【言葉遣い・読み・発音】発表会全体が円滑かつ気持ちの良いものとなるように、相手や様々な立場を配慮した言葉遣いができた。また、用語の読み方や発音を事前に調べ、正しい読み方および発音が出来た。
3	【発表】メモに目を落としながらも、適切な声量で発表をすることができた。 【言葉遣い・読み・発音】妥当な言葉遣いで説明が進めることができた。用語について正しい読み方および発音が出来た。
2	【発表】メモを読みながら、発表をすることができた。発表の声量は十分ではなかった。 【言葉遣い・読み・発音】妥当な言葉遣いで説明が進めることができた。用語について読み方や発音を事前に調べるなどの準備が不十分であった。
1	【発表】メモを読み上げるだけで聞き手のことを考えることができなかった。 【言葉遣い・読み・発音】不適切な言葉遣いがあったと思う。用語について正しくない読み方や正しくない発音があった。

2 プレゼン:上達感

あなたの中間発表会のプレゼンテーションに関して、これまでの発表会と比較した気持ちを表してください。

4	【過去のプレゼンとの比較】これまで行った発表におけるプレゼンよりも、自覚的に顔を上げたり、聞き手を見たり、適切な声量で発表することができた。 【達成感】自分が思った通りのプレゼンをすることができた。
3	【過去のプレゼンとの比較】これまで行った発表におけるプレゼンよりも、自覚的に顔を上げたり、聞き手を見たり、適切な声量で発表するように努力はできた。 【達成感】十分とは言えないが自分の思うようなプレゼンができた。
2	【過去のプレゼンとの比較】自覚的に努力をしようとしたが、これまで行った発表におけるプレゼンと同じようにメモを読みながらの発表になってしまった。 【達成感】努力していれば、もう少し良いプレゼンができた。
1	【過去のプレゼンとの比較】これまで行った発表におけるプレゼンと同じようにメモを読みながらの発表になってしまった。 【達成感】満足できるプレゼンができなかった。

3 プレゼンテーションで大切なのはあなたが伝えたことが聴衆にどれだけ届いたということです。あなたのプレゼンテーションは聴衆に十分に伝わったと思いますか。あなたができたこと、および何ができなかったということを具体的に文章で書いてください。

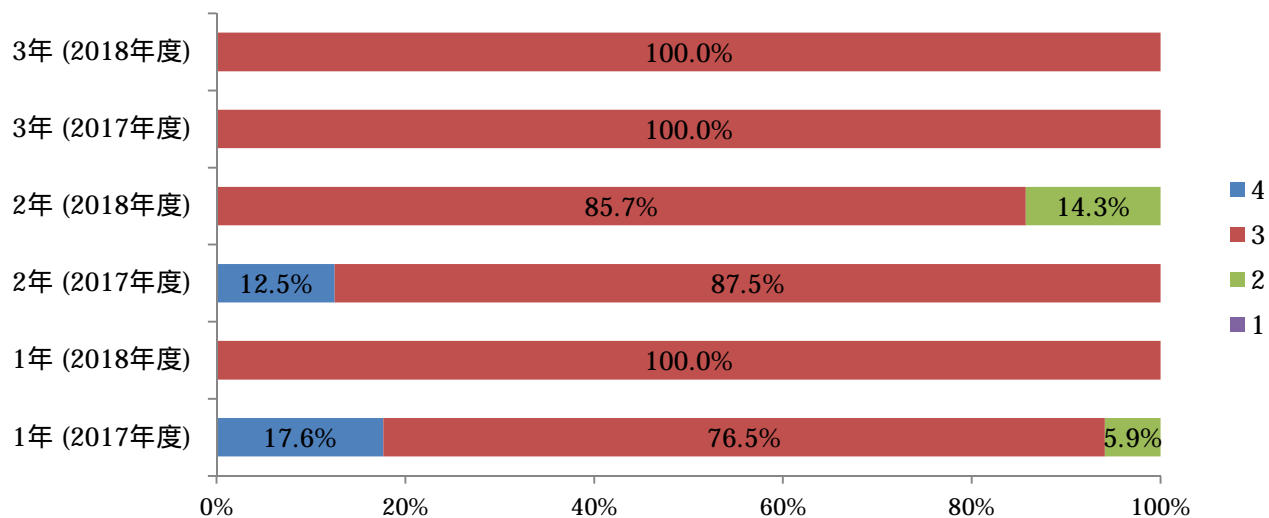
上記 1 と 2 の評価は下に記載し、合計点を書くこと

	自己評価
1 プレゼン:演出力	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
2 プレゼン：上達感	4 ・ 3 ・ 2 ・ 1
【合計点】	点

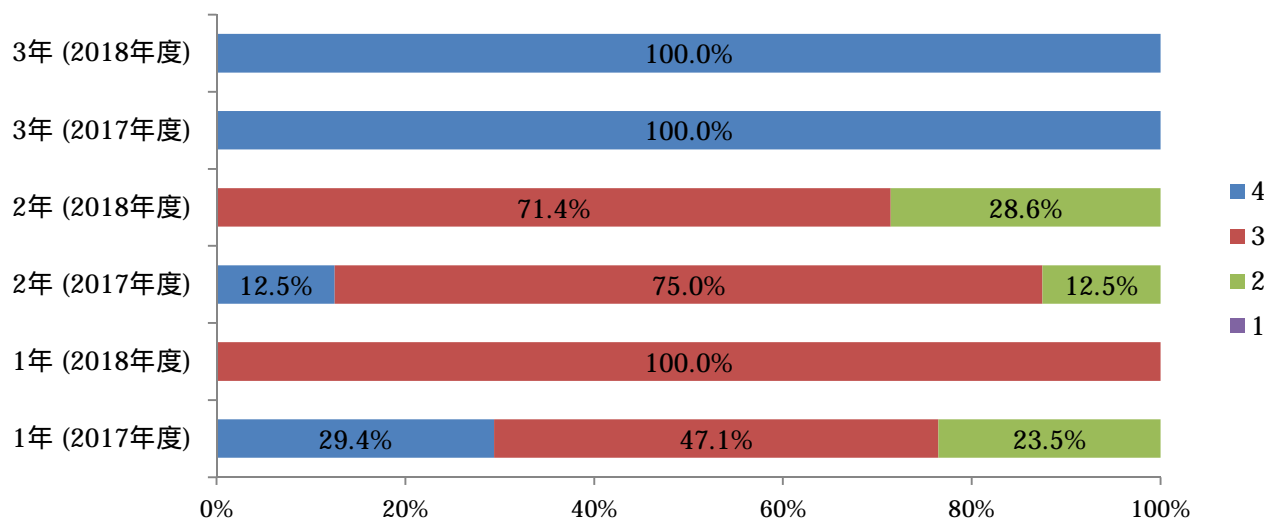
評価者 _____ 年 _____ 組 _____ 番(氏名) _____

【資料18】中間発表会の評価結果(2017.12.19.および2018.12.19.実施分)

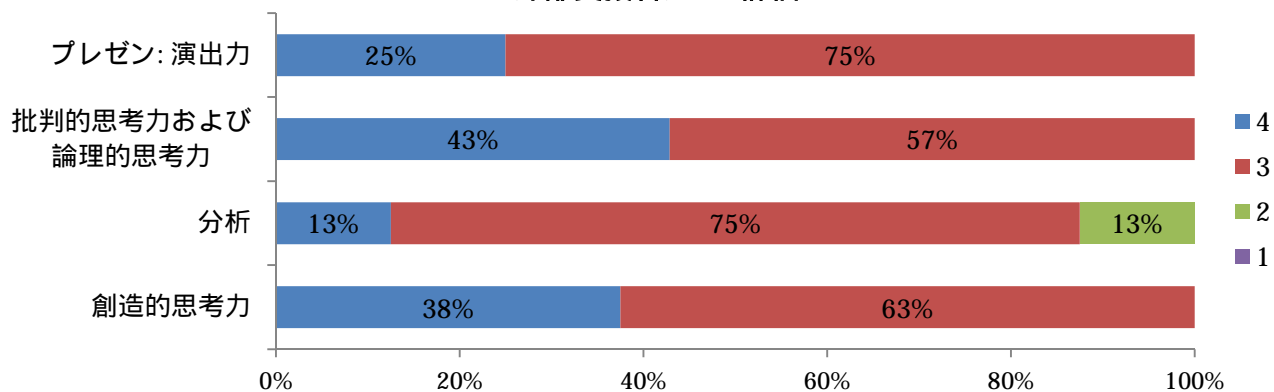
プレゼン: 演出力



プレゼン: 上達感



外部支援者による評価



3 プレゼンテーションで大切なのはあなたが伝えたかった事が聴衆にどれだけ届いたということです。あなたのプレゼンテーションは聴衆に十分に伝わったと思いますか。あなたができたこと、および何ができなかったということを具体的に文章で書いてください。

1 年次

- ・緊張して少し早口になってしまったけど、以前より意識して前を見ることができたと思う。
- ・ある程度暗記をして発表できた。
- ・口がうまく回らず、かんでしまった。
- ・自分で聞いていても分かるくらい、声が細かった。と

2 年次

- ・みんなで協力して、パワーポイントを変えるタイミングなどはしっかりできたと思う。
- ・マイクから離れた場所から話してしまい、聞こえづらかったかもしれない。
- ・ただ単に結果を伝えただけで、傾向などの聞き手の理解を深める努力が足りなかった。
- ・顔を上げて話すことができた。
- ・原稿を覚えておらず、ところどころ読み上げている感じになり、残念だった。

3 年次

- ・全く緊張しなかったことが、自分でも驚いた。
- ・1年生の発表の時は緊張でガタガタ震えていたが、今年は落ち着いてプレゼンができた。
- ・アニメーションの操作がうまくいかなかった。
- ・聴衆に響き、伝わることを目標に発表できた。発表後、分かりやすく、面白いという声をもらうことができた。

外部支援者

- ・おおむねよく研究されていると感心した。
- ・年々研究内容が深くなっていて素晴らしい。
- ・2年次の海外研修およびドイツでの聞き取り調査を行ったのは良かった。
- ・非常にレベルの高い課題発表があり、素晴らしかった。
- ・英語によるプレゼンテーションもあり、良かった。
- ・事前研究・調査・まとめ・考察・提案の流れがあり、内容がよく分かった。
- ・全ての生徒が自信を持って堂々と発表している姿に驚いた。
- ・学年が上がるにつれて複数の資料を参考にした分析ができている。
- ・スライドを変える「間」など、説明を聞き手が整理できる時間を考慮しているのは良かった。
- ・発表をもう少しゆっくりした方が判り易い。特に英語でのプレゼンは読むことに一生懸命の感があった。メリハリをつけるとより伝わると思う。

兵庫県立国際高等学校

〒659-0031 兵庫県芦屋市新浜町1-2

TEL. 0797-35-5931 FAX. 0797-35-5932

<http://www.hyogo-c.ed.jp/~kokusai-hs/>